

韻書と等韻図Ⅱ（完）

太田 斎

〔注〕

述語の説明が後回しになってしまっている部分がある。この注は本文が十分理解できた上で読むものと心得て頂きたい。本文同様、一々参考文献に当らなくとも理解できるように心掛けたが、記述が長すぎるようになり、体例の統一については挫折してしまった。

3. 中国語音韻史の研究手法

(1) 文法や語彙は本稿の議論の対象としていないが、少し触れておく。口語と文語の乖離を知ることのできる最も早い資料としては六朝末期の劉義慶 Liú Yiqing (403-444) の手になる『世説新語』がある。この文献は、有名人のエピソード集といったものであるが、その文体は当時の口語を比較的よく反映するとされ、特にその会話部分の文体はそれまでの文言とは異なっている。その成書年代からして、遅くとも4、5世紀にはその乖離が既にあったことが確認できる。話し言葉と書き言葉の対比が極端なものとしては、6世紀前半に成ったとされる、「奏彈劉整」という南朝梁の御史中丞任昉 (441-513) が劉整を弾劾する奏上文があり、梁の昭明太子蕭統の『文選』巻40に収められている。当時流行した駢儷体という凝った文体で書かれているのだが、劉寅の妻范氏、范氏の下男苟奴、劉整の下女采音、劉整亡父の下男海蛤といった、無学であった者達の証言を引用するところでは、当時の口語が顔を出している。相対的に文言で書かれた文献でもセリフ部分は地の文に比べ、口語的要素が出易いとはいえ、これほどまでに対比的な資料は稀有である。「奏彈劉整」のセリフ部分に見られる口語は裁判が絡む内容であるが故に証言の正確さが求められ、そして証言者が無学であったことで存在し得たのであろう。『世説新語』のセリフにせよ、「奏彈劉整」の証言部分にせよ、文字化されるに当たり、どこまで忠実に当時の口語を反映していたか正確には分からない部分もあり、口語文体としてどこまで広い地域、階層に受容されていたかもまたはっきりしないところがあるが、断片的な口語資料が歴史文献の中に残されている例は確かにあることはある。後には士大夫以外の読者層の出現により、「白話体」と呼ばれる口語文体が小説や戯曲のような俗文学文献に残されるようになった。このような俗文学文献でも、地の文とセリフ部分には文体差が見られ、相対的には前者は文語的、後者は口語的要素が強く、登場人物によっては広い地域の読者に分かる程度の方言的要素のあるセリフが用いられる場合もある。総じて言えば、俗文学はエンターテインメントの読み物であって、そこで用いられるこのような文体は、極端な言い方をすれば、書き言葉の歴史の中では日陰者であって、公的な用途において一貫して用いられる文言の蔭で近代に至るまで規範化が行われることもなかった。つまり現代に残されている圧倒的多数の文献は多くが文言で書かれた文献で、書かれた当時の言語状況を知る手がかりは殆ど得られない。

4.2 テキスト概観

- (2) 大谷大学蔵本については同図書館コレクションの貴重書データベースでカラー写真を見ることができる(請求番号 021-40-1, 全 55 コマ)。

http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/cont_06/pages_06/0627S/06270001.html

- (3) 永禄本は以下のサイトで見る事ができる。

国文学研究資料館のサイト(国文研貴重書, 99-129,W)。全頁のカラー写真が閲覧可能。

http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=099-0129&IMG_NO=1&IMG_KIND=JPEG&L_SIZE=-100&DX_SIZE=800&DY_SIZE=600&CX_SIZE=16024&CY_SIZE=8758

京都大学図書館のサイトで谷村文庫永禄本のカラー写真を公開しており、手軽に見ることができる。こちらも全頁閲覧可能(4-87/イ/1 貴; マイクロフィルム P4923)。

<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/t107/image/1/t107s0001.html>

この他、国立国会図書館のサイトでも、国語学者亀田次郎旧蔵本の書影が公開されているが、こちらは2葉のみ(WA6-81)。

<http://www.ndl.go.jp/exhibit/50/html/catalog/c037.html>

5.1. 『切韻』、切韻系韻書、『広韻』そしてその構成原理

- (4) 四部叢刊初編所収本には次のようにある。

「此書別出移(>移)鬱二字為一部。注云、陸與齊同。今別。然則今韻从陸本。疑此本為是。

日本語: この書では(齊韻から)移、鬱の二字を取り出して、分けて一つのグループ(=韻目)としている。そして注で陸法言は齊韻と同じグループにしているが、今別のグループとする、と言っている。しかし現行の切韻では陸法言の分け方に従っている。恐らくはこの書の方が正しいと思われる。」(冊三 p.473 上)

この移韻は去声のみの韻とされる祭韻に相配する平声韻であるとする説がある。松尾良樹 1978「祭韻系の問題」参照。

5.2. 四声相配

- (5) 『広韻』は極めて整然とした四声相配の状況を示しているが、切韻系韻書の様々なテキストを見ると、入声の配列順は必ずしも『広韻』のようにはなっていない。入声韻は平上去声と比べ、数が少ないためか、或は入声については相配の概念が徹底しないということなのか、具体的に言うと、切三、王一、王三、蔣斧本唐韻、P.2014 などでは特に山攝諸韻の後の梗攝、咸攝、宕攝、曾攝、咸攝と続く配列順は実はかなり乱れていて、相配する平上去声と対応するような順序には並んでいない。この乱れは原本『切韻』の段階からあったものようである。ということは原本『切韻』編纂時の段階では平上去声の三声相配に止まっており、切韻系韻書の増補改訂が次々に行われる中で、等韻学の知見を盛り込み、入声をも含めた厳密な四声相配となったものかも知れない。以下、切韻系韻書間の四声相配状況を示す。数字は各テキストにおける声調毎の韻目配列順を示す。本文におけると同様、一行に並ぶものは四声相配の関係にある韻

である。撰は参考までに付けた。番号のみで、「？」を附してあるところは、その部分が現存せず、確認できないが、恐らくあったであろうと推測されるものである。

原本『切韻』（上田 1975 推定）

平声	上声	去声	入声	撰
1 東	1 董	1 送	1 屋	1 通
2 冬		2 宋	2 沃	
3 鍾	2 腫	3 用	3 燭	
4 江	3 講	4 絳	4 覺	2 江
5 支	4 紙	5 寘		3 止
6 脂	5 旨	6 至		
7 之	6 止	7 志		
8 微	7 尾	8 未		
9 魚	8 語	9 御		4 遇
10 虞	9 麌	10 遇		
11 模	10 姥	11 暮		
		12 泰		
12 齊	11 薺	13 霽		5 蟹
		14 祭		
13 佳	12 蟹	15 卦		
14 皆	13 駭	16 怪		
		17 夬		
15 灰	14 賄	18 隊		
16 哈	15 海	19 代		
		20 廢		
17 真	16 軫	21 震	5 質	6 臻
18 臻			7 櫛	
19 文	17 吻	22 問	6 物	
20 殷	18 隱	23 焮	8 迄	
21 元	19 阮	24 願	9 月	(→7 山)
22 魂	20 混	25 慁	10 沒	
23 痕	21 很	26 恨		
24 寒	22 旱	27 翰	11 末	7 山
25 刪	23 潛	28 諫	13 黠	
26 山	24 產	29 禫	12 黠	

27 先	25 銑	30 霰	14 屑	
28 仙	26 獮	31 線	15 薛	
29 蕭	27 篠	32 嘯		8 效
30 宵	28 小	33 笑		
31 肴	29 巧	34 效		
32 豪	30 皓	35 号		
33 歌	31 哿	36 箇		9 果
34 麻	32 馬	37 禡		10 假
35 覃	33 感	38 勘	20 合	16 咸 (一等韻)
36 談	34 敢	39 闕	21 盍	
37 陽	35 養	40 漾	27 藥	11 宕
38 唐	36 蕩	41 宕	28 鐸	
39 庚	37 梗	42 敬	19 陌	12 梗
40 耕	38 耿	43 諍	18 麥	
41 清	39 靜	44 勁	17 昔	
42 青	40 迥	45 徑	16 錫	
43 尤	41 有	46 宥		14 流
44 侯	42 厚	47 候		
45 幽	43 黝	48 幼		
46 侵	44 寢	49 沁	26 緝	15 深
47 鹽	45 琰	50 豔	24 葉	16 咸 (三、四等韻)
48 添	46 忝	51 禡	25 帖	
49 蒸	47 拯	52 證	29 職	13 曾
50 登	48 等	53 嶝	30 德	
51 咸	49 賺	54 陷	22 洽	16 咸 (二、三等韻)
52 銜	50 檻	55 鑑	23 狎	
53 嚴			31 業	
54 凡	51 范	56 梵	32 乏	

箋注本『切韻』(切二、切三およびP3693,3694,3696,S6176に基く。周祖謨1983に拠る)

平声	上声	去声	入声	撰
1 東	1 董	1 送	1 屋	1 通
2 冬		2 宋	2 沃	
3 鍾	2 腫	3 用	3 燭	
4 江	3 講	4 ？	4 覺	2 江

5 支	4 紙	5 寘		3 止
6 脂	5 旨	6 ？		
7 之	6 止	7 ？		
8 微	7 尾	8 ？		
9 魚	8 語	9 ？		4 遇
10 虞	9 麌	10 ？		
11 模	10 姥	11 ？		
		12 ？		
12 齊	11 霽	13 霽		5 蟹
		14 祭		
13 佳	12 蟹	15 卦		
14 皆	13 駭	16 怪		
		17 夬		
15 灰	14 賄	18 隊		
16 哈	15 海	19 ？		
		20 廢		
17 真	16 軫	21 震	5 質	6 臻
18 臻			7 櫛	
19 文	17 吻	22 問	6 物	
20 殷	18 隱	23 焮	8 迄	
21 元	19 阮	24 願	9 月	(→7 山)
22 魂	20 混	25 慁	10 沒	
23 痕	21 很	26 恨		
24 寒	22 旱	27 ？	11 末	7 山
25 刪	23 潛	28 ？	13 鏞	
26 山	24 產	29 ？	12 黠	
1 先	25 銑	30 ？	14 屑	
2 仙	26 獮	31 ？	15 薛	
3 蕭	27 篠	32 嘯		8 效
4 宵	28 小	33 笑		
5 肴	29 巧	34 效		
6 豪	30 皓	35 号		
7 歌	31 哿	36 箇		9 果
8 麻	32 馬	37 禡		10 假
9 覃	33 感	38 勘	20 合	16 咸 (一等韻)

10 談	34 敢	39 闕	21 盍	
11 陽	35 養	40 漾	27 藥	11 宕
12 唐	36 蕩	41 ?	28 ?	
13 庚	37 梗	42 ?	19 陌	12 梗
14 耕	38 耿	43 ?	18 麥	
15 清	39 靜	44 ?	17 昔	
16 青	40 迥	45 徑	16 錫	
17 尤	41 有	46 宥		14 流
18 侯	42 厚	47 候		
19 幽	43 黝	48 幼		
20 侵	44 寢	49 沁	26 緝	15 深
21 鹽	45 琰	50 豔	24 葉	16 咸 (三、四等韻)
22 添	46 忝	51 忝	25 帖	
23 蒸	47 拯	52 證	29 ?	13 曾
24 登	48 等	53 嶝	30 ?	
25 咸	49 謙	54 陷	22 洽	16 咸 (二、三等韻)
26 銜	50 檻	55 鑑	23 狎	
27 嚴			31 ?	
28 凡	51 范	56 梵	32 ?	

王三、王一 (周祖謨 1983 に拠る)

平声	上声	去声	入声	撮
1 東	1 董	1 送	1 屋	1 通
2 冬		2 宋	2 沃	
3 鍾	2 腫	3 用	3 燭	
4 江	3 講	4 絳	4 覺	2 江
5 支	4 紙	5 寘		3 止
6 脂	5 旨	6 至		
7 之	6 止	7 志		
8 微	7 尾	8 未		
9 魚	8 語	9 御		4 遇
10 虞	9 麌	10 遇		
11 模	10 姥	11 暮		
		12 泰		
12 齊	11 霽	13 霽		5 蟹

		14 祭		
13 佳	12 蟹	15 卦		
14 皆	13 駭	16 怪		
		17 夬		
15 灰	14 賄	18 隊		
16 哈	15 海	19 代		
		20 廢		
17 真	16 軫	21 震	5 質	6 臻
18 臻			7 櫛	
19 文	17 吻	22 問	6 物	
20 殷	18 隱	23 焮	8 迄	
21 元	19 阮	24 願	9 月	(→7 山)
22 魂	20 混	25 慁	10 沒	
23 痕	21 很	26 恨		
24 寒	22 旱	27 翰	11 末	7 山
25 刪	23 漕①	28 諫	13 鏃	
26 山	24 產①	29 禡	12 黠	
27 先	25 銑	30 霰	14 屑	
28 仙	26 獮	31 線	15 薛	
29 蕭	27 篠	32 嘯		8 效
30 宵	28 小	33 笑		
31 肴	29 巧	34 效		
32 豪	30 皓	35 号		
33 歌	31 哿	36 箇		9 果
34 麻	32 馬	37 禡		10 假
35 覃	33 感	38 勘	20 合	16 咸 (一等韻)
36 談	34 敢	39 闕	21 盍	
37 陽	35 養	40 漾	27 藥	11 宕
38 唐	36 蕩	41 宕	28 鐸	
39 庚	37 梗	42 敬	19 陌	12 梗
40 耕	38 耿	43 諍	18 麥	
41 清	39 靜	44 勁	17 昔	
42 青	40 迥	45 徑	16 錫	
43 尤	41 有	46 宥		14 流
44 侯	42 厚	47 候		

45 幽	43 黝	48 幼		
46 侵	44 寢	49 沁	26 緝	15 深
47 鹽	45 琰	50 豔	24 葉	16 咸 (三、四等韻)
48 添	46 忝	51 榛	25 帖	
49 蒸	47 拯	52 證	29 職	13 曾
50 登	48 等	53 嶝	30 德	
51 咸	49 賺	54 陷	22 洽	16 咸 (二、三等韻)
52 銜	50 檻	55 鑑	23 狎	
53 嚴	51 广	56 嚴	31 業	
54 凡	52 范	57 梵	32 乏	

- ① 王三は本文では 23 潛 24 産となっているが、巻頭の「韻目表」では 23 産 24 潛となっている。
 王一は「韻目表」、本文いずれも 23 潛 24 産となっている。王一に従う。

王二 (裴務齊正字本刊謬補缺切韻とも呼ばれる。周祖謨 1983 に拠る)

平声	上声	去声	入声	撰
1 東	1 董	1 凍	1 屋	1 通
2 冬		2 宋	2 沃	
3 鍾	2 腫	3 種	3 燭	
4 江	3 講	4 絳	4 覺	2 江
5 陽	4 養	5 樣	5 藥	11 宕
6 唐	5 蕩	6 宕	6 鐸	
7 支	6 紙	7 寘		3 止
8 脂	7 旨	8 至		
9 之	8 止	9 志		
10 微	9 尾	10 未		
11 魚	10 語	11 御		4 遇
12 虞	11 麌	12 遇		
13 模	12 姥	13 暮		
14 齊	13 霽	14 霽		5 蟹
		15 祭		
		16 泰		
15 皆	14 駭	17 界		
		18 夬		
		19 廢		
16 灰	15 賄	20 晦		

17 臺	16 待	21 代		
18 真	17 軫	22 震	7 質	6 臻(三等)
19 臻			8 櫛	
20 文	18 吻	23 問	9 物	
21 斤	19 謹	24 靳	10 訖	
22 登	20 等	25 磴	11 德	13 曾(一等)
23 寒	21 旱	26 翰	12 褐	7 山(一等)
24 魂	22 混	27 慁	14 紇	6 臻(一等)
25 痕	23 很	28 恨		
26 先	24 銑	29 霰	15 屑	7 山(二三四等)
27 仙	25 獮	30 線	16 薛	
28 刪	26 潛	31 訕	17 蹻	
29 山	27 產	32 禫	13 黠	
31 元	28 阮	33 願	18 月	
32 蕭	29 篠	34 嘯		8 效
33 宵	30 小	35 笑		
34 肴	31 絞	36 教		
34 豪	32 皓	37 号		
35 庚	33 梗	38 更	29 格	12 梗
36 耕	34 耿	39 諍	19 隔	
37 清	35 請	40 清	30 昔	
38 冥	36 茗	41 暝	20 覓	
39 歌	37 哿	42 箇		9 果
40 佳	38 解	43 懈		5 蟹
41 麻	39 馬	44 禡		10 假
42 侵	40 寢	45 沁	21 緝	15 深
43 蒸	41 拯	46 證	22 職	13 曾
44 尤	42 有	47 宥		14 流
45 侯	43 厚	48 候		
46 幽	44 黝	49 幼		
47 鹽	45 琰	50 豔	23 葉	16 咸
48 添	46 忝	51 忝	24 帖	
49 覃	47 禫	52 醴	25 沓	
50 談	48 淡	53 闕	26 蹻	
51 咸	49 減	54 陷	27 洽	

52 銜	50 檻	55 筭	28 狎
53 巖	51 广	56 巖	31 業
54 凡	52 范	57 梵	32 乏

以下の唐韻 1、2 の推定は王勝昌『説文篆韻譜之源流及其音系之研究』(国立台湾師範大学国文研究所碩士論文, 1974) pp.82-85 に拠る。本文 12. 『韻鏡』所拠『切韻』は何かでも取り上げている。

『唐韻』1(王国维<唐时韵书部次先后表>。據卞令之《式古堂書畫彙考》所載孫恂序)

平声	上声	去声	入声	擬
1 東	1 董	1 送	1 屋	1 通
2 冬		2 宋	2 沃	
3 鍾	2 腫	3 用	3 燭	
4 江	3 講	4 絳	4 覺	2 江
5 支	4 紙	5 寘		3 止
6 脂	5 旨	6 至		
7 之	6 止	7 志		
8 微	7 尾	8 未		
9 魚	8 語	9 御		4 遇
10 虞	9 麌	10 遇		
11 模	10 姥	11 暮		
		12 泰		
12 齊	11 霽	13 霽		5 蟹
		14 祭		
13 佳	12 蟹	15 卦		
14 皆	13 駭	16 怪		
		17 夬		
15 灰	14 賄	18 隊		
16 哈	15 海	19 代		
		20 廢		
17 真	16 軫	21 震	5 質	6 臻
18 臻			7 櫛	
19 文	17 吻	22 問	6 物	
20 殷	18 隱	23 焮	8 迄	
21 元	19 阮	24 願	9 月	(→7 山)
22 魂	20 混	25 慁	10 沒	

23 痕	21 很	26 恨		
24 寒	22 旱	27 翰	11 末	7 山
25 刪	23 潛	28 諫	13 鎋	
26 山	24 產	29 禡	12 黠	
1 先	25 銑	30 霰	14 屑	
2 仙	26 獮	31 線	15 薛	
3 蕭	27 篠	32 嘯		8 效
4 宵	28 小	33 笑		
5 肴	29 巧	34 效		
6 豪	30 皓	35 號		
7 歌	31 哿	36 箇		9 果
8 麻	32 馬	37 禡		10 假
9 覃	33 感	38 勘	20 合	16 咸 (一等韻)
10 談	34 敢	39 闕	21 盍	
11 陽	35 養	40 漾	27 藥	11 宕
12 唐	36 蕩	41 宕	28 鐸	
13 庚	37 梗	42 映	19 陌	12 梗
14 耕	38 耿	43 諍	18 麥	
15 清	39 靜	44 勁	17 昔	
16 青	40 迥	45 徑	16 錫	
17 尤	41 有	46 宥		14 流
18 侯	42 厚	47 候		
19 幽	43 黝	48 幼		
20 侵	44 寢	49 沁	26 緝	15 深
21 鹽	45 琰	50 豔	24 葉	16 咸 (三、四等韻)
22 添	46 忝	51 忝	25 帖	
23 蒸	47 拯	52 證	29 職	13 曾
24 登	48 等	53 嶝	30 德	
25 咸	49 賺	54 陷	22 洽	16 咸 (二、三等韻)
26 銜	50 檻	55 鑑	23 狎	
27 嚴	51 冎	56 釅	31 業	
28 凡	52 范	57 梵	32 乏	

『唐韻』2(王国维<唐时韵书部次先后表>。魏了翁所傳及吳縣蔣氏藏本『唐韻』，據之以推求)

平声

上声

去声

入声

攝

1 東	1 董	1 送	1 屋	1 通
2 冬		2 宋	2 沃	
3 鍾	2 腫	3 用	3 燭	
4 江	3 講	4 絳	4 覺	2 江
5 支	4 紙	5 寘		3 止
6 脂	5 旨	6 至		
7 之	6 止	7 志		
8 微	7 尾	8 未		
9 魚	8 語	9 御		4 遇
10 虞	9 麌	10 遇		
11 模	10 姥	11 暮		
		12 泰		
12 齊	11 齊	13 霽		5 蟹
13 移		14 祭		
14 佳	12 蟹	15 卦		
15 皆	13 駭	16 怪		
		17 夬		
16 灰	14 賄	18 隊		
17 哈	15 海	19 代		
		20 廢		
18 真	16 軫	21 震	5 質	6 臻
19 諄	17 準	22 郊	6 術	
20 臻			8 櫛	
21 文	18 吻	23 問	7 物	
22 殷	19 隱	24 焮	9 迄	
23 元	20 阮	25 願	10 月	(→7 山)
24 魂	21 混	26 慁	11 沒	
25 痕	22 很	27 恨		
26 寒	23 旱	28 翰	12 曷	7 山
27 桓	24 緩	29 換	13 末	
28 刪	25 漣	30 諫	15 黠	
29 山	26 產	31 禡	14 黠	
30 先	27 銑	32 霰	16 屑	
31 仙	28 獮	33 線	17 薛	
32 蕭	29 篠	34 嘯		8 效

33 宵	30 小	35 笑		
34 肴	31 巧	36 效		
35 豪	32 皓	37 號		
36 歌	33 哿	38 箇		9 果
37 戈	34 果	39 過		
38 麻	35 馬	40 禡		10 假
39 覃	36 感	41 勘	22 合	16 咸 (一等韻)
40 談	37 敢	42 闕	23 盍	
41 陽	38 養	43 漾	29 藥	11 宕
42 唐	39 蕩	44 宕	30 鐸	
43 庚	40 梗	45 映	21 陌	12 梗
44 耕	41 耿	46 諍	20 麥	
45 清	42 靜	47 勁	19 昔	
46 青	43 迥	48 徑	18 錫	
47 尤	44 有	49 宥		14 流
48 侯	45 厚	50 候		
49 幽	46 黝	51 幼		
50 侵	47 寢	52 沁	28 緝	15 深
51 鹽	48 琰	53 豔	26 葉	16 咸 (三、四等韻)
52 添	49 忝	54 禡	27 帖	
53 蒸	50 拯	55 證	31 職	13 曾
54 登	51 等	56 嶝	32 德	
55 咸	52 賺	57 陷	24 洽	16 咸 (二、三等韻)
56 銜	53 檻	58 鑑	25 狎	
57 嚴		59 釅	33 業	
58 凡	54 范		34 乏	

『說文篆韻譜』十卷本

平声	上声	去声	入声	撰
1 東	1 董	1 送	1 屋	1 通
2 冬		(宋)	2 沃	
3 鍾	2 腫	(用)	3 燭	
4 江	3 講	2 絳	4 覺	2 江
5 支	4 紙	3 伎		3 止
6 脂	5 旨	4 至		

7 之	6 止	5 志		
8 微	7 尾	6 未		
9 魚	8 語	7 御		4 遇
10 虞	9 嘯	8 遇		
11 模	10 莽	9 暮		
		10 泰		
12 齊	11 霽	11 霽		5 蟹
		12 祭		
13 佳	12 蟹	13 卦		
14 皆	(駭)	14 怪		
		15 夬		
15 灰	13 賄	16 隊		
16 開	14 海	17 代		
		18 廢		
17 真	15 軫	19 震	5 質	6 臻
18 諄	16 準	20 郊	6 聿	
19 臻			8 櫛	
20 文	17 吻	21 問	7 物	
21 殷	18 隱	22 靳	8 櫛 (迄)	
22 元	19 阮	23 願	9 月	(→7 山)
23 魂	20 混	24 慝	10 沒	
24 寒	21 旱	25 翰	(曷)	7 山
25 桓	22 緩	26 換	11 末	
26 刪	23 綰	27 諫	13 轄	
26 山	24 產	28 閒	12 黠	
1 先	25 銑	29 霰	14 屑	
2 僊	26 杞	30 線	15 良	
3 宣				
4 蕭	27 篠	31 嘯		8 效
5 宵	28 小	32 笑		
6 肴	29 巧	33 效		
7 豪	30 顛	34 号		
8 歌	31 哿	35 箇		9 果
9 戈	32 果	36 過		
10 麻	33 馬	37 禡		10 假

11 覃	34 感	38 榎	20 合	16 咸 (一等韻)
12 談	35 敢	(闕)	21 盍	
13 陽	36 養	39 漾	27 藥	11 宕
14 唐	37 蕩	40 宕	28 鐸	
15 庚	38 梗	41 敬	19 陌	12 梗
16 耕	(39 耿)	(諍)	18 麥	
17 清	40 靜	42 勁	17 昔	
18 青	41 迥	43 徑	16 錫	
19 尤	42 有	44 宥		14 流
20 侯	43 厚	45 候		
22 幽	(黝)	(幼)		
23 侵	44 寢	46 沁	26 緝	15 深
24 鹽	45 琰	47 豔	23 葉①	16 咸 (三、四等韻)
25 添	46 忝	(禎)	25 帖	
26 蒸	47 拯	48 證	29 職	13 曾
27 登	(等)	(嶝)	30 德	
28 咸	48 湛	49 陷	22 洽	16 咸 (二、三等韻)
29 銜	(檻)	(鑑)	24 狎①	
30 嚴			31 業	
(凡)	49 范	(梵)	(乏)	

①馮桂芬による同治6年刊本では卷頭の韻目一覧と本文の順序が一致しない。本文中では、狎、葉の順になっているが、今、卷頭の韻目一覧に従う。

『説文篆韻譜』五卷本

平声	上声	去声	入声	撰
1 東	1 斟	1 送	1 屋	1 通
2 冬		2 宋	2 沃	
3 鍾	2 腫	3 用	3 燭	
4 江	3 講	4 絳	4 覺	2 江
5 支	4 紙	5 寘		3 止
6 脂	5 旨	6 至		
7 之	6 止	7 志		
8 微	7 尾	8 未		
9 魚	8 語	9 御		4 遇

10 虞	9 嘖	10 遇		
11 模	10 莽	11 暮		
12 齊	11 薺	12 霽		5 蟹
		13 祭		
		14 泰		
13 佳	12 蟹	15 卦		
14 皆	13 駭	16 怪		
		17 夬		
15 灰	14 賄	18 隊		
16 開	15 海	19 代		
		20 廢		
17 真	16 軫	21 震	5 質	6 臻
18 諄	17 準	22 郊	6 術	
19 臻			7 櫛	
20 文	18 吻	23 問	8 物	
21 殷	19 隱	24 靳	9 迄	
22 元	20 阮	25 願	10 月	(→7 山)
23 魂	21 混	26 慁	11 沒	
(痕)	22 很	27 恨		
24 寒	23 旱	28 翰	12 曷	7 山
25 桓	24 緩	29 換	13 末	
26 刪	25 綰	30 諫	15 轄	
27 山	26 產	31 閒	14 黠	
1 先	27 銑	32 霰	16 屑	
2 僊	28 杞	33 線	17 良	
3 宣				
4 蕭	29 篠	34 嘯		8 效
5 宵	30 小	35 笑		
6 肴	31 巧	36 效		
7 豪	32 顯	37 号		
8 歌	33 哿	38 箇		9 果
9 戈	34 果	39 過		
10 麻	35 馬	40 禡		10 假
11 陽	36 養	41 漾	18 藥	11 宕
12 唐	37 蕩	42 宕	19 鐸	

13 庚	38 梗	43 敬	20 陌	12 梗
14 耕	39 耿	44 諍	21 麥	
15 清	40 靜	45 勁	22 昔	
16 青	41 迥	46 徑	23 錫	
17 蒸	42 拯	47 證	24 職	13 曾
18 登	43 等	48 百	25 德	
19 尤	44 有	49 宥		14 流
20 侯	45 厚	50 候		
21 幽	46 黝	51 幼		
22 侵	47 寢	52 沁	26 緝	15 深
23 覃	48 感	53 勘	27 合	16 咸
24 談	49 敢	54 闕	28 盍	
25 鹽	50 琰	55 豔	29 葉	
26 沾	51 忝	56 禡	30 帖	
27 咸	52 湛	57 陷	31 洽	
28 銜	53 檻	58 鑑	32 狎	
29 嚴	54 儼	59 境	33 業	
(凡)	55 范	60 梵	34 法	

『古文四声韻』

平声	上声	去声	入声	撰
1 東	1 董	1 送	1 屋	1 通
2 冬		2 宋	2 沃	
3 鍾	2 腫	3 用	3 燭	
4 江	3 講	4 絳	4 覺	2 江
5 支	4 紙	5 寘		3 止
6 脂	5 旨	6 至		
7 之	6 止	7 志		
8 微	7 尾	8 未		
9 魚	8 語	9 御		4 遇
10 虞	9 麌	10 遇		
11 模	10 姥	11 暮		
		12 泰		
12 齊	11 霽	13 霽		5 蟹
13 移		14 祭		

14 佳	12 蟹	15 卦		
15 皆	13 駭	16 怪		
		17 夬		
16 灰	14 賄	18 隊		
17 哈	15 海	19 代		
		20 廢		
18 真	16 軫	21 震	5 質	6 臻
			6 聿	
19 諄	17 準	22 稇	7 術	
20 臻			9 櫛	
21 文	18 吻	23 問	8 物	
22 殷	19 隱	24 焮	10 迄	
23 元	20 阮	25 願	11 月	(→7 山)
24 魂	21 混	26 慁	12 沒	
25 痕	22 很	27 恨		
26 寒	23 旱	28 翰	13 曷	7 山
27 桓	24 緩	29 換	14 末	
28 刪	25 漣	30 諫	16 黠	
29 山	26 產	31 禡	15 黠	
1 先	27 銑	32 霰	17 屑	
2 仙	28 獮	33 線	18 薛	
3 宣	29 選 ^①			
4 蕭	30 篠	34 嘯		8 效
5 宵	31 小	35 笑		
6 肴	32 巧	36 效		
7 豪	33 皓	37 號		
8 歌	34 哿	38 箇		9 果
9 戈	35 果	39 過		
10 麻	36 馬	40 禡		10 假
11 覃	37 感	41 勘	23 合	16 咸 (一等韻)
12 談	38 敢	42 闕	24 盍	
13 陽	39 養	43 漾	30 藥	11 宕
14 唐	40 蕩	44 宕	31 鐸	
15 庚	41 梗	45 敬	22 陌	12 梗
16 耕	42 耿	46 諍	21 麥	

17 清	43 靜	47 勁	20 昔	
18 青	44 迴	48 徑	19 錫	
19 尤	45 有	49 宥		14 流
20 侯	46 厚	50 候		
21 幽	47 黝	51 幼		
22 侵	48 寢	52 沁	29 緝	15 深
23 鹽	49 琰	53 豔	27 葉	16 咸 (三、四等韻)
24 添	50 忝	54 栴	28 帖	
25 蒸	51 拯	55 證	32 職	13 曾
26 登	52 等	56 嶝	33 德	
27 咸	53 謙	57 陷	25 洽	16 咸 (二、三等韻)
28 銜	54 檻	58 鑑	26 狎	
29 嚴	55 廣	60 釅	34 業	
30 凡	56 范	59 梵	35 乏	

①宋紹興乙丑(1145)齊安郡學本では28獮の次は29篠となっていて、この韻は無い。なおこの齊安郡學本は上声のみの残巻で、相配する平去入声についての情報は得られない。

武玄之『韻詮』の50韻と切韻諸本韻目対照表

『韻詮』の韻目(『悉曇藏』巻二に見えるのは平声のみ)の配列順は、一先ず引用文に見える出現順に反映されているものと見做したが、本来原本『切韻』と同様であるものを梵字の母音の配列順に合わせて、並べかえたという可能性もある。このような韻目の配列は他に例を見ない。参考までに反切を附したが、この反切も『韻詮』に附されたものではないかもしれない。

『韻詮』	原本『切韻』	『古文四聲韻』	『広韻』	攝
1 羅: 盧何	33 歌: 古俄(羅: 盧何)	29+8 歌: 古俄	28+7 歌: 古俄	9 果
	(過: 古和)	29+9 戈: 古禾	28+8 戈: 古禾	9 果
2 家: 古牙	34 麻: 莫霞(嘉: 古牙)	29+10 麻: 莫霞	28+9 麻: 莫霞	10 假
3 支: 章移	5 支: 章移	5 支: 章移	5 支: 章移	3 止
	6 脂: 旨夷	6 脂: 旨夷	6 脂: 旨夷	3 止
4 之: 止而	7 之: 止而	7 之: 止而	7 之: 止而	3 止
5 微: 無飛	8 微: 無非	8 微: 無非	8 微: 無非	3 止
6 魚: 語居	9 魚: 語居	9 魚: 語居	9 魚: 語居	4 遇
7 虞: 語俱	10 虞: 語俱	10 虞: 遇俱	10 虞: 遇俱	4 遇
8 模: 莫胡	11 模: 莫胡	11 模: 莫胡	11 模: 莫胡	4 遇
9 佳: 古(<胡)賸	13 佳: 古賸	14 佳: 古鞞	13 佳: 古賸	5 蟹

10 齊: 徂(<組)兮	12 齊: 徂嵒	12 齊: 徂兮	12 齊: 徂奚	5 蟹
11 皆: 古階	14 皆: 古諧	15 皆: 古諧(?<該)	14 皆: 古諧	5 蟹
12 移: 成西	(移: 成西)	13 移: 成鬱	(移: 成鬱)	5 蟹
13 灰: 呼恢(<{土灰})	15 灰: 呼恢	16 灰: 呼恢	15 灰: 呼恢	5 蟹
14 哈: 呼來	16 哈: 呼來	17 哈: 呼來	16 哈: 呼來	5 蟹
15 蕭(<肅): 蘇聊	29 蕭: 蘇彫	29+4 蕭: 蘇雕	28+3 蕭: 蘇彫	8 效
16 霄: 相焦	30 宵: 相焦	29+5 宵: 相焦	28+4 宵: 相邀	8 效
17 周: 之牛	43 尤: 雨求(周: 職鳩)	29+19 尤: 羽求	28+18 尤: 羽求	14 流
18 幽: 於虬(<虬)	45 幽: 於虬	29+21 幽: 於虬(<虬)	28+20 幽: 於虬	14 流
19 侯(<俟): 胡溝	44 侯: 胡溝	29+20 侯: 胡鉤	28+19 侯: 胡鉤	14 流
20 肴: 胡交	31 肴: 胡茅	29+6 肴: 胡茅	28+5 肴: 胡茅	8 效
21 豪: 胡刀	32 豪: 胡刀	29+7 豪: 胡刀	28+6 豪: 胡刀	8 效
22 東: 德紅	1 東: 德紅	1 東: 德紅	1 東: 德紅	1 通
23 冬: 都宗	2 冬: 都宗	2 冬: 都宗	2 冬: 都宗	1 通
24 江: 古邦	4 江: 古雙	4 江: 古雙	4 江: 古雙	2 江
25 鍾: 之容	3 鍾: 職容	3 鍾: 職容	3 鍾: 職容	1 通
26 陽: 移章	37 陽: 与章	29+13 陽: 與章	28+10 陽: 與章	11 宕
27 唐: 徒郎	38 唐: 徒郎	29+14 唐: 徒郎	28+11 唐: 徒郎	11 宕
28 京: 古行	39 庚: 古行(驚: 舉卿)	29+15 庚: 古行	28+12 庚: 古行	12 梗
29 爭: 側耕	40 耕: 古莖(爭: 側耕)	29+16 耕: 古莖	28+13 耕: 古莖	12 梗
30 青: 倉經	42 青: 倉經	29+18 青: 倉經	28+15 青: 倉經	12 梗
31 清: 七精	41 清: 七精	29+17 清: 七情	28+14 清: 七情	12 梗
32 蒸: 之(?<七)應	49 蒸: 諸膺	29+25 蒸: 煑仍	28+16 蒸: 煑仍	13 曾
33 登: 都滕	50 登: 都滕	29+26 登: 都騰	28-17 登: 都滕	13 曾
	17 真: 職鄰	18 真: 職隣	17 真: 職鄰	6 臻
34 春: 尺倫	(春: 昌脣)	19 諄: 之純	18 諄: 章倫	6 臻
35 臻: 側詵	18 臻: 側詵	20 臻: 側僊	19 臻: 側詵	6 臻
36 文: 武分	19 文: 武分	21 文: 武分	20 文: 無分	6 臻
	20 殷: 於斤	22 殷: 於斤	21 欣: 許斤(殷: 於斤)	6 臻
37 魂: 戶昆	22 魂: 戶昆	24 魂: 戶昆	23 魂: 戶昆	6 臻
	23 痕: 戶恩	25 痕: 戶恩	24 痕: 戶恩	6 臻
38 元: 愚袁	21 元: 愚袁	23 元: 語袁	22 元: 愚袁	7 山
39 先: 蘇前	27 先: 蘇前	29+1 先: 蘇前	28+1 先: 蘇前	7 山
40 仙: 相然	28 仙: 相然	29+2 仙: 相然	28+2 仙: 相然	7 山
	(宣: 須緣)	29+3 宣: 先緣	(宣: 須緣)	7 山

41 山: 所姦	26 山: 所間	29 山: 所間	28 山: 所間	7 山
	25 刪: 所姦	28 刪: 所姦	27 刪: 所姦	7 山
42 寒: 胡安	24 寒: 胡安	26 寒: 胡安	25 寒: 胡安	7 山
	(桓: 胡官)	27 桓: 乎官	26 桓: 胡官	7 山
43 琴: 渠今	46 侵: 七林(琴: 渠金)	29+22 侵: 七林	28-21 侵: 七林(琴: 巨金)	15 深
44 岑: 鋤簪	(岑: 鋤簪)		(岑: 鋤針)	15 深
45 覃: 徒含	35 覃: 徒含	29+11 覃: 徒含	28+22 覃: 徒含	16 咸
46 談: 徒甘	36 談: 徒甘	29+12 談: 徒甘	28+23 談: 徒甘	16 咸
47 咸: 胡讒	51 咸: 胡讒	29+27 咸: 胡讒	28+26 咸: 胡讒	16 咸
	52 銜: 戶監	29+28 銜: 戶監	28+27 銜: 戶監	16 咸
48 嚴: 語炊(<坎)	53 嚴: 語翰	29+29 嚴: 語翰	28+28 嚴: 語翰	16 咸
	54 凡: 符芝	29+30 凡: 符咸	28+29 凡: 符芝(<咸)	16 咸
49 添: 他兼	48 添: 他兼	29+24 添: 他兼	28+25 添: 他兼	16 咸
50 鹽: 余占	47 鹽: 余廉	29+23 鹽: 余廉	28+24 鹽: 余廉	16 咸

今、原本『切韻』に即して『韻詮』の韻目を並べかえると以下のようなになる。反切は省略。

参考までに『古文四声韻』に似る『唐韻』2の韻目を加えた。

切韻系韻書平声の韻目対照表

原本『切韻』	『韻詮』	『古文四声韻』	『唐韻』2	『広韻』	撰
1 東	22 東	1 東	1 東	1 東	1 通
2 冬	23 冬	2 冬	2 冬	2 冬	
3 鍾	25 鍾	3 鍾	3 鍾	3 鍾	
4 江	24 江	4 江	4 江	4 江	2 江
5 支	3 支	5 支	5 支	5 支	3 止
6 脂		6 脂	6 脂	6 脂	
7 之	4 之	7 之	7 之	7 之	
8 微	5 微	8 微	8 微	8 微	
9 魚	6 魚	9 魚	9 魚	9 魚	4 遇
10 虞	7 虞	10 虞	10 虞	10 虞	
11 模	8 模	11 模	11 模	11 模	
12 齊	10 齊	12 齊	12 齊	12 齊	5 蟹
	12 移	13 移	13 移		
13 佳	9 佳	14 佳	14 佳	13 佳	
14 皆	11 皆	15 皆	15 皆	14 皆	
15 灰	13 灰	16 灰	16 灰	15 灰	

16 哈	14 哈	17 哈	17 哈	16 哈	
17 真	34 春	18 真	18 真	17 真	6 臻
		19 諄	19 諄	18 諄	
18 臻	35 臻	20 臻	20 臻	19 臻	
19 文	36 文	21 文	21 文	20 文	
20 殷		22 殷	22 殷	21 欣	
21 元	38 元	23 元	23 元	22 元	(→7 山)
22 魂	37 魂	24 魂	24 魂	23 魂	
23 痕		25 痕	25 痕	24 痕	
24 寒	42 寒	26 寒	26 寒	25 寒	7 山
		27 桓	27 桓	26 桓	
25 刪		28 刪	28 刪	27 刪	
26 山	41 山	29 山	29 山	28 山	
27 先	39 先	29+1 先	30 先	28+1 先	
28 仙	40 仙	29+2 仙	31 仙	28+2 仙	
		29+3 宣			
29 蕭	15 蕭(<肅)	29+4 蕭	32 蕭	28+3 蕭	8 效
30 宵	16 霄	29+5 宵	33 宵	28+4 霄	
31 肴	20 肴	29+6 肴	34 肴	28+5 肴	
32 豪	21 豪	29+7 豪	35 豪	28+6 豪	
33 歌	1 羅	29+8 歌	36 歌	28+7 歌	9 果
		29+9 戈	37 戈	28+8 戈	
34 麻	2 家	29+10 麻	38 麻	28+9 麻	10 假
35 覃	45 覃	29+11 覃	39 覃	28+22 覃	16 咸(一等韻)
36 談	46 談	29+12 談	40 談	28+23 談	
37 陽	26 陽	29+13 陽	41 陽	28+10 陽	11 宕
38 唐	27 唐	29+14 唐	42 唐	28+11 唐	
39 庚	28 京	29+15 庚	43 庚	28+12 庚	12 梗
40 耕	29 爭	29+16 耕	44 耕	28+13 耕	
41 清	31 清	29+17 清	45 清	28+14 清	
42 青	30 青	29+18 青	46 青	28+15 青	
43 尤	17 周	29+19 尤	47 尤	28+18 尤	14 流
44 侯	19 侯(<俟)	29+20 侯	48 侯	28+19 侯	
45 幽	18 幽	29+21 幽	49 幽	28+20 幽	
46 侵	43 琴 44 岑	29+22 侵	50 侵	28+21 侵	15 深

47 鹽	50 鹽	29+23 鹽	51 鹽	28+24 鹽	16 咸(三、四等韻)
48 添	49 添	29+24 添	52 添	28+25 添	
49 蒸	32 蒸	29+25 蒸	53 蒸	28+16 蒸	13 曾
50 登	33 登	29+26 登	54 登	28+17 登	
51 咸	47 咸	29+27 咸	55 咸	28+26 咸	16 咸(二、三等韻)
52 銜		29+28 銜	56 銜	28+27 銜	
53 嚴	48 嚴	29+29 嚴	57 嚴	28+28 嚴	
54 凡		29+30 凡	58 凡	28+29 凡	

『古文四声韻』入声 6 聿韻は、王国維 Wáng Guóiwéi に拠れば質韻を開合で分韻するに当たり、先行切韻系韻書にあるものは質-聿、あるものは質-術と分けているところから、両方を取り込んで、合口韻を聿、術と二つ設けてしまったもの(『觀堂集林』卷八「書古文四声韻後」)。上記のいずれにも無い韻目としては、平声宣韻に相配する入声の雪韻がある。これを有するテキスト(P5531-3)は断片であり、その全体の韻目がどうであったか不明である。今に伝わらない失われたテキストの中には、平声宣-上声選-去声?-入声雪と仙韻合口韻を四声相配する全てに亘って析出させていたものもあつたかも知れない。これについては注(26)参照。

- (6) 唐玄度『九經字様』の反映する音韻体系は切韻に反映する中古音とは違っていた。音注例が少ないので、全体像を明らかにすることはできないが、二等重韻の合流の例(幻:還去。幻は山韻去声禰韻匣母、還は刪韻平声匣母)、純三等韻と重紐 B 類の合流の例(圪:銀入。圪は殷韻入声迄韻疑母 C 類、銀は真韻平声疑母 B 類; 謹:勤去。謹は真韻去声震韻群母 B 類、勤は殷韻平声群母 C 類)、純四等韻と重紐 A 類の合流の例(絢:僂去。絢は先韻去声霰曉母純四等、僂は仙韻平声曉母 A 類)が見られる。こういった点は唐代における音韻変化を反映するもので、『九經字様』の音韻体系は中古音より、慧琳音義のそれに近いものと考えられる。ここで<の左に挙げた推定音価は一先ず慧琳音義のものを以てしても良いだろう。これまでのところ、慧琳音義の音韻体系については、河野六郎「朝鮮漢字音の研究」や三根谷徹「唐代の標準音について」が推定音価を挙げている。しかし本稿では中古音推定音価については平山(1967)に基づいており、それとの対応関係も考慮して説明しているので、どちらも採用しない。ここに挙げた『九經字様』の推定音価は平山(1967)で挙げる「3.14.唐代の音韻変化音韻・音声変化」を参考に中古音推定音価に手を加えたもの。

漢字による漢字の音注は、被注字と音注用字の双方が音韻変化を蒙るので、音韻変化を蒙った後でもその関係が成り立つことが少なくない。例えば原本切韻由来と考えられる「唐:徒郎」(daŋ^平 ← do^平 + laŋ^平)という反切は現代の普通話の発音で読んでも、立派に成立する(táng ← tú + láng)。逆に普通話の発音に基づいて作られた反切が、中古音でも通用するということがまた有り得る。『九經字様』の四声相配を利用した音注も反切と同様のことが言えるので、中古音の推定音価(ここでは<の右側)を以てしても説明は可能である。

余嘉錫 Yú Jiāxī は『九經字樣』に見えるこの手の音注を『開元文字音義』に由来するものと言う。

「考玄度自序云：「其声韻謹依開元文字，避以反言，但紐四声，定其音旨。」其所謂反言者，反語也。所謂紐者，四声相承之双声字也。如真軫震質、人忍仞日，四字双声，総歸一紐。此乃齊、梁以至隋、唐言音韻者之常言。見日本沙門安然悉曇藏所引四声譜及武玄之韻詮明義例。所謂避以反言但紐四声者，言依做開元文字音義之例，每字但以同紐之四声字定其声韻，而不標舉反語也。案唐玄宗開元文字音義，新唐書藝文志：三十卷，其書已佚。唐会要張九齡賀開元文字音義狀称「聖製義微旨遠，文省理該，表隸以訓今，存篆以微古，衆積大備，取証於前修，片言旁通，去嫌於翻字。」翻字即反語，云片言旁通，去嫌於翻字，是開元文字注音不用反語，但紐四声而已。今觀其書，既不言反，亦不言切，每字之下，僅以同紐之字為音而注明四声，正與序言相合。

日訳：唐玄度の自序に「音韻に関しては謹んで『開元文字音義』に従い、反言は避け、紐を挙げて声調を指示するという方法だけを用いて、その字音をはっきり示すことにする。」とあるが、そこで言う「反言」とは反切のことであり、「紐」と言うのは四声相配する双声字のことである（例えば、真軫震質、人忍仞日がそれに当り、これらはいずれも四字が双声の関係にあり、全ての字が同一の紐に帰属している。これはつまるところ、齊、梁から隋、唐にかけて音韻を問題にする場合によく出てくる用語である。これについては日本の沙門安然の『悉曇藏』に引かれた沈約の『四声譜』及び武玄之の『韻詮』の「明義例」を参照）。反言は避け、紐（声母が同じで声調の異なるもの）を挙げて声調を指示するという方法だけを用いて、というのは『開元文字音義』の体例に従ったということを行っているのであり、この書に収録された掲出字の一字一字が声調だけ異なる文字を用いてその発音を示していて、反切を挙げていないのである（案ずるに唐の玄宗の『開元文字音義』は『新唐書』『藝文志』には「三十卷。この書は既に失われた。」とある。また『唐会要』の張九齡「今上皇帝陛下が御造りになった『開元文字音義』をお喜び申し上げるの状」には「今上皇帝陛下の御著作は義については奥深く微妙な意味を記しておられるという点で比類無く、文については冷徹な条理が完璧に備わっており、隸書を挙げて現代の書体を説明なさっており、また篆書をお示しになって古代の文を明らかになさっており、様々な解釈が全て備わっており、論拠を古の賢人の語に求めておられ、短い僅かな一言に至るまで全てに互って、翻字についてはこれを取り除き、満足なさいませんでした。」とある。翻字とは即ち反切のことであり、「短い僅かな一言に至るまで全てに互って、翻字についてはこれを取り除き、満足なさいませんでした。」と言うのは、『開元文字』が注音に反切を用いず、四声相配する字を挙げて声調を指示するやり方だけを用いたということである）。今この書を見ると、「反」と言う表記も、「切」という表記も無く、声母を同じくする字で（声調以外の）発音を示し、それに声調を注記しており、正に序で言うところと一致する。」（『四庫提要辨證』卷二經部二「九經字樣」の条 中華書局 1980.5 冊一 p.112）

今、私自身が考えるところの余嘉錫の主張が明確になるようにかなり手を加えた訳を施したが、京都大学の「清代経学の研究」班による「顧炎武『音論』訳注『東方学報』第 51 冊 1979.3pp.617-723 に既に訳がある。該当部分の平田昌司氏の訳（pp.720-723）は筆者のものとは

異なり、恣意を排した禁欲的なものである。「紐」についてはまた後出の注(13),(14)参照。余嘉錫は、『九經字樣』はこのような『開元文字音義』に見られる四声相配の関係を利用した注音方法や「～翻」、「～紐」という形式を採用しただけで、個々の音注の字面は唐玄度の創案になると見なしているようであるが、私は反切上下字の字面も概ね『開元文字音義』に見られる音注を襲っていると推測する。

なお、この手の異調同音字声調読み換え音注を多用する文献は『九經字樣』以外には知られていない。重複して現れるものを除外すると、全音注 396 例のうち 58 例がこれに該当する。僅かながらも、この手の音注が混じるものということになると、他に無い訳ではない。管見の及ぶところでは、

『切韻』 「拯：無反語。取蒸之上聲」(拯韻)、
 Cf. 「拯：無韻。取蒸之上聲」(拯韻) 王三韻小注、
 Cf. 「拯：無韻切。音蒸上聲」(拯韻) 広韻、
 Cf. 「拊：說文音蒸上聲」(蒸韻) 広韻「升：識蒸切」小韻中、
 「簡音牽上聲」(獮韻) 広韻のみ(「獮：息淺切」小韻「蘚」の積文中に見える)

「馱：音黯去聲」(鑑韻) 広韻のみ

「范：無反語。取凡之上聲」(范韻)

『經典積文』「警：邊之入聲」(毛詩音義・中)、

「併：步頂反，又并之去聲」(爾雅音義・上中)

『大唐新語』「驢云縷平」(卷 13) 平山 (2007) による

「麪云泯 (<泥) 去」(卷 13) 平山 (2007) による

『太平広記』「麪：滅 (<滅) 之去声」(卷 258) 平山 (2007) による

『佩觿』 「麪：民去」(卷上) 平山 (2007) による

「凡：梵之平聲」(卷中)

「丞：与拯同韻，作丞上聲」(補)

「橙：蒸上聲」(辨證)

という例が見られる。以下の例、

『玄扈音義』「拯：蒸上聲」(69/6、432/9、1073/7)

『慧琳音義』「拯：(無反脚。) 取蒸之上聲」(5/2)、

「拯：取蒸之上聲」(40/7,92/1)、

「拯：(拯字無韻。) 取蒸之上聲」(57/40,64/31)、

「拯：蒸字上聲」(89/28)、

「拯：蒸字上聲字也」(50/25)、

「拯：蒸上聲」(46/32)、

「拯：蒸字上聲」(92/21)、

- 「拯：(拯字) 取模字上聲」(1/44)、
 「拯：(無反音。) 取莖字上聲」(12/27)、
 「拯：(拯,) 取莖上聲」(30/33)、
 「拯：(拯,) 取莖字上聲」(32/41)、
 「拯：(拯字, 無反脚。) 取莖字上聲」(61/1)、
 「拯：(無韻, 故無反。用) 莖字上聲 (即是)」(90/27)、
 「拯(<楳)：(拯(<楳)字牒(>韻。) 取丞上聲」(25/20)、
 「拯：(支境反。) 音取蒸之上聲」(11/1)、
 「拯：蒸之上聲 (、承境反)」(12/13)

は『切韻』よりの引用だろう。両音義には他に以下のような例がある。

- 『玄扈音義』「紇：痕入聲」(984/2)、
 『慧琳音義』「紇：痕入聲」(40/19)、
 「紇：無反音。取痕之入聲」(10/42)、
 「紇：痕字入聲」(82/10)、
 「齧：無韻。痕字入聲」(98/32)、
 「紇：(又作齧。) 痕入聲」(40/19)、
 「勝：華字去聲」(61/36)、
 「帆柁 帆字取犯字平聲」(81/15)

- 曹憲『博雅音』「懇, 苦恨、如上聲讀之」(卷 1/1502/4) 龍宇純 (1965, p.354)
 「艦, 銜之上聲」(卷 9/1571/8) 龍宇純 (1965, p.354)
 「拊：蒸之上聲, 四聲蒸拊證職」(卷 1/1507/2-3) 古屋(1985, pp.64-69)、
 「鳩：沈之去聲」(卷 10/1580/4) 古屋(1985, pp.64-69)
 「焯：穹之去聲」(卷 2/1510/1) 古屋(1985, pp.64-69)
 「拊：蒸之上聲」(卷 1/1524/6 ; 卷 1/1525/1 ; 卷 5/1535/8)
 「擷：鄒之上聲」(卷 1/1525/4)
 「僞：稱之平聲」(卷 4/1531/4-5)
 「葦：寢去」(卷 2/1513/5)
 「按：安去」(卷 3/1524/8)

吉田金彦 1955 は圖書寮本『倭名類聚抄』に「諄 〃 …上准之平声。韻詮 〃 至心教」(p.85) という例があることを指摘している（「圖書寮本倭名類聚抄出典攷」(下ノ一)『訓点語と訓点資料』第五輯, p.87)。吉田氏はこの条を『韻詮』を引用する例として挙げておられるが、問題の音注が『韻詮』によるものかどうか、これだけからは断定できない。これと似たような例だが、『倭名類聚抄』に

- 馬駒等附 『四声字苑』云：「馬麻之上声…南方火畜也。…」 卷 11/9b
 鐙鞞 『楊氏漢語抄』云：「鐙鞞…一云鐙斬音斤去声。」 卷 15/2b-3a

糶 野王案：「糶比之去声…穀實但有皮而無米也」 卷 17/2b

という例がある。遺憾ながら、『四声字苑』、『楊氏漢語抄』いずれも現存せず、下線部の音注が果たして直前に挙がる文献からそのまま引いてきたものか確認ができない。最後の例の「野王」は、原本系『玉篇』現存部分ではこの部分を欠いており、宋本『玉篇』とは積文が一致しないのだが、『玉篇』を指すものと考えて良からう。これについてもやはり原本系『玉篇』からの確認かどうかは確認不能である。ただ、四声相配の関係を利用した音注を日本人が勝手に作り出したとは考え難く、直接の引用でなければ、何らかの渡来の小学書に見えるものを引用した可能性が高い。

この他、広韻で見られる

便：房連切、又去聲 (仙韻)
 障 (陽韻「章：諸良切」小韻中)：又音去聲
 俚 (旱韻「但：徒旱切」小韻中)：本音去聲
 僚 (小韻「僚：力小切」小韻中)：又音平聲
 仗 (養韻「丈：直兩切」小韻中)：又音去聲
 慘 (感韻「慘：七感切」小韻中)：又音平聲
 足 (遇韻「緇：子句切」小韻中)：本音入聲
 弟 (霽韻「第：特計切」小韻中)：又音上聲
 悌 (霽韻「第：特計切」小韻中)：又音上聲
 蘊 (問韻「醞：於問切」小韻中)：又音上聲
 閒 (禡韻「禡：古覓切」小韻中)：又音平聲
 研 (霰韻「硯：吾甸切」小韻中)：又音平聲
 鮮 (線韻「線：私箭切」小韻中)：本音平聲
 便 (線韻「便：婢面切」小韻中)：又音平聲
 鹽 (豔韻「豔：以瞻切」小韻中)：本音平聲

といった又音の注記も四声相配の関係を利用したものである。

古屋昭弘「切韻における「伽」の音注について」『開篇』Vol.1,1985,pp.64-69 にはこの他、岡井慎吾『玉篇の研究』「玉篇佚文内篇」p.301 より「拯：音蒸上聲」という例が挙げられている。上掲の龍宇純(1965)、古屋(1985)からの引用例はいずれも出現箇所を示していないので、太田が陳雄根評点本(万有文庫を底本とする)に基づき、巻数、頁数を挙げておいた。なお、上掲の『博雅音』中、最後の二例は『九經字樣』に見える音注と形式的に同じであるが、字面が一致するものは無い。もし、この二例が曹憲より後の時代の誰かによって加えられたものでも、別の音注形式であったものが改められたものでもないのであれば、遅くとも隋代に存在していたということになる。となると、『九經字樣』の同類の音注にしても、隋以前の何らかの文献に挙がるものを利用したものかも知れず、形式のみならず、字面に関しても何らかの小学書の引用である可能性が出て来る。

これに類するものとして、上掲古屋論文が主たる対象とした切三の「伽：無反語。曠之平聲」(歌韻)がある。切三のこの小韻に所属する字はこの「伽」一字のみ。王一、王三、広韻は「伽：求迦反」。王二は所属を誤って、「菰：叵(▷巨)羅反。(二)」小韻に収めるべきところ(他に「伽」あり)、「虵：夷柯(。又吐何、食遮二反。虵。二)」に収める。この切三の音注は他の例に見られる四声相配のあり方と異なり、陰声韻尾(この場合、ゼロ韻尾)に入声を配するというやり方で、七音略(第25転のみ)、切韻指掌図に見えるが、切韻系韻書では他に例が無い。これについては次の注(7)参照。

平山久雄「《大唐新語》侯思止所反映の音韻問題」《語苑擷英(二)祝唐作藩教授八十华诞学术论文集》, 中国大百科全书出版社, 2007.12, pp.68-72 に拠れば、[唐] 劉肅撰『大唐新語』所収の侯思止の訛りを探り上げた条に「驢云縷平」、「麪云泥(>泯)去」という例がある(巻之十三。唐宋史料筆記叢刊, 許德楠、李鼎霞点校, 中華書局, 1984, p.190)。同書は唐の高祖の武徳(618-626)初年から大暦(766-779)の末に至るまでの遺文旧事を記録したものだ。この故事は宋の郭忠恕『佩觿』、同じく宋代の[李昉等]『太平広記』(巻258. 人民文学出版社1959.8点校本ではp.2012)にも見えるが、「侯思止」を「侯思正」としており、音注の形式には違いが見られる。「驢云縷平」は『佩觿』では「驢：力朱翻」、『太平広記』では「驢：夔」と、どちらも異調同音字声調読み換え音注ではなくっており、「麪云泥(>泯)去」は『佩觿』では「麪：民去」、『太平広記』では「麪：減(>泯)之去声」となっている。ここに挙げられた異調同音字声調読替音注が、最後の『太平広記』の一例を除き、上に挙げた『九經字様』のそれと同じ形式になっているのは興味深い。これらがどれほど唐代の旧を留めているのか分からないが、唐代の筆記の類からは類似の音注を他にも見出すことができるかも知れない。蛇足ながら、上掲の余嘉錫のコメントに「…「反言」とは反切のことであり、「紐」と言うのは四声相配する双声字のことである…(例えば、真軫震質、人忍勿日がそれに当り、これらはいずれも四字が双声の関係にあり、全ての字が同一の紐に帰属している。これはつまるところ、齊、梁から隋、唐にかけて音韻を問題にする場合によく出てくる用語である。…)」とあり、穿った見方をすれば、この手の音注は六朝から唐代にかけては、広く行われていたのではないかと、憶測している。

- (7) 韻図によっては、例えば ai に at を、au に ak を配するような分類の仕方のものもある。例えば『切韻指掌図』、『四声等子』など。『切韻指掌図』を例にとり、中古音の枠組みで説明すると、全20枚の転図のうち、第1転では平、上、去声に効撰韻—入声に宕撰韻；第3転では平、上、去声に遇撰韻—入声に通撰韻；第4転では平、上、去声に流撰韻—入声に曾、臻撰韻；第11転では平、上、去声に果、仮撰韻—入声に山撰韻；第17転では平、上、去声に蟹撰韻—入声に山撰韻；第18、19転では平、上、去声に止、蟹撰韻—入声に臻撰韻；第20転では平、上、去声に仮、蟹撰韻—入声に山撰韻を配している。つまり入声字は陽声韻尾(-m, -n, -ŋ, -uŋ)のものとの対比においても、陰声韻尾(-u, -i, -ɨ)のものとも対比においても現れるのである。『七音略』もこのようになっているところがある。第25転で平、上、去声に効撰諸韻を挙げ、入声に宕撰

字を配しているのがそれである。他の転図では見られないから、これは編纂過程で利用した『切韻指掌図』式韻図の配字が紛れ込んでしまったものだろう。通常だと四声相配という場合にはこのような関係は含まれない。そして『韻鏡』にはこの手の配し方は全く見られない。なお『切韻指掌図』式韻図は中古音以降の韻の合流を反映し、16 摂よりも後の韻の合流を承けた 13 摂を用いたものであるが、本稿の意図は中古音理解にあり、この韻図の枠組みを以て中古音を説明する。韻図ではないが、陰声韻尾に入声韻尾を配するやり方は空海『文鏡秘府論』所伝沈約『四声譜』に見られる。

- (8) 腫韻をよく見ると、末尾の方に「鍾：都鷓切 $toŋ$ という小韻があり、その注を見ると「此是冬字上声」とある。そして直後に「鷓：莫鍾切 $moŋ$ という小韻がある。こちらには「冬字上声」というような注記は無いが、その反切の字面から「鍾」と同じ韻母を持つことが分かる。

「鍾、鷓」は腫韻のそれ以外の小韻の反切には用いられていないから、この二つの小韻の韻類はこれだけで系聯して、一つのグループを成してしまうので、他の腫韻小韻に現れる韻類とは異なるものであると言えるのである。顧炎武『音論』卷上（音韻学叢書本 10 葉表-裏）また「清代経学の研究」班「顧炎武『音論』訳注『東方学報』第 51 冊 1979.3 p.641 参照。この二つの小韻は原本切韻には無かったと一般に考えられている。上田正『切韻諸本反切総覧』によれば、切韻系韻書の中で、王三は前者の反切を「都隴切」とする。これだけを見ると、いわゆる「類隔切」（後述。34.例外的配置の問題と類隔切 舌音の類隔を見よ）を用いた「増加小韻」（後述。6.2.増加小韻を見よ）で、既に「冢：知隴切 $tioŋ$ という小韻があるにも関わらず、それに気づかずうっかり、それと同音の小韻を増やしてしまったもの、と見なす余地も無い訳ではないが、他の切韻系韻書の字面の違いを考慮すると、たとえ同じ「隴 $lioŋ$ 」を下字にしているも、「冢：知隴切 $tioŋ$ 」と同音と見なすべきではない。「鍾、鷓」以外に反切下字として用いられるものが無く、相互に下字とすることを避けようとするなら、腫韻字を用いざるを得ないのである。また単なる杜撰で、他の多くの腫韻小韻の反切下字が「隴」であることから、「鍾」小韻についても誤って「隴」を反切下字にしてしまったという可能性もある。いずれにせよ、後人が「鍾、鷓」を増補するに当たり、原本切韻に冬韻上声に当たる韻目がないから、苦し紛れに腫韻に紛れ込ませたということなのであろう。原本切韻には上声「拯」韻のように小韻が一つしかない韻目や、平声「凡」韻、入声「櫛」韻のように小韻が二つしかない韻目もある。もし原本切韻の段階から存在していたならば、この場合もたとえ僅か 2 小韻しか無くとも、腫韻に紛れ込ませることなく、独立した韻目名を与えていたに違いない。実は原本『切韻』では平声冬韻 $oŋ$ と鍾韻 $ioŋ$ の間でも混乱がある。鍾韻に帰属すべきものが冬韻に混じりこんでいるのである。これは王二、王三の韻目表の注記に「陽休之は冬韻と鍾韻、江韻を分けない。呂静と夏侯詠は分ける。今呂、夏侯に從う」（相配する去声、入声でも同様）とあることから考えると、恐らく呂静、夏侯詠に基づいて分韻して、その後で陽休之の『韻略』に基づき未収字を補ったために帰属を誤ったということなのだろう。例えば「恭 $kioŋ$ ：駒冬」、「蠶 $sioŋ$ ：先恭」、「縱 $ts'ioŋ$ ：七恭」といった小韻がそれに該当する。「恭 $kioŋ$ ：駒冬」は反切下字が直音なので、一見 $[koŋ]$ を表

しているかのように見えるが、冬韻には他に「攻koŋ : 古ko冬toŋ」がある。反切上字「駒kyu」が鼻字の介音を担っている、異例反切と見なすべきであろう(早期反切の可能性あり)。『広韻』以前の切韻系韻書に見られる冬韻増加小韻にも「罌k^hioŋ : 曲恭」、¹「酈p^hioŋ : 敷隆」といったものがある。相配する去声(宋:用)、入声(沃:燭)ではこのような混乱は見られない。『広韻』ではこれらの冬韻に混じりこんだ鍾韻字を鍾韻に移すという訂正措置がとられているが、冬韻上声字が腫韻に押し込められたのは『広韻』以前のことで、その頃だと、平声においては依然、原本『切韻』以来の冬韻に鍾韻字が混じっている状態にあったであろうから、このような増補のやり方にはさほど抵抗はなかったことであろう。『広韻』は平声と上声で同じ状況にあったものを校訂するに当たり、平声は鍾韻という韻目が存在していたから、冬韻に混じる ioŋ の小韻をこちらに移したが、上声では然るべき韻目が無く、それが出来なかったから、むむ無く「冬字上声」というような注記を施すに止めたということかもしれない。何故、改訂に当たって新たに韻目を立てなかったのか、他にも理由があったかも知れないが、今のところはそれが該当小韻が僅か二つしかなかったからと考えておく。

- (9)この例の後に更に以下の例が続くが、誤字、脱行が有って複数の行が一行になっているように思われる。

傍	旁?	傍	薄	婆	潑?	縹?
荒	恍	恍?	霍	和	火	貨

同じものが『悉曇藏 卷二』『大正藏』 Vol.84, p.381 下にも見えるが、こちらにも誤りが多い。

傍	旁?	傍	薄	婆	菠?	破?
荒	恍	恍?	霍	吠(>味?)	火	貨

一先ず、以下のような音韻の組み合わせを意図していたものと考えておく。□は切韻に該当小韻が無いことを示す。

傍 baŋ ^平	□(<旁)baŋ ^上	傍 baŋ ^去	薄 bak ^入	婆 ba ^平	爸(?<潑)ba ^上	縹(<縹)ba ^去
荒 huaŋ ^平	恍(<恍)huaŋ ^上	恍(?<恍)huaŋ ^去	霍 huak ^入	□(<和)hua ^平	火 hua ^上	貨 hua ^去

先に「皇 huaŋ^平…」、「光 kuaŋ^平…」があるから、この2行は元は「傍 baŋ^平…」、「…荒 huaŋ^平」以外に、「幫 paŋ^平…」あるいは「滂 p^haŋ^平…」、「骹 k^huaŋ^平…」のような行があったのが誤って上の2行に纏められてしまったのかも知れない。なお上に示したように「傍 baŋ^平…」の一行には陽韻尾韻上声字が存在しない。また「滂 p^haŋ^平…」だと陽韻尾韻去声に該当するものが無い。このような実際に該当する字が存在する場合、そのために陀羅尼に見られるような新たな字を作成するか、類音を特別に読み換えるような処理をしていたたのではないかと思う。平声でしかない「旁」は臨時に上声を読み換えるということであろうし、「和」も無声化が起こっていなければ、調音点が同じである匣母を臨時に曉母に読み替えるということであろう。但し「攜」についても同じような配慮が働けばこのような字があったかも知れないという、全くの推測である。「荒」には去声曉母の音もあるが、恐らく同じ字を二度並べるよりは、類音字を読み替える方が好ましい。或いは故意に空欄にしてあったか。そうであればそのことが先に指摘した

ような混乱を生み出すことになったとも考えられる。「guan^平…」に当たる一行は該当字が全く存在しない。また「guan^平…」に該当するものは陽韻尾韻の平上声字が存在しない。推測を重ねることになるが、沈約の『四声譜』はこのような文字の組み合わせの網羅的一覧表のようなものだったのではないか。このような一覧表自体が既に韻図のようなものだが、これらの字をマス目に埋めていけば、原始的な韻図を作成することができる。なお『悉曇藏 卷二』『大正藏』Vol.84, p.381 下には本文 p.35 の「四字一紐」12 例と同じものが上がっている。

5.3. 独用と同用

- (10) これには異説もあり、馬宗霍 Mǎ Zōnghuò は『音韻学通論』第四「二. 広韻與諸韻書韻譜異同考」(6 葉裏—25 葉表) のうちの「広韻獨用同用四声表」(6 葉裏—12 葉裏) 及び「四. 唐宋用韻與広韻之出入」の「唐人用韻考」(29 葉裏—38 葉表) のうちの特に pp.9-10 ; 29-37 で宋代になって附されたと主張する。馬説は張世祿『中国音韻学史』(中国文化史叢書) 下 商務印書館 1938.7 pp.103-104 及び三沢諄治郎『韻鏡入門』pp.30-31 で簡潔に紹介されている。

5.4. 韻目、韻、小韻、韻類

- (11) 陳澧は『切韻考』「外編」卷三「韻類考」で

「夫韻部分至二百六固多矣。今以其切語下字考之，有一韻只一韻者、有一韻而分二韻、三類、四類者説見条例。平上去入四声相承之。四韻一韻一類，則余三韻亦一類。一韻分二類、三類、四類，則余三韻亦二韻、三類、四類。亦有相承而少一類者，即其切語系聯不可分故也。

日訳：韻のグループが 206 に分かれるのはそもそも多いと言える。今その反切下字を調べて見ると、一韻中にただ一つの韻類しか含まないようなものもあれば、一韻中に二種、三種、四種の韻類を含むようなものもある。平上去入四声相配する関係にある韻もこれと同様の状況を呈する。つまり四声相配の関係にある四つの韻の間で、そのうちのある韻において含まれる韻類は一種類であれば、他の三つの韻に含まれる種類もまた一種類である。一韻に二種、三種、四種の韻類が含まれているのであれば、その場合は他の（四声相配する関係にある）三韻もまた（それぞれ）二種、三種、四種の韻類を含む。四声相配の関係にある韻同士の間で、その一方の韻類の数が一つ少ないといったような場合があるが、それは反切用字が系聯してしまって、分けることができないという理由による。」

と言う。

6.1. 反切とは

- (12) 今我々が一般に利用する『博雅音』は王念孫 Wáng Niànsūn が、正徳乙亥(1515)支硎山人 Zhīxíng shānrén 手跋影宋本、皇甫録 Huángfǔ Lù 世業堂 (明正徳十五 1520 年) 刻本、畢効欽 Bì Xiàoqīn 『博古全雅』所収本、吳琯 Wú Guǎn 『古今逸史』所収本などのテキストに基づき、校訂を加えて作り上げたもの。これらの王念孫所拠本には『廣雅』正文と曹憲の音注が同居しているが、

王念孫は曹憲の音注を独自の校訂を施した張揖の正文及びそれに関する校語から切り離して独立させた。それが曹憲『博雅音』である。それまで単行の曹憲『博雅音』は存在していなかった。隋の秘書学士曹憲が煬帝の諱を避けて『廣雅』を『博雅』と改めたとされる。『廣雅』と『博雅』は実は同一とされるが、例えば『旧唐書経籍志』には『廣雅』四卷張揖撰、『博雅』十卷曹憲撰とあり、[宋]王応麟『玉海』卷四十四でもこれを受けている。避諱の必要がなくなった後代において、曹憲が注を施した『廣雅』を『博雅』と呼び続けることで、それ以前の『廣雅』と区別するという配慮があったのであろう。そのせいか、王念孫の『廣雅疏証』に附された単行の曹憲音注は『博雅音』と名付けられており、『廣雅音』と呼ばれることはない。

王念孫校訂本に見られる「反」の有無その他の注音形式の不統一は、依拠した諸本の間で強い一致を示すもので、王念孫は所拠テキストに間々現われる「切」を一律「反」に改めたということ以外は、このような注音形式を統一することをしていない。音注の不統一が諸本で一致するものであれば、この不統一は曹憲『博雅音』祖本にまで遡る可能性が高い。そうであれば、このような注音形式の不統一は曹憲が様々な先行小学書の音注をそのまま取り込んだ結果であるかも知れない。つまり反切に限って言えば、ある文献では「反」の無い「～～」という形式、別の文献では「～～反」という形式でそれぞれ統一されていたが、曹憲はそれをどちらかに統一することをせずに、そのまま『博雅音』に取り込んだ、という可能性である。これは敦煌出土の『毛詩音』残巻、『礼記音』残巻についても言えることである。『博雅音』にはまた直音注の他、四声相配の関係を利用した音注もあり、これを欠く異本の存在は報告されていない。四声相配音注の具体例は既に注(6)で挙げた。時代的に見て、曹憲が依拠したであろう小学書は六朝期のもと考えられる。これらの音注が曹憲編纂の祖本にまで遡ると考えて問題無いのであれば、つまり唐代以降の増補改定作業で付加えられたというのでないのであれば、四声相配音注が六朝期にある程度行なわれていたということになり、沈約『四声譜』などとの関連を考慮に入れる必要が出てくる。輯佚書に残る早期音注と比べてみると興味深い結果が出るかもしれない。また張揖は生没年未詳であるが、魏の人で、『廣雅』は太和年間(227-232)に成ったとされている。彼の著作は『廣雅』以外は伝わらなかったが、黄奭^{せき}Huáng Shiの『黄氏逸書考』所収『漢学堂経解』には『埤倉』、『古今字詁』、『雑字』の佚文が収められており、そこには反切が見られる。見たところ、その反切は『博雅音』に見られる反切とは全く一致せず(1例一致するものがあるが、基づくところを確認したところ、玄扈音義所引『廣雅』とあるので、除外する)、同書に収める曹憲『文字指帰』の逸文に見える音注もまた、『博雅音』と一致するものは無い。但し佚文中の音注の字面は後人によって改められたかも知れないので、一致しないからといって安易に判断を下すべきではない。曹憲が音釈を施す以前の『廣雅』に既に何者かによる反切があった可能性も無い訳ではないことを指摘しておきたい。

宋本の趣をよく留めるとされる皇甫録本で「～切」という反切の出現状況を調べると、巻によって大きな偏りがある。太田の調査では巻1(0)、巻2(1)、巻3～5(0)、巻6(27)、巻7(11)、巻8(9)、巻9(1)、巻10(1)。時代的に見て、隋代の曹憲が「～切」という反切を用

いたことはまず有り得ない。中には「呂静～切」（巻 6）というような記載もあるから、伝写の際に「～反」を「～切」に誤ったものとするのが自然である。現存『博雅音』の祖本そのものが一種百衲本のような、巻により異なる複数のテキストを寄せ集めたようなものであったのかも知れない。「～切」が曹憲の手になるものではなく、後代の誰かによる追補である可能性も検討してみる余地があろう。

なお曹憲音が正文とともに現われる王念孫校訂以前の旧を留めるテキストは、『旧唐書・経籍志』には『博雅』十卷、曹憲撰」と著録されるが、現在は普通『廣雅』とのみ呼ばれ、現存テキストを見ると、各巻頭に「魏・張揖撰、隋・曹憲音釈」とある。先の 2 種以外に、文淵閣四庫全書（台湾商務印書館本第 221 冊所収）に収められている『廣雅』もこの旧を留めるテキストで、曹憲の名は見えないが、音注は付されている。近年「欽定四庫全書薈要」も単行本が出ており（吉林出版集团有限责任公司）、『廣雅』は『玉篇』と一冊に纏められている。これらの各巻頭には魏・張揖撰、隋・曹憲音釈とある。その他、皇甫録本は『北京図書館古籍珍本叢刊』5「経部」に『博雅』の名で収録されている（pp.183-261）。各巻頭には「[魏]張揖撰、[隋]曹憲音解」とある。巻頭（p.183）に附された復翁 Fùwēng 跋文には「畢本者、畢効欽『五雅』中本也」とあるが、『五雅』ではなく、『博古全雅』と称されている場合もある。『名古屋蓬左文庫漢籍目録』に『博古全雅』七十二卷 明・不著編人 明・金閻世裕堂刊本の著録あり、うちに『廣雅』十卷 魏・張揖撰、隋・曹憲音解 明・畢効欽校刊とある。ただし、『内閣文庫漢籍目録』には同一テキストと思われるものの、[博古全雅]（五雅）明・畢効欽校 明刊とあり、この [] は書名が不備なことを示す。或は坊刻本なので、（版木の売買、）重版にあたり、書名や版元名だけを変えた可能性もあり、中には所収『廣雅』に叢書名として『五雅』とあるものもあるのであろう。陽海清等『文字音韻訓詁知見書目』湖北出版社、2002.10, pp.416-417 に著録される『廣雅』には「明嘉靖隆慶間畢効欽刻五雅本」、「明嘉靖畢効欽刻匯印五雅・二雅本」、「明萬曆十六 1588 年瑞桃堂刻五雅本」とするものがある。いずれも畢効欽本の異本であろう。太田未確認。これとは別の『五雅』は京都大学人文科学研究所に郎奎金輯天啓六年序刊本が蔵されている。東大東洋文化研究所には郎奎金輯『五雅全書』として明武林堂策檻刊本が蔵されているが、内閣文庫の同一テキストと思われるものは『五雅』となっている。これもまた民間での重版にあたり、書名（及び版元名）を改めたということか。和刻本もある。宝暦 7 年(1757) 東都 吉文字屋次郎兵衛大黒屋孫兵衛刊。『国立国会図書館漢籍目録』に著録されている。これには影印本もあり、汲古書院刊『和刻本辞書字典集成』冊一 1984 に収録されている。『内閣文庫漢籍目録』に拠れば、『五雅』はまた、明葉自本 Yè Zìběn 糾譌 陳趙鶴 Chén Zhàohè 校の清刊本もある。『古今逸史』は「影印元明善本叢書之一」として、台湾商務印書館から刊行されたものがある（1937 が初版か。その後も何度か重印されている。神戸外大蔵本は平装全 56 冊の第 6 冊。）。明・何允中輯『廣漢魏叢書・経翼』（嘉慶中刊本）、清・王謨輯『増訂漢魏叢書・経翼』（乾隆五十六 1971 年金溪王氏刊本が初版か？）にも『博雅』（魏・張揖撰、隋・曹憲音釋）の書名で収められている。先の『文字音韻訓詁知見書目』では明・萬曆

胡文煥文會堂刻格致叢書本というテキストもあるらしい(京大人文研所蔵の『格致叢書』には収録されていないようである)。

(13) 該当箇所は以下の通り：

「蓋 案『字統』公艾翻，苫也。覆也。『説文』公害翻，從艸、從盍。取盍，蓋之義。張參『五經文字』又公害翻。並見艸草部。艸音草。玄宗皇帝御注『孝經』「石台」亦作「蓋」。今或相承作「蓋」者，乃從行書。艸與荅、若、著等字並皆訛俗，不可施於經典。今依『孝經』作蓋。」

(百部叢書集成所収後知不足齋叢書本だと pp.11-12。杉本つとむ編『異体字研究資料集成』別巻1 雄山閣 1975.8 所収『九經字樣』だと第7葉表一裏 p.160 上) という記載がある。同書にはこの条以外に反切による音注例は無い

ここに現れた反切は、同じく唐の開成石經に残る『五經文字』の反切が一律「～反」であるところから見て、唐玄度が引用に当り、「～翻」に統一したものか。『五經文字』の成書は代宗の大曆 11 年(776)とされ、その後石に刻まれた。『九經字樣』は厳密な成書時期は明らかではないが、牒文に開成 2 年(837)とある。やはり牒文に『五經文字』に倣って著されたとあり、成書年代が『五經文字』に遅れることは明らかであるが、これを以て「～反」という形式が「～翻」より古いと即断はできない。いずれにせよ開成石經に見えるのであるから、「～翻」が唐代に用いられていたことは疑いようが無い。細かいことを言い出せば、文中に現れる『字統』と『説文』の反切が本来「～翻」だったのかどうかについても検討せねばならないが、よく分からない。『字統』については『佩觿』に「鵠鵠 上胡屋翻。鳥名。下巨乙翻。鵠鵠。出《字統》」(下 40b/8, p.80) という例が見られるが、同書では「～翻」に統一されている。一方、慧琳音義所引『字統』反切は一律、「～反」で現れているから、これを以て『字統』の反切が均しく「～翻」だったとは言えない。また許慎の『説文解字』には反切はなかった。ここに現れる『説文』は、後人が音注を加えた『説文』ということであるが、何であるか特定できない。周祖謨<唐本説文與説文舊音>『漢語音韻論文集』商務印書館 1957, pp.18-50; 『問學集』下, 中華書局, 1966, pp.723-759 によれば、『字林』(或いは『説文字林』) 音注引用の可能性が高いが、この書も散逸してしまっており、輯佚書に見られる『字林』逸文には「蓋：公」、「蓋：公害」は見当たらないので、証明はできない。今に残る『字統』、『説文字林』、『説文音隱』等の佚文に見える反切は「～反」となっているものの、これも引用に当って本来「～翻」であったものがこのように統一されたのかも知れず、決め手とはなり得ない。とりあえずは『字統』も『説文』も元は「～反」だったろうと考えておくと、逆に「～翻」であったものが「～反」に改められた可能性も無いではない。

『説文解字』の徐鉉等表に「説文之時，未有翻切」とある。徐鉉(916-990)は五代十国から北宋にかけての人で、「～翻」という反切表記を用いた郭忠恕(?-977)とほぼ同時代の人である。「翻切」の表記は宋代以前の遺風を留めるといふことであろうか。

多くの反切表示は宋代以降に「～切」に改められたことであろうが、それでも「～反」を用いる文献として、音韻学の代表的文献の中では『經典積文』、『玄応音義』、『慧琳音義』などを

挙げることができる。宋の郭忠恕『佩觿』は「～翻」を多用する文献であるが、注(5)で言及した平山久雄「《大唐新語》侯思止所反映の音韻問題」中国大百科全书出版社 2007, pp.68-72 で紹介されている故事は『佩觿』の他、『大唐新語』及び『太平広記』にも見られるものであった。ここではそのうちの反切表記に関わる音注のみ取り上げる。『佩觿』の当該条は当然のことながら、「雞：古黎翻」、「驢：力朱翻」、「喫：苦弋翻」といずれも「～翻」という形式になっている。これらの音注が『大唐新語』及び『太平広記』でどうなっているかという点、

『大唐新語』	『太平広記』	『佩觿』
雞云圭	雞：古黎反	雞：古黎翻
驢云縷平	驢：(音) 夔	驢：力朱翻
喫云詰	吃(>喫)：苦鼓(>詰?)反	喫：苦弋(>弋?)翻

上掲の三種の書に見られる注音の差異は必ずしも全くの同音の言い換えではなく、最後の「喫」の例は誤りも含んでいる。『大唐新語』の例は恐らく「喫 喫食」と「吃 語難」の取り違いだろう。ここでは前者の意味で用いられており、そうであれば広韻では錫韻所属である。迄韻の「詰」は「喫」ではなく、「吃」と同音である。『太平広記』、『佩觿』も同様の誤を犯しているものか、判断が難しい。平山 2007 はこの両書の音注は誤りが多く、『大唐新語』の音注を校勘するには役立たないと述べている。『佩觿』の例はもし錫韻所属の音を意図するもので、曾一梗撰の合流を反映しているということならば、下字は「弋」のままが良いし、被注字も「吃」に改める必要はない。『太平広記』の「鼓」については字形の類似から、「詰」の誤りかとも思うが、そうであれば、被注字と全く同音で、反切としては甚だ不適切な用字となる。今、どう訂正すべきか定見を持たないので、これ以上は議論しない。『佩觿』、『太平広記』いずれも宋初に成ったものであるから、我々の見るテキストが成書時の旧を留めているならば、この頃はまだ「～反」、「～翻」の両方が用いられていたということであろうか。『佩觿』では切韻序を引用するに当たり、「支：章移」、「脂：旨夷」等の反切を全て「～翻」としている。元は「反」も「切」も無しか「～反」であったろうから、孫引きでなければ、郭忠恕が引用するに当たり、「反」も「切」も無し、或は「～反」であったものを「～翻」に改めたということであろう。『佩觿』で「切」を用いているのは「項切許縁」、「芑切墟里、祛豨」、「攻切古紅、古冬」の三例のみ。いずれも「X 切 AB」の形式で、「X：AB 切」という形式のものは無い。「反」を用いたものも皆無。『佩觿』以外に「～翻」を多用する文献が見当たらないのは、そもそも「～翻」が音注形式として「～反」ほど通行していなかったということなのか、或いは「反」以上に「翻」が強く忌避された結果ということなのか、はたまた後代に悉く「切」に改められてしまったものか、よく分からない。同じ郭忠恕の手になる『汗簡』では「A 音 B」タイプの直音注以外の音注は全て「～切」式の反切となっているから、後の書き換えでなく、そもそもがこのようであったということならば、彼が後周に仕えた人であったことと「～翻」の多用とを関係づけることは難しい。また、先の『大唐新語』の音注形式との異同や切韻反切が「～翻」となってい

る点などからして、引用文献の表示形式をそのまま使用した結果と考える訳にもいかない。

『九經字樣』には一箇所、「受」に対して「平表紐」という注が見られる（『異体字研究資料集成』別巻1所収『九經字樣』だと19葉裏。p.166上）。『九經字樣』について以下論ずるところには注(1)で既に言及したことで重複する点が少なくないので、併せ参照されたい。『五經文字』巻下「一百廿喃部」（叢書集成本p.55下6及びp.71上2）に「平表反」とあり、『篆隸万象名義』、『慧琳音義』にも「受：平表反」という反切が見えるから、「平表紐」もまた反切注であることには疑いが無いが、「～紐」という反切形式は他に例を見ない。「平」と「表」の二字は声母、韻母いずれの点でも違っているのに、「平表紐」がいわゆる「紐声反音」（また「紐声反」とも言う。上字、下字が声調以外全く同じものを並べる反切）であることを示したと考えることもできない。顧炎武 *Gù Yánwǔ* は『音論』巻下「反切之名」で

「…“蓋”字下云，“公害翻”。代“反”以“翻”。“受”字下云，“平表紐”。代“反”以“紐”。是則“反”也，“翻”也，“切”也，“紐”也，一也。」

日訳：「蓋」という字のところに「公害翻」という反切が挙がっており、「反」ではなく「翻」が用いられている。「受」の字のところには「平表紐」という反切があり、ここでは「反」の代わりに「紐」が用いられている。つまり、「反」とか、「翻」とか、「切」とか、「紐」とかというのは同じことを指しているのである。」（音韻学叢書本9表～10裏）

と言う。注(6)で指摘したことの繰り返しになるが、唐玄度が序で

「其声韻謹依『開元文字』，避以反言，但紐四声，定其音旨。

訳：音韻に関しては謹んで『開元文字音義』に従い、反言は避け、紐（声母）が同じで、四声異なる字を挙げ、声調を指示するという方法だけを用いて、その字音の実体をはっきり示すことにする。」

と言っており、余嘉錫は『四庫提要辨證』巻二經部二「九經字樣」の条で、このことから『開元文字音義』は反切を用いず、四声相配する関係にある字音を用いて音注を施したとする（冊一p.112-113）。先に**5.2.四声相配**で例示した、「控：空去」式の音注がそれに当たり、『開元文字音義』から引用されたものだけということになる。今、この手の音注を「紐声声調指定式音注」と呼ぶことにしよう。厳密に言えば、「控：空去」式だと、通常理解されている「紐声反切」と異なるが、その一変異型もしくは改良型と見なすことは難しくない。憶測に過ぎないが、「～紐」という形式は通常の反切形式の音注をこのような「紐声反切」式音注と同様に扱うために『開元文字音義』が生み出したものではないか。切韻系韻書では「平表反」小韻は並母B類であり（代表字は均しく「蕪」。上字庚韻並B、下字宵韻上声小韻幫B）、相配する平声、去声には並母A類小韻はあるが並母B類小韻は無い。すると「紐」に該当する字音、つまり「平表反」から帰納される字音と声調だけ異なる字音は存在しないから、「紐声声調指定式音注」は有り得ず、反切を用いざるを得ない。そこで音注を直音若しくは「紐声声調指定式音注」で統一しようとした『開元文字音義』は、「紐声反音」の「紐」を拡大解釈して、このような已む無く採用した反切を「～紐」と表記した、ということではないか。当時にあつては「～切」という

形式の反切はまだ存在せず、「～反」若しくは「～翻」しかなかったであろう。これを忌避するとすると、上下字のみの「反」も「翻」も無い反切かさもなくば、このような変則的な反切表記を採るしかなかったであろう。そうであれば「～紐」は『開元文字音義』においては、マイナーな音注形式であったはずである。余嘉錫説に従えば、この音注もまた『開元文字音義』由来ということになるだろう。「公害翻」の「～翻」の方は『開元文字音義』は反切を用いなかったということであるから、これとは異なる資料よりそのまま引用したものか、もしくは唐玄度が異なる資料より引用するに当たり、本来の「反」も「切」も付さない上、下字二字のみの反切もしくは「～反」とあった反切を「～翻」に改めたものということになるだろう。前者の可能性が高い。そもそも『開元文字音義』には反切形式の音注はほとんど無かったはずであり、そのような少量の反切に「～紐」と「～翻」が混在していたとは考え難い。上に全文を示したが、『九經字様』におけるこの一条の積文は他に比してひとときわ長く、その形式は他の条に見られる形式とは大いに様相を異にしている。そこに引かれる『五經文字』の反切もまた「公害翻」となっているが、開成石經の『五經文字』の反切は全て「～反」で、該当反切もまた「公害反」である。『玉函山房輯佚書』、『小学叢殘』所収『開元文字音義』佚文に見える音注は直音形式のもののみ。『本邦殘存典籍による輯佚資料集成』には「～反」式の音注が見える(p.200)。しかし、出典は『慧琳音義』、『希麟音義』であり、これについては汪黎慶輯『小学叢殘』二「開元文字音義」に

「据《唐会要》載張九齡「賀御製開元文字音義狀」，曰：「去嫌於翻字」。又唐玄度《九經字様》序曰：「謹依《開元文字》、避以反言。」則是書概無反切。《慧琳音義》五引鬪俱雙反、鰲力奚反。殆琳公增益，非其原本。」

訳：『唐会要』にある張九齡の「今上皇帝陛下が御作りになった『開元文字音義』をお喜び申し上げるの状」には「翻字（つまり反切表記に使用する「翻」という字）についてはこれを取り除き、満足なさいませんでした。」とある。また唐玄度の『九經字様』の序には「音韻に関しては謹んで『開元文字音義』に従い、反言は避け、紐を挙げて声調を指示するという方法だけを用いて、その字音をはっきり示すことにする。」とある。つまりこの書には大体において反切が無いということである。『慧琳音義』巻五は「鬪俱雙反、鰲力奚反」を引いているが、これは恐らく慧琳自身が増補したもので、『開元文字音義』の本来の姿ではない。」

また「至遼積希麟引《五經音義》、《韻会》二十四敬引《開元文字音義》。考《集賢注記》有敕依《文字音義》，改撰《春秋》、《毛詩》、《莊子音》。張九齡奏校理呂證撰《春秋音義》，鄭欽説撰《毛詩音義》。是即彼所引者，與《開元文字音義》截然二書。」

訳：「遼の積希麟が『五經音義』、『韻会』24敬韻の『開元文字音義』を引く。『集賢注記』に依れば、勅命によって『文字音義』に依拠して、『春秋』、『毛詩』、『莊子音』を改訂したとある。張九齡が奏上して呂證に『春秋音義』の、鄭欽説に『毛詩音義』の校勘、編纂に当たさせた。これがつまり希麟の引用したものであって、『開元文字音義』とは全然別の書である。」（開序一表-裏）

とある。『開元文字音義』の音注は恐らく「控：空去」というような「紐声声調指定式音注」のものが主であって、現存逸文中の反切は汪黎慶の言うように慧琳の増補したもののか、或いは本来の「紐声声調指定式音注」を慧琳が反切に改めたものであろう。つまり、引用に際しての書き換えによって、『開元文字音義』本来の「紐声声調指定式音注」や「～紐」式の音注は『慧琳音義』中には残らなかったと考えるべきであろう。「控：空去」の「去（声）」の部分を然るべき下字に改めるという作業を行えば、異調同音上字式反切が出来上がるということを指摘しておきたい。近いところでは羅常培『漢語音韻学導論』p.79に「翻」も「紐」も共に「反」と同じという指摘がある。異論は太田の知る限りでは岡井慎吾氏によるもののみ。氏は誤りと見る。『九經字樣箋正』に

『五經文字』（第百廿部）喃平表反。則此“紐”即“反”之意。吾僧空海『文鏡秘府論調』「四声譜」「平病侷別」、「常上尚杓」凡四字一紐一之二。宋張麟之『韻鏡』序每翻一字、用切母及助紐歸納凡三折總歸一律以上。則“紐”者、四声相連為一束者，“助紐”者助以得歸納者、俱非反切之謂也。本書序亦云，“紐四声定其音旨。”

口語訳：『五經文字』（第百廿部）に「喃平表反」とある。「紐」はつまり「反」という意味である。吾が僧空海の『文鏡秘府論』の「調四声譜」では「平病侷別」、「常上尚杓」は全て四字で一つの紐をなす（「一之二」は巻一の第二頁ということか。所拠テキスト未確認。『文鏡秘府論』は天地東西南北の6巻から成る）。宋の張麟之の『韻鏡』は序で「一字を翻する毎に切（声母を表す字、反切で言えば反切上字）と母（韻母を表す字、反切で言えば反切下字）及び助紐字（求める字音を容易に口唱によって得ることができるようにするための添え物の字）を用いて帰納し、全て三折して（三通りに唱えて）それがどれも同じ字音となるようにする（引用は以上）。つまり「紐」とは四声のみ異なる字を4つ纏めて一括りにするもので、「助紐」とは反切を口唱する上での助けとなるものであって、どちらも反切というのではない。本書（『九經字樣』のこと。太田注）の序でもやはり「紐（声母）が同じもので異なる声調の字を挙げ、声調を指示するという方法だけを用いて、その字音を明らかにすることにする。」と言っている。」

（受部 ノンブル無し。引用に際し、太田が句読点を加えた。口語訳も太田が加えた）とあり、また『玉篇の研究』で、これとほぼ同じ内容を漢文読み下し文体で以下のように述べている。「九經字樣「唐の唐玄度の撰」に喃を平表紐とあるは五經文字「唐の張參の撰」に平表反とある分なり。著者嘗て九經字樣箋正を著して此処に箋して曰はく「秘府論に云々、韻鏡序に一字を翻する毎に切字及び助紐を用ひて歸納し凡そ三折して総て一律に歸す以上と。則ち紐とは四声相連ねて一束をなす者にして、助紐とは助けて歸納を得る者なれば、俱に反切の謂に非ざるなり。本書の序にも亦云ふ四声を紐して其の音旨を定むと」と、此の用法の穩当ならぬを見るべし。」（p.267）

と言う。岡井氏に拠れば、平病侷別、常上尚杓のように声調以外違いの無いものを平、上、去、入声で一纏めにしたものを「紐」と言う。「紐」については小西甚一『文鏡秘府論考』研究篇上 pp.148-167 参照。

この他、「～反」の一異型として「音～反」という形式もある。その一端を挙げれば以下の如くである。

又驅諸猛獸 猛或作獷。獷，猛兒也。音古猛反 《後漢書》一上 帝紀一上 5a1-5b1 p.2530[20]

尋邑得之不憲 憲音許記反 《後漢書》一上 帝紀一上 7a3 p.2531[21]

或為地道衝輶橦城 …許慎曰輶，樓車也。輶音步耕反 《後漢書》1 上 帝紀一上 7a7 p.2531[21]

介休 …師古曰休音許虬反 《漢書》二八上 志八上 15a2-3 p.1602[394]

地名又數改易 師古曰數音所角反 《漢書》二八上 志八上 10b9 p.1600[392]

隋氏 師古曰音於義反 《漢書》二八上 志八上 15b8 p.1602[394]

又以適去 徐廣曰竹革反。韋昭曰謫譴也。索隱曰字林云適音丈厄反 《史記》八四 列傳二四 9a3-4 p.873[873]

化變而燼 服虔曰燼音如嬋反。… 《史記》八四 列傳二四 12a1 p.874[874]

Cf. **禍兮福所倚** 正義曰於犧反。依也。 《史記》八四 列傳二四 12a4 p.874[874]

Cf. **沕** 徐廣曰亡筆反 《史記》八四 列傳二四 10a5 p.873[873]

柁古文粗字音才古反 (『漢書』韋昭注 『玄扈音義』卷 3/154/1、『慧琳音義』卷 10/13b1)

甞音徒計反 (『漢書』韋昭注 『玄扈音義』卷 3/146/9、『慧琳音義』卷 9/37a2))

輶音其庶反 (『漢書』臣瓚注 『原本玉篇・玉部』)

票者音匹遙反 (『慧琳音義』卷 1/41b2)

窋音烏瓜反 (『慧琳音義』卷 9/27b1)

上掲例中冒頭部分が太字になっているのは、その部分が本文（の一部）であることを示す。太字が正文で、そうでないのは割り注部分である。本来はポイントを変えて示すべきだが、今、太字か否かで区別する。このような割り注に現れる音注の場合は、必ずしも正文中の被注字の直後に位置している訳ではないので、被注字を示す必要があろうが、「音」は無くても良からう。被注字を X、上字を A、下字を B とすれば「XAB」で事足りるのに「X 音 AB」としてあるのは、そもそもは直音注の「X 音～」の形式に合わせたものか。杜撰で体例が乱れている、或いは後人によって統一が乱されたというのでなければ、上記の反切形式のばらつきは或いは学統の違いに起因するという可能性も検討してみる必要があるかも知れない。もしそれが言えるなら、引用文献解明の手掛かりとすることができるであろう。

『慧琳音義』でも正文中の文字に対する音注にはこの形式は用いられず、割り注形式の積文中の文字にのみ現れる。恐らく正文に対する音注であれば、字の大きさが異なるのでそれと判別するのが容易であるが、積文中だと被注字と音注が同じ大きさで、音注とは認識され難いので、「音～反」としているのだろう。正文に対するものでも、正文が複数の文字から成ってい

て、第二字目以降の文字に対する場合には、「中(字)～」、「下(字)～」のような揭示以外
 の他、被注字を改めて提示した上で、この「音～反」が用いられている。「音～反」は本来、
 直音注であったものを反切に代えたことで出来たという可能性もないではないが、『漢書音義』
 などで広く用いられているから、一先ずは否定して良からう。

韻書、字書の場合はこのような音義書とは異なり、通常、被注字一字が正文となっているの
 で、釈文がどの字に対応するか、わざわざ示す必要が無く、一々「X XAB 反(／切)」と被
 注字を繰り返すに及ばない。また注音形式は反切ばかりで、普通、直音形式が混じることがな
 いから、正切に関してはわざわざ「X 音 AB 反(／切)」と「音」を加える必要もないのだろう。
 ただ韻書、字書の又切には「XAB 反(／切)」、「X 音 AB 反(／切)」といった形式のものが見
 られることがあり、恐らく音義書のようなものからそのまま形式を変えずに引用したものだろ
 う。

(14) 顧炎武『音論』「卷下」の「反切之名」に

「反切之名，自南北朝以上皆謂之反。孫愐『唐韻』則謂之「切」。…唐玄度『九經字樣』「序」
 曰「避以反言，但紐四聲，定其音旨。」其卷內之字「蓋」字下云、「公害翻」。代「反」以「翻」。
 「受」字下云，「平表紐」。代「反」以「紐」。是則「反」也、「翻」也、「切」也、「紐」也，一
 也。然張參『五經文字』並不諱「反」，則知凡此之類必起於大曆以後矣。」

日訳：「反切」という名称だが、南北朝以前にはすべて「反」といった。孫愐の『唐韻』にな
 ると「切」といっている。…唐玄度の『九經字樣』の序に、「「反」という言い方を避け、ただ
 四声を紐びあわせて発音を示した」とある。その篇中の字についてみると、「蓋」の字の条で
 は「公害翻」といって「反」を「翻」にかえ、「受」の字の条では「平表紐」といって、「反」
 を「紐」にかえている。そうしてみると、「反」だ、「翻」だ、「切」だ、「紐」だ、というのは、
 同じことなのである。だが、張參の『五經文字』が全く「反」を忌んでいないところからすれ
 ば、こうした（「反」をきらう）ことも、きっと大曆以後にはじまったことだろうとわかるの
 である。」（音韻学叢書本9表～10裏；顧炎武『音論』訳注 pp.720-721。訳文は平田昌司氏のも
 の）

後の清朝小学者たちはこれを誤解したものか、「反」を「切」に改めるのは『九經字樣』から
 始まったとする主張が見られる。例えば、戴震は『聲韻考』巻1で

「唐之季，避言而改曰切，其實一也。」

日訳：唐の時代に、反を避けて切といったが、実体は同じことである

と述べ、注で

「陸徳明『經典釈文』、張參『五經文字』、皆不避反字。開成中、『九經字樣』始云，避以反言，
 但紐四聲，定其音指。」

日訳：陸徳明『經典釈文』、張參『五經文字』はどちらも反の字を避けていない。開成年間にな
 って、『九經字樣』が始めて、反ということばを避けて、紐（声母）が同じで声調が異なる
 ものを挙げ、声調を指定する方法を以て、その音の実体を指定するようにした。」

と述べている(第二頁表)。段玉裁の手になる「刻聲韻攷序」には「己丑(1769)之春先生成聲韻攷四卷」とある。戴震の説は誤解とは言えないが、続く王念孫はこれに従って更に推測を進めたものか、『博雅音』で

「案「反切」之名，自南朝以上皆謂之「反」。孫愐『唐韻』則謂之「切」。唐元度『九經字樣』序云：「声韻謹依『開元文字』，避以反言，是則變「反」言「切」始自開元。

日訳：案ずるに、「反切」という名称は、南朝以前には須らく「反」と称した。孫愐の『唐韻』ではこれを「切」と称している。唐元度の『九經字樣』は「音韻に関しては謹んで『開元文字音義』に従い、反言は避ける」と言っているから、「反」という言い方が「切」に変わったのは開元からということである」(巻二 2a/3 “待也”の条)

と言っている。段玉裁による『広雅疏証』序は1791年となっている。『開元文字音義』が「反」を避けたのを、従来の反切の表示方法「～反」が「～切」に変わった嚆矢と見ておられる。この解釈に従えば『九經字樣』には「～切」という形式の反切が存在することになるが、それに該当する例は皆無である(「～翻」は3例あり)。王念孫説は、この『九經字樣』序文の解釈に関しては誤りと言うべきである。戴震の上の指摘については、既に陳澧が『切韻考』巻6で

「唐元度『九經字樣』云：“避以反言，但紐四聲，定其音旨。”此元度自言著書之例。戴東原『聲韻考』引此，謂唐季避言反而改曰切，蓋未詳考也。

日訳：唐元度の『九經字樣』は次のように云っている。「反ということばを避けて、四聲の違いはあるが声母が同じものを以て、声調を指示するという方法だけを用いて、その音の実体を指定する。」これは元度が自ら著書の体例について語ったことばである。戴東原の『聲韻考』はこれを引用して、唐代には反を避けて切に改めたと言っているが、十分な考察がなされていないと言ふべきであろう。」

と述べ、注で

「『九經字樣』所謂但紐四聲者，如鬱字音氤入、刊字音渴平是也，非但不言反，且不用切語。『廣韻』拯字注云：“音蒸上聲。”即此例也。

日訳：『九經字樣』の言う、四聲の違いはあるが声母が同じものを以て、声調を指示する方法とは、鬱の字は氤の入声に読む、刊の字は渴の平声に読むといったものことであって、反を使わないばかりか、切も用いないと言っているのではない。『廣韻』の拯の字の注に「蒸の上声に読む。」と言っているのがこの類のものである。」

と批判する(第四頁表-裏)。

- (15) 実のところ、切韻が当時の現実の規範音若しくはある一地点の方言音の反映であるかどうかについては、なおも議論がある。一つは「(切韻) 綜合説」もう一つは「(切韻) 方音説」である。切韻はそれ以前の韻書を参考に編まれたものであることがその序文から明らかである。序文に挙げられるその韻書は、呂静『韻集』、夏侯該(>詠)『韻略』、陽休之『韻略』、李季節『音譜』、杜臺卿『韻略』の5種で、これを五家韻書と言う。五家韻書については又42/5【補注】参照。

「総合説」の論拠には王三卷頭に挙がる諸家の分韻の異同に関し、分ける、分けないの不一致が見られる場合、切韻は全て分ける方に従っていること、そして現代方言のいずれにおいても切韻ほど多くの区別を有するものは無いということが挙げられる。「方音説」はここに挙げた説明がそのうちの最も有力なものである。その他に唐の首都である長安（現在の西安）の音韻体系を反映するという説などもあったが、今では支持する者は殆どいないだろう。平山先生の説はこの「方音説」で、煩瑣な区別は当時でも現実の口語音レベルでは存在しなかったであろうが、規範音として区別し得たものとする。遠藤光暁氏の一連の研究は総合説に立つもので、切韻のモザイク的構造を明らかにしている。ただ切韻総合説が正しいとなると、先行韻書の寄せ集めである切韻から帰納された音韻体系（つまりこれまで中古音と考えられていた体系）は虚構ということになり、これを以て現代方言の祖語に当るものとして中国語音韻史を論ずることは出来なくなってしまふ。それに代わる漢語音韻史の構想の提示はまだ未開拓と言って良い。序ながらその点では橋本萬太郎先生の「言語類型地理論」に従った場合も同様で、連続的な漢語音韻史が構築できなくなってしまう。橋本先生もこれに関しては何も発言しておられなかった。「方音説」にしても、切韻には確かに非実在の分韻と思しきところもあるので、それらを排除すべく子細な検討が必要だろう。難字、僻字は切韻その他の歴史的文献に現れる反切から、現代においてはかくあるべきと捻り出された音が現代方音として定着している例もある。このような音を排除して、常用語彙中の現代方音を収集、比較することで中古音の体系を再構することが必要となる。これについては南方方言の研究者によって行われているが、対象はまだ全ての方言にまでには拡大していない。甚だ厳密を欠く表現ではあるが、切韻に頼らなければ、現代方言音のみに依拠して祖語の音韻体系を再構せねばならないが（切韻を使用しないことにより、比較にならないくらいの膨大な時間と労力を必要とすることになる）、そうして得られる祖語の体系は切韻から帰納される体系と恐らくそう大きな違いはないのではないかと。但し現代方言及び他の歴史的文献に根拠を求めることの出来ない切韻の区別は取り上げられることが無いから、この分だけ切韻の体系よりは簡素なものとなるであろう。結局のところ、このような比較再構のやり方を採っても、切韻の人工的な分韻が部分的に解消されることになるにせよ、切韻の音韻体系そのものの実在を完全に否定することにはならないであろう。中国語音韻史を構築する上で切韻の重要性は揺らがないことだろう。切韻を以て現代中国語方言の祖形と見なすやり方はチベット語、ビルマ語、タイ語、カンボジア語などインド系文字を用いている言語で、その書面語形式の転写形を以て現代語の祖語形とするやり方と似たところがある。書面語形式が後の音韻変化に抗って、その綴りを変えずに古形を保っているところが多いからである。ただ中国語の場合、難字、僻字は切韻その他の古い文献に見える音注から現代ではかくあるはずと捻り出したものなので、体系の完全を求めて常用度の極めて低い字を取り込んで考察すると循環論に陥る可能性があるということはお気を付けておかねばなるまい。

(16) この義注は『礼記』「祭法」の鄭玄注「封土為祭処也」に依ったものか。

6.3.3. 又音を用いた系聯：陳澧のやり方

(17) 切韻系韻書に見える又音は殆どが原本系玉篇よりの引用であることが指摘されている。それについては、古屋昭弘氏の一連の研究を参照。「王仁昫切韻に見える原本系玉篇の反切—又音反切を中心に—」『中国文学研究』5 1979 pp.128-140；『王仁昫切韻』新加部分に見える引用書名等について『中国文学研究』9 1983 pp.150-161；「王仁昫切韻と顧野王玉篇」『東洋学報』65-3/4 pp.1-35。なお原本系玉篇とは後代の大幅な刪定を経る以前の『玉篇』を指す。具体的には残卷、佚文、『篆隸万象名義』に残されている反切などを以ってその代用としている。これらの間には異本の関係が認められるものもあり、そのためにこれらを一括して原本系玉篇を総称しているのである。

6.4. 唇音字は開合の対立を混乱させる

(18) 「唇音下字反切の開合問題」『佐藤進先生還暦記念論文集』，好文出版，2007, pp.125-144で開合が明らかでない二等韻小韻について検討を加えている。詳細に興味のある向きはそちらを参照されたい。

8.1. 中古音の声母の種類

(19) 陳澧の切韻（実際は広韻を用いた）声母 40 類は以下の通り。陳澧は帰納した各声母に名称を与えていないので、以下では各声母グループの筆頭に挙げられているものを以ってその代用とし、三十六字母と対応させて示す。（ ）内の字が三十六字母。三十六字母と比べると、陳澧は洪細で各声母を二分しているところがある。そのような場合は三十六字母を□洪、□細と記してある。

陳澧の切韻（広韻）40 声母

五音（七音） (全) 清 次清 (全) 濁 次濁（または清濁）

唇音	重唇音 (軽唇音)	邊 (幫)	滂 (滂)	蒲 (並)	文 (明)
		方 (非)	敷 (敷)	房 (奉)	
舌音	舌頭音 (舌上音)	多 (端)	他 (透)	徒 (定)	奴 (泥)
		張 (知)	抽 (徹)	除 (澄)	尼 (娘)
牙音		居 (見)	康 (溪)	渠 (群)	魚 (疑)

齒音	齒頭音	將 (精)	倉 (清)	才 (從)	
		蘇 (心)		徐 (邪)	
	正齒音	莊 (莊)	初 (初)	鋤 (崇)	
		山 (生)		×	
	正齒音	之 (章)	昌 (昌)	神 (船)	

	書 (書)		
喉音	於 (影)		
	呼 (曉)	胡 (匣洪)	×
		于 (喻)	余 (喻)
半舌音			盧 (来)
半齒音			如 (日)

牙音、齒頭音を分けない。唇音も次濁だけは通撰、流撰三等のもので、一部軽唇音化しないものがあるので(例えば、普通話で「夢」、「目」、「謀」はそれぞれ $u\text{ə}\eta, u, u$ となるべきところだが、実際には $m\text{ə}\eta, mu, mou$ となっている)、これを重視して二類に分けていない。

8.3. 中古音声母体系を現す修正三十六字母

- (20) 俟母は之韻及び之韻上声の止韻(韻鏡では第8転)にしか現れない。具体的には之韻の「蔡: 俟溜」(切二、切三、王三; 広韻は「俟留」と止韻の「俟: 蔡史」(切二、王三、徳; 王二は「鋤使」、広韻は「牀史」。「鋤」、「牀」はいずれも崇母)。「蔡」、「俟」はこの二つの小韻にしか現れず、これだけで系聯してしまい、一つのグループを形成するが、切韻系韻書内部でも反切用字に異同あり、これが実際の音類だったのか、それとも見かけ上のグループなのかについては見解が分かれる。上田 1975 によれば、原本切韻では該当小韻に与えられた反切は「蔡: 俟」「俟: 蔡史」であった。前者は広韻では「蔡: 俟溜」。後者は、王二では「俟: 鋤使」、広韻では「俟: 牀史」と改められており、「鋤」、「牀」いずれも崇母 dz 上字である。そのため、広韻に基いて反切系聯法を推し進めた陳澧は「俟: 牀史」をもう一つの崇母「士: 鉏里」と同音の増加小韻として排除した。その結果、これと系聯する平声の「蔡: 俟溜」も崇母小韻ということになって、俟母の存在を否定した。平山久雄「俟母の来源」、『古田教授退官記念中国文学語学論集』, 古田敬一教授退官記念事業会, 東方書店, 1985.7, pp.650-658 参照。本稿も独立した音類と見なす立場に立つ。

8.4. 五音、七音

- (21) 「五音」宮商角徵羽の五つの配列が、宮が最初に来るのが普通であるならば、『七音略』は本来は喉音が最初に来る配列がなされていたのかとも思われるが、そのような韻図の実例は無い。但しどうやら唇音、舌音、…といった名称と宮商…の対応関係は一定ではないようで、文献によってバラツキが見られる。現存の『七音略』、『韻鏡』は共に唇音、舌音、牙音、齒音、喉音、半舌音、半齒音の順に声母を配するが、『四声等子』、『切韻指掌図』、『切韻指南』はいずれも牙音、舌音、唇音、齒音、喉音、半舌音、半齒音の順に配列する。『四声等子』巻頭にはまた宮商角徵羽と唇舌牙齒喉の対応関係が示されており、牙音(角)、舌音(徵)、唇音(宮)、齒音(商)、喉音(羽)、半舌音(半徵)、半齒音(半商)となっている。『七音略』と比べると、唇音と喉音のところでズレが見られる。恐らく四声名や三十六字母の名称同様、その字自体が例字である

ような名称としたのであろう。つまり牙音は今で言えば軟口蓋音で「角kauk」の声母 k がこれに該当する。「微tiäi/tjǎi」の声母 tʃ もまた舌音である。宮商角徵羽の中には唇音声母のものが無い。そこで已む無く『七音略』の場合は合口介音を持つ「羽fiyuǒ」を唇音に当て、『四声等子』などは同じく合口介音を持つ「宮kiǒuj」を以って唇音の名称としたのであろう。「羽」も声母は fi であるから、喉音の名称の資格がある。『七音略』で「宮kiǒuj」を喉音に当てたことについては他に適当なものが無かったということなのかも知れない。半徵、半商は徵、商に準ずる。もし『七音略』の五音の名称が先であったなら、『四声等子』などはその矛盾を解消すべく、「宮」と「羽」を取り替えたということになる。なお宮商角徵羽はまた声調名としても用いられた。それについては頼惟勤「声調名としての五音」『中哲文学会会報』1974.10 pp.155-167（後、『中国音韻論集』（頼惟勤著作集 I）に収録）参照。

8.5. 三十字母

- (22) 三沢諄治郎「南梁比丘守温について」,立命館文学会『説林』3-11,1951.11,pp.42-46、三沢諄治郎「再び南梁比丘守温について」,甲南女子大学国文学会『甲南国文』14,1967.1,pp.21-28、唐蘭「守温韻学残卷所題“南梁”考」,『(上海) 申報 (文史 26 期)』,1948.6.5、周祖謨「守温韻学残卷後記」,『問学集』,中華書局,1966.1,pp.501-506 参照。
- (23) P2012「守温韻学残卷」に付された類隔切（後述。34.例外的配置の問題と類隔切 舌音の類隔を見よ）の例字を仔細に検討すると、この残葉が書き記された時点では、既に重唇音と軽唇音の区別があったらしいことが窺える。ただこの類隔切に関する部分が三十字母制定時に同時に存在していたかどうか分からない。遠藤光暁「敦煌文書 P2012「守温韻学残卷」について」は後の時代のもつと見なしている。三十字母を記したもう一種の資料 S512「帰三十字母例」には三十字母と各字母の例字を挙げるのみで、類隔切に関する部分などは無い。遠藤論文は「帰三十字母例」は当初からこのかたちであって、これで完全なものと言う。

11. 等韻図の成立

- (24) 一点、『切韻図』なるものが『日本国見在書目録』に見えるが、現存せず、それが韻図であったのか、それとも反切口唱のための用字一覧、いわゆる「九弄図」の類であったのか分からない。「九弄図」は元刊本玉篇の巻頭などに見える。空海『文鏡秘府論』中の「調四声譜」もまたこの「九弄図」の一種である。三沢諄治郎氏は『切韻指掌図』の形式に似た初期の韻図であつたろうと推測する（『韻鏡入門』p.40）。「九弄図」については小西甚一『文鏡秘府論考 研究篇上』pp.195-261 参照。なお『日本国見在書目録』には『清濁音』一卷という書名が見える。矢島玄亮『日本国見在書目録—集証と研究—』汲古書院 1984.9 はこれを『宋史芸文志』に見える『僧守温清濁韻鈴』一卷と同じであろうとする（p.75）。恐らく S512 や P2012 のような字母表であろう。この他、『韻海鏡源』五巻も著録されている。

12. 『韻鏡』所拠切韻は何か

- (25) 仙韻から合口韻を析出して新たに立てた宣韻は、切韻系韻書では P.2014 (『十韻集編』で「刊」と略称) に見られる。上田 1973 の言を借りれば「仙韻の合口を独立させて宣韻としている。これは P.2012 『守温韻学残卷』(仮称) と『説文解字篆韻譜』十卷本及び同五卷本と夏竦の『古文四声韻』のほかにも類例を見ないものである。」(pp.26-27) この宣韻に相配する上去入声について言えば、『古文四声韻』卷三には上声に選韻という韻目が見える。しかし王国維は韻目「選」に附された反切「思亮切」は獮部中の「怯：人亮切」と同じ反切下字を採っており、後人が平声が仙、宣と分韻しているのに合わせて、上声も分けたのであろうと言う(『觀堂集林』卷八「書古文四声韻後」)。「亮」字自体も同書の獮韻中に見える。『古文四声韻』の場合は、P.2014 に比して仙-宣の分韻が不徹底で、仙韻に P.2014 では宣韻所属としている合口小韻所属字が混じる。選韻もまた同様に分韻が不徹底で、所属字が韻目の「選」以外に僅か2字しか無く(後述)、獮韻中に合口小韻該当字が混じる。『汗簡・古文四声韻』(中華書局 1983) の李零氏による出版後記(1981.3.30の日付あり)によれば、北京図書館蔵宋紹興乙丑(1145年)齊安郡学本の残卷(巻頭、巻末に『集古文韻』と書名を挙げている)では選韻の部は無く、通行本に見える選韻中の「兔、葦」の二字は(前者が)獮部、(後者が)阮部に収められている。なお通行の『古文四声韻』でも去、入声は分韻していない。齊安郡学本は上声のみの残卷で、平声及び去、入声において分韻していたかどうかは、確認できない。宣韻に相配する去声韻目の報告例は皆無だが、入声については周祖謨(1983)が五代切韻とする P.5531-(3)に「雪韻」が見られる。一方、周祖謨(1983)が同じく五代切韻とする残卷 P.2014 は全9葉からなり、上田(1973)は(1)~(5)葉と(6)~(8)葉とは同書異版、(9)葉は別書と推定する。P.5531 も4葉から成り、(1)~(2)葉は P.2014 の(6)~(8)葉と同書同刻本、(3)~(4)葉は、(1)~(2)葉とは別で、P.2014-(9)葉、P.2015-(3)葉と同書であるという。そうであれば宣韻の見える P.2014-(6)V と雪韻の見える P.5531-(3)は同一テキストとは言えないのであるが、系統的に極めて近いことは否定できない。平声宣韻と入声雪韻の双方を持つ切韻系韻書が存在した可能性は大きいと言うべきである。上声選韻は『古文四声韻』の他、『守温韻学残卷』“四等重輕例”にも韻目として見えるが、現存切韻残卷には選韻部分を伝えるものが現存しないので、実在したかやや疑いが残る。ただ広韻にせよ、完本王韻にせよ、獮韻内部の小韻の配列を見ると、末尾の増加小韻を除けば、前半部が開口小韻、後半部が合口小韻及び唇音声母小韻と截然と分かれている。穿った見方をすれば一旦獮-選韻に分けた後、何らかの理由で再び合併した名残と言えなくもない。平声宣韻と入声雪韻の双方を有する韻書が実在したならば、それには上声選韻もあったかも知れない。周祖謨(1983) p.941 参照。『古文四声韻』に見える韻目は先の注(4)に一覧表として挙げた。
- (26) 後発の韻図であるが、『四声等子』の転図の配列は1通、2効、3宕開、4宕合、遭、6流、7蟹開、8蟹合、9止開、10止合、11臻開、12臻合、13山開、14山合、15果開、16果合、17曾開、18曾合、19咸、20深となっている。今、撰の名称で挙げたが、このような韻目順の韻書の存在は知らない。この順序が何らかの韻書に従った結果とは考え難い。

13. 転図と等位

- (27) 羅常培は『内簡尺牘』を出典として挙げているが、「四十四枚」の指摘は孫觀の手になる原文部分ではなく、李祖堯の注文にある。巻3「與致政楊尚書中修」参照（文淵閣四庫全書本 1135, pp.499-500）。むしろ同じ孫觀の『鴻慶居士集』巻 30/7b-10a（文淵閣四庫全書本 1135-300 下~302 上）を挙げるべきであった。魯国堯先生の論文は「『盧宗邁切韻法』述評」というタイトルで『中国語文』1992年6期 pp.401-409、1993年1期 pp.33-43に掲載された。後『魯国堯自選集』（河南教育出版社 1994, pp.95-96）に収録されるに当って改訂された。そして『魯国堯語言学論文集』（江蘇教育出版社, 2003, pp.326-379）に収められるに当って更なる改訂が施され、タイトルも「『盧宗邁切韻法』述論」と改められた。

17. 声母と韻母の結合条件

- (28) 四等韻と結びつく例が1例あるが、齊韻の増加小韻「祇：巨兮反」のみ（P2015-2 のみに見え、切三、王三、広韻には無い）で、「祇」は切二、王二、王三、P3696-1、広韻では一様に支韻に「巨支反（切）」の反切で現れる（P2015 は支韻の部分が残っていない）。恐らく支韻所収の字音が本来のもので、切韻以降の音韻変化（具体的に言うと直音四等韻と重紐Aの合流）を受けて、増補の過程で既に拗音化していた齊韻にも収録されることになったものであろう。直音四等韻が拗音化して重紐A類と合流する変化は『慧琳音義』に顕著に見られるので、切韻以降の変化、特に唐代の変化と考えられがちだが、六朝期に既に始っており、『經典釈文』所引小学家の一部（徐邈 Xú Miǎo、李軌 Lǐ Guǐ、郭璞 Guō Pú、呂忱 Lǚ Chén『字林』、鄭玄 Zheng Xuan）の音注にも認められる。坂井健一『魏晉南北朝字音研究』 pp.358-359 また pp.118-122 参照。つまりこのような直音四等韻と重紐Aの合流を反映する増加小韻はかなり初期の増補でも現れ得る。『韻鏡』で直音四等と重紐Aの合流を反映して、直音四等匣母字が重紐匣Aの位置に置かれるようになった例としては、止撰第6転開の脂韻去声至韻の「系」（齊韻去声霽）、山撰第21転開の仙韻入声薛韻の「蹙、竊」（先韻入声屑韻）、咸撰第40転開の塩韻入声業韻の「挾」（添韻入声帖韻）がある。また逆に重紐Aが四等韻に紛れこんでいる例として山撰第23転開の先韻入声屑韻の「驚」（仙韻入声薛韻）、梗撰第35転開の青韻中の「輕」（清韻）がある。いずれも『七音略』には見えない。

なお比較言語学の作業原則から言えば、時代が遡れば遡るほど声母と韻母の結合制約は少なくなる。群母も更に遡った上古音の段階ではもっと様々な韻母と結びついた。そしてうち一部は中古音の段階に至るまでに匣母に変ったというふう考えられている。

18.1. ややこしい三等韻 紙の節約

- (29) もっと細かいところでは、例えば四等韻の合口は牙喉音声母のものに限られ、舌歯音、半舌音、半歯音とは結合しないとといったような制約が見られる（唇音は開合の対立が無い）。

(30)『韻鏡』が清濁で表しているのとは異なり、『七音略』では転図上部の声母名称の欄に三十六字母を挙げている。今、至元本でしか確認していないが、舌音や歯音の欄は43枚全てに亘り、二段になっていて、右から左への順にそれぞれ上段に「泥定透端」、下段に「孃澄徹知」；上段に「邪心従清精」、下段に「禪審牀穿照」を挙げている。これに対し、唇音は全ての転図において上段に「明並滂幫」を挙げているが、下段は必ずしも「微奉敷非」を挙げてはおらず、挙げているのは第2転(=韻鏡第2転開合「冬鍾」)、第20転(=韻鏡第20転合「文」)、第22転(=韻鏡第22転合「山元仙」)、第33転(=韻鏡41転合「凡」)、第34転(=韻鏡31転開「唐陽」)のみ。それ以外の転図ではこの部分は空欄となっている。第34転と開合で対を成す第35転(=韻鏡32転合「唐陽」)も空欄。第興味深いのはこれらの軽唇音声母の名称を挙げているのは全て軽唇音字を配している転図なのである。軽唇音字が現れるのに「微奉敷非」を挙げていない転図もあるので、他本の状況も見た上で慎重に判断せねばならないが、ここに挙げた重唇音字と軽唇音字を区別するのに、軽唇音字が現れる転図にのみ「微奉敷非」を記すというような手立てを用いたことがあったかも知れない。

24.1. 歯音の欄における衝突

24.1.2. 二等の場合

24.1.2.3. 蟹摂の場合

(31) 広韻の韻目順に忠実な形で蟹摂の転図を作成するならば、右から左へ以下の順に並ぶことになる。

第16 転合		第15 転開		第14 転合		第13 転開	
隊	一等	代	一等	泰	一等	泰	一等
怪	二等	怪	二等	卦	二等	卦	二等
祭		祭					
	三等		三等	祭	三等	祭	三等
祭	四等	祭	四等	霽	四等	霽	四等

この場合でも、18 隊、19 代の順序が逆になるが、韻図の配列は開、合、開、合となっているので、これはやむを得ない。このような配列だと祭韻莊組字はもし窠字として収録するなら、第15,16 転に廻されることになるだろう。しかし恐らくは無視されて、怪韻字のみが現れる。

(32) 「鑿」は『広韻』には怪韻の音の他に「所例」(祭韻。「嶽」と同音)、「所八」(點韻。「殺」と同音)の二音あり。恐らく「所八」の音が一般的で、「所拜」の音は余り知られていないものだったのではないか。合口と見做して第14 転に回そうにも、祭韻には「浙：山芮」があり、こちらでも衝突してしまう。6.4. 唇音字は開合の対立を混乱させる参照。祭韻は第15 開、第16 合にも現れるから、「孝」を開口扱いとするならば、祭韻所属の「嶽：所例」の方を第15 転に

回すことも考えられるが、今度は卦韻所属の「曬：所賣」が窠字として既にあるので、やはり衝突する。合口と見做して第16転に置くなら、そこは○なので、衝突することはない。但し「曬：所賣」も下字が唇音字で、且つ開合の対を成すもう一方を欠いているので、反切の字面からは開口、合口のいずれであるか判断できないものである。なお祭韻字の「彙：楚税」は明らかに合口であり、二等韻の怪韻、卦韻いずれにもこれと衝突する初母合口字は存在しないのに、第14合、第16合のいずれにも見えず、該当箇所は○となっている。三等韻の莊組字は蟹撰では一律無視ということになっている。「彙：楚税」は王一、王二、王三、唐韻にも見え、『韻鏡』所拠切韻にこの小韻が無かったとは考え難い。

24.1.2.4.山撰の場合

(33)山撰の転図の配列順が何故、23,24,21,22の順に並んでいないのか。これについてはまだよく分からないところがあるが、太田(2012)「于母重紐問題と助紐字を巡る臆説」、『開篇』Vol.31, pp.226-250では臻撰と山撰の最初の転図の四等の段に助紐字を並べる必要から、現行のように配列を改めたものという解釈を提示している。韻図においては、通常、三四等両属韻は先の転図で三等の段に並ぶものだけをピックアップして、できるだけ多くの等位の異なる韻と同居させるようにし、二、四等にはみ出るものを後の転図に廻すという処理が行われる。山撰ではそれが先の転図で四等にはみ出るものを取り上げ、後の転図に三等の段に並ぶものだけを、他の等位に並ぶものと同居させている。第23転開は一等寒、二等刪、三等仙、四等先；これに対し第21転は二等山、三等元、四等仙となっており、韻の組み合わせの面でも、第23転を先に、21転を後に置くことを阻む理由は見当たらない。では仙韻莊組字は第21開、22合で山韻のそれと衝突していると見るべきなのか、それとも第23開、24合で刪韻のそれと衝突しているとするのか。このような配列は実は梗撰でもみられるのだが、そちらについてはそれなりの説明が可能である。それについては29.6.梗撰の問題点参照。

仙韻莊組字と山韻、刪韻莊組字との衝突に関して、仙韻莊組小韻を一切無視という立場を採れば、この衝突は問題とするに及ばないということになるが、実際のところ、二等の段には幾つか仙韻字が現れている例がある。この点は蟹撰における三等韻莊組字の処理のし方と異なる。もしこの配列順が編集或いは装丁のミスを継承しているのではなく、故意に為されたものであるならば、山撰については、或いは歯音二等の段にはみ出るものを転図上の偶然の空き間を利用して、相対的により効率よく出現させるために、敢えて山韻とではなく、刪韻と組み合わせるようにした、その結果が、このような通常とは逆の順に転図を並べたことになったもの、と推測する余地があるように見える。しかし以下の検討で、その可能性は一応否定される。

先ずは仙韻が山韻、刪韻のいずれとより多く衝突しているかを見るための小韻一覧表を参照されたい。

第21転開 山-仙

	山-鎔韻	仙韻	cf. 刪-黠韻	出現しているのは
平声 崇	戲: 士山増	—— (潺: 士連)	(なし)	山
上声 崇	棧: 士限	—— 棧: 士免増	戲: 士板	山? = 仙増?
入声 崇	(斲: 查鎔)増	—— (鞞(朝): 士列)増	(なし)	× (両方増あり)
生	殺: 所八黠韻	—— (緞: 山列)	殺: 所八	刪 (>山)

第22 転合 山-仙

	山-鎔韻	仙韻	cf. 刪-黠韻	出現しているのは
平声 莊	(なし)	—— 恡: 莊縁	(跽: 阻頑)増	仙
生	(なし)	—— 栓: 山員	(櫃: 數還増)	仙
入声 莊	(なし)	—— 茁: 側劣	(茁: 鄒滑)増	仙
生	刷: 數刮増	—— 刷: 所劣	(なし)	仙? = 山増?

第23 転開 刪-仙

	刪-黠韻	仙韻	cf. 山-鎔韻	出現しているのは
平声 崇	(なし)	—— 潺: 士連	戲: 士山増	仙
上声 崇	戲: 士板	—— (棧: 士免)増	棧: 士限	刪
入声 崇	(なし)	—— (鞞(朝): 士列)増	(斲: 查鎔)	× (仙増あり)
生	殺: 所八	—— (緞: 山列)	(なし)	刪

第24 転合 刪-仙

	刪-黠韻	仙韻	cf. 山-鎔韻	出現しているのは
平声 莊	跽: 阻頑増	—— (恡: 莊縁)	(なし)	刪
崇	(なし)	—— 狗: 崇玄先韻。増	(なし)	先 (>仙?)
生	(櫃: 數還)増	—— (栓: 山員)	(なし)	× (両方あり。刪は増)
上声 崇	撰: 雛鯨増	—— 撰: 士免	(なし)	山? = 仙増?
去声 莊	(なし)	—— (弄: 莊眷)増	(なし)	× (仙増あり)
崇	(なし)	—— 饌(養): 士戀	(なし)	仙
生	辮: 生患	—— (纂: 所眷)	(なし)	刪
入声 莊	茁: 鄒滑増	—— 茁: 側劣	(なし)	山? = 仙増?
生	(なし)	—— 刷: 所劣	(刷: 數刮)増	仙

() で括った小韻は、その転図には現れないという意味。各対でどちらも () に括ってあるのは、韻図において該当の窠が○となっていることを意味し、どちらも () で括っていない小韻は、どちらの韻にも該当小韻があり、その窠字がどちらの韻に所属しているのかわか

らないということ。「増」とあるのは増加小韻を意味する。「崇玄先韻」、「所八點韻」はそれぞれ、下字の所属が違っており、前者は仙韻所属字であるべきところ、先韻所属字を挙げ（四等韻は莊組と結合しない）、後者はこの転図では山・鏗韻を配すべきところ、點韻所属字を挙げており（「殺」は後の第 23 転にも現れる）、例外的であることを意味している。右端で転図上の窠字が仙韻と山・刪韻の双方で現れている場合、一先ず増加小韻よりも原本切韻から存在する小韻を優先させて表示した。

個別的に見れば、例えば仙韻開口平声崇母「潺：土連」小韻は第 21 転に置かずに、第 23 転に置いている。これは上の推測を裏付けるもののように見える。ここで七音略を持ち出せば、第 21 転ではなく、第 23 転歯音生母の二等に仙韻入声「櫛：山列」が現れている。第 21 転入声生母にも「殺：所八」があるが、この小韻は點韻字であり、本来第 23 転の二等生母の窠にあるべきもので、「櫛：山列」と衝突するはずのものである。それを誤って第 21 転に置いてしまったために、それとの対比で第 23 転に薛韻字を置いたということかも知れない。このことはまた山・刪韻に相配する入声がそれぞれ點・鏗韻ではなく、鏗・點韻であることを多くのテキスト誤っていることも関係している可能性がある。あくまでも仙韻莊組字を後の転図に廻すことに徹底するなら、あるべき姿は第 21 転二等生母は○とし、第 23 転二等生母の窠では二等韻字「殺」を優先して、三等韻字「櫛」は無視されることになるはずである。第 21 転の鏗韻には生母小韻は存在しない。韻鏡では第 21,23 両方のこの窠に「殺」を置く。どちらかが「櫛」の誤りだろう。このような推測に合致するような例も無い訳ではないが、その一方で、仙韻合口平声崇母「怪：莊縁」小韻は逆に第 24 移転に置かずに、第 22 転に置くというような例もある。そもそも第 22 転合は生母小韻以外には、山韻に莊組字は無く、二等の段には仙韻字ばかりが並ぶ。これはむしろ本来は 23,24,21,22 の順に並んでいたものを現行の配列順に変更する中で生じたのではないかと思わせる状況である。

全体を見渡すと、二等韻の莊組小韻は増加小韻のものが多い。今、それらが韻鏡が現在の転図の配列順を採用することにした時点において既に同様に存在したと仮定すると、開口の転図は合口ほど顕著ではないが、仙韻の莊組声母小韻を偶然の空き間を利用してそこに埋めようとするならば、刪韻より偶然の空き間の多い山韻の方が適切であることが見て取れる。増加小韻を全て取り去ってしまった場合、二等韻莊組小韻はほとんどを空欄が占めることになり、山・刪及び三等韻仙の間で、相補分布を成すが如くである。その場合でも、どちらかと言えば、仙韻莊組字は山韻と組み合わせる方が、より多く転図上に現すことができると言えそうである。ということは 23,24,21,22 の順であった方が、他の撰における処理との間に一貫性を保つことができるということであり、仙韻莊組字の処理はこの異常な転図の配列順とは関係ないということのようである。但し刪、山韻とそれに相配する入声鏗、點韻については本文 33.再び山撰について（おさらいの意味を込めて）p.211 で説明しているように、広韻を含むほとんどの切韻系韻書で誤って刪一點、山一鏗としており、韻鏡、七音略もこの誤りを踏襲しているので、この問題にかかわる入声字については舒声韻字と同列に扱う訳にはいくまい。そうであるにせ

よ、このように考えると、先の「潺：士連」、「楸：山列」の配置は増補改訂作業の中で配列順を23,24,21,22の順に並んでいるものと誤解した結果ともとれる。

以上の推測は成立しないようであるが、この他、元韻が純三等韻で歯音字が皆無であること、つまり上掲の第21転及び第22転の三等の段が空欄になっていることが関係しているという可能性も検討すべきである。

25.1 重紐の問題 先ずはカールグレンの分類から

- (34) 陳澧は確かに広韻諸本及び徐鉉、徐鍇の引用する切韻系韻書の反切に見られる文字の異同を利用して校訂作業を行い、系聯するかないかを突き詰めて考察し、反切用字として適字が無いことによる見かけ上の同音反切についても慎重な態度をとり、重紐の対立を帰納したが、
- 「棄詰利切，與器字去冀切音同。然棄字非增加。疑利字當作季。或當作悸。然二徐皆詰利切，所未詳也。

日訳：棄の詰利切は器の字の去冀切が示す発音と同じである。しかし棄字は増加小韻ではない。利の字は季とすべきではないか。或は悸とすべきかも知れない。それなのに徐鉉、徐鍇の二氏はどちらも詰利切としており、その訳はよく分からない。」(『切韻考』「外篇」巻四第16頁裏) というようなコメントを見ると、重紐の音韻論的意味を理解していたとは思えない。

- (35) 上田 1975 推定の原本切韻だと紙韻(支上声)に「倚 ?iě : 於 ?iə 綺 k^hiě」、「轄?iě : 於綺」というペアもある。これを『広韻』は後者を前者の中を含めるという改訂を行っている。一見、この二つの小韻もまた重紐の対立を成すもの(後者を影開A、前者を影開B)と見なす余地もあるが、こちらは切韻の杜撰であり、『広韻』の改訂を正しいとするのが一般的認識である。韻鏡では四等の欄は空白である。

25.2 重紐韻の韻図における配置

- (36) 有坂論文の挙例は広韻に拠っており、他の切韻系韻書は利用していない。
- (37) 先に重紐の区別は現代方言に整然とした反映を見出すことはできないと言ったが、部分的にすら尚その差異を見出すことができる。例えば北京語では止摂の唇音に対立の痕跡を見出すことができる。紙韻並母のB類「被 bèi」: A類「婢 bì」はその一端である。
- (38) 匣Aもしくは云Aと見なし得るものが1例ある。『広韻』真韻開口に「磳：下珍切」とある小韻で、『韻鏡』では第17転開の喉音濁(匣母)四等の段に見える。『七音略』第17転重中重においても同様。『韻鏡』、『七音略』いずれも対立する三等の段は空白になっているから、三等に置くべきもの(つまり匣B)を誤って四等に置いてしまったという解釈の余地も無いではないが、三等の欄に匣母があったとすれば、**18.匣母と喻母**で既に説明した通り、云母となつて一つ右の欄にずれているはずで、喉音濁(匣母)の三等の欄ではなく、喉音清濁(喻母)の三等の欄に配されねばならないのではないかと、という問題も生ずる。「磳：下珍切」は反切上字が二等韻匣母字で下字は知組字と、通常重紐韻の反切から見れば極めて異例な用字法である。云

母字の反切であるならば、それに匣母字を使用したという点で異例であり、重紐韻字であるならば、上字に二等字を使用しており、類相関の観点から見ると「二等+知組」とまるで重紐韻字の反切らしくない。知組字は音声的には B 類に近い性質を持つとは言えるが、「C+知組」同様、被切字の帰類を判断する上で決定的な論拠足り得ず、この反切からは A か B かを判断することもできない。

或いは「磻：下珍切」は、例外的に云母とならずに匣母三等の位置のまま（つまり $f_i > h > \zeta$ もしくは $f_i > j > \zeta$ ）ということも考えられる。『韻鏡』第 1 転開に挙がる東韻「雄」は多くの切韻系韻書が「羽弓反（又は切）」としているが、P4747 は「雄：羽弓反」と記した上で、反切上字を「胡」に改めるということをしている。（=『集韻』「胡弓切」）。時代は下るが、可洪 Kěhóng 『隨函録』では「雄」と同音の「熊」の反切を「乎宮反」として、切韻が「羽宮反」とするのは呉音であると述べている（為三第 13/13b）。つまり「磻」は「雄」同様に、中古音とは異質の体系の字音であったという可能性である。そうであれば増加小韻として処理するに当たり、韻図では置き場所に困って匣母三等の欄に配することになったということは有り得る。その場合、何故、四等の段に置かなかったのかという点については、介音が i ではなく、 i だったからと説明することになろう。辻本春彦『広韻切韻譜』は匣 A、周祖庠 Zhōu Zǔxiáng『切韻図』も匣 A（p.57 第 17 図）とする。橋本萬太郎『刊謬補缺切韻韻鏡』（手稿）は云母（喻母三等）の欄に配する。李栄『切韻音系』1952,1956 は匣 B とするが、注は無い（どちらも p.28）。李栄氏は匣母と云母を分けず、一律匣母として処理しているので、重紐韻である真韻所属の「磻：下珍切」は匣 A か匣 B のいずれかに帰属させることになる（李栄氏は声母を匣とするのに対して、韻母の方を真 A、真 B のように分けているが、今本稿に合わせてかく説明する）。上田正『切韻諸本反切総覧』も匣母 B とするが、やはりこれに関しての注は無い。上田氏は云母を于母と称しており、匣母から独立させている。同書に他に匣 B と記す例は無い（匣 A は皆無）。管見の及ぶ限りでは云 A もしくは云 B とする説を提示する研究者はいない。実のところ、云母は之韻上声止韻の「矣：于紀」と増加小韻の「馮：有乾」を除けば、合口韻若しくは合口性韻尾を有する効、流摂、咸摂所属の韻としか結びつかないので（この他、第 1 転開の東韻に「雄」、第 12 転開合の虞韻に「于」、麌韻に「羽」、遇韻に「芋」があるが、これらも合口と解釈できる余地あり）、この点でも臻摂の開口小韻「磻：下珍切」を云母小韻と見なすことにもまた問題がありそうである。なお云母小韻が対立する A を構造的に欠く重紐 B で、多くが合口であることは既に、平山久雄 1962 「切韻系韻書の例外的反切の理解について—「為・蓮支反」をめぐって—」, 『日本中国学会報』第 14 集, pp.180-196 で指摘されている。

太田は如上の解釈を採らず、「磻：下珍切」は助紐字を揃える必要から生み出された人工的字音であるとする。助紐字とは、三沢諄治郎氏の文雄の研究を要約した言を借りれば、例えば「徳紅反」なら「丁顛」をはさんで「徳 tok 丁 tieng 顛 tien——（紅-ong） 東 tong」、「居何反」なら「経堅」をはさんで「居 kio 経 kieng 堅 kien——（何-a） 歌 ka」のように口拍子で三段に唱える、唐代以前の旧法がある。三段にやるので「三折一律」、また「唐人反し」と言う。こ

ここで反切には喜んで声母の理解を容易ならしめる「丁顛」、「経堅」のような双声の用字を「助紐」という。そこでまたこのような反切口唱法には「助紐法」というような呼び名もある(『韻鏡入門』 pp.4-5 以上要約終わり)。この助紐字をできるだけ多く揃えるには臻撰—山撰の組み合わせにするしかない。そこで韻鏡では臻撰の最初の転図と山撰の最初の転図の平声(或いは入声)の四等の段に助紐字を揃えた。その場合、臻撰の匣母四等の段は体系的な空き間であるが、このためにこの窠も何らかの字で埋める必要があった。それが「磳」だったということである。詳細は太田(2012) 于母重紐問題と助紐字を巡る臆説、『開篇』 Vol.31, pp.226-250 を参照されたい。

28.1. 威撰の場合

- (39) 広韻における厳韻に相配する上声、去声は原本切韻には無かったと考えられている。つまり上声、去声では平声の厳-凡に相当する区別はなされていないので、厳-凡はそもそも区別する必要のない韻目であるとする見方がある。詳細は遠藤光暁「臻韻の分韻過程と莊組の分布」『日本中国学会報』42 1990.10 pp.257-270; 太田斎「虚構の字音、虚構の小韻—乏韻溪母小韻は実在したか—」『開篇』 Vol.24 pp.1-13 参照。
- (40) 厳韻は所謂三等専属韻に属するが、広韻では相配する入声葉韻に増加小韻の「磳: 余業切」があり、この羊母小韻が三等の段からはみ出て、三等専属韻の分布状況から逸脱する。そしてこの羊母字は四等の段に置かれるから、塩韻に相配する入声葉韻の四等の段に並ぶ羊母小韻の字(葉: 與涉切)と衝突することになる(『韻鏡』第40 転合)。「磳」は広韻では全部で三つの字音があり、葉韻の他の二音はいずれも葉韻所属で、「葉: 與涉切」、「牒: 直業切」小韻にある。原本玉篇では「餘攝反」の葉韻所属字のみ。恐らく広韻に「磳: 余業切」を加えた校訂者の音韻体系では「余業切」は葉韻の「與涉切」と同音であったろう。「磳: 余業切」の増補は中古音以後の変化を反映したもので、削除すべきものである。

29.2. 臻撰に寄り道

- (41) このことについては戴震が『声韻考』巻二で

「又臻、櫛二韻、無上去聲字者、其上去聲字在隱、焮二韻内。臻韻、櫛韻並二等、欣韻、迄韻並三等、惟上聲隱韻、去聲焮韻兼二等三等、其二等暑齷等字、即臻、櫛二韻之上去也、亦以字少不別立部目。

日訳: 臻、櫛の二韻は上声、去声の字が無いが、その上、去声の字は実は隱韻、焮韻の中にある。臻、櫛の二韻はともに二等で、隱、焮二韻はともに三等である。思うに上声の隱韻、去声の焮韻は二等、三等を兼ね備えており、そのうちの二等の「暑」、「齷」などの字は、つまり臻、櫛二韻の上声、去声である。この場合もまた該当字が少ないためにそのための韻目を立てなかったということである。」(『戴震全集』五 戴震研究会編纂 清華大学出版社 1997.7 p.2268) と指摘している。但し所属小韻が希少であるから独立した韻目を立てないというのは、注(8)

で指摘したように、原本切韻には通用しない。蒸韻に相配する上声拯韻は切三、王一いずれもこの韻目の一字のみの小韻で、しかも所属字は他に無い（広韻では所属字が全部で5字となっただけでなく、小韻も2つ増えている）。これについて一字のみでも韻目として立てざるを得ないという理由が見出せないのであれば、戴震の説は十分な説得力があるとは言えない。

- (42) 『韻鏡』も無謬という訳ではない。第17開云母の平声「囙」、上声「隕」、入声「颯」はいずれも合口であるから、第18合の同じ位置（喉音清濁三等の窠）に置かれるべきものである。第18合を見ると、上、去声の同じ位置は空欄となっているので、上声「隕」、入声「颯」の2字はそのままそこに移せば良いが、平声には「筠」があって、衝突することになる。しかし『広韻』によれば、真韻「筠：為倫切」小韻中に「囙」がある。つまり、両者は同音であるので、あるべき姿としては、どちらか一方が選択されて第18合に配されることになる。切韻系韻書の中で、この小韻の存在が確認できるのは他に王三しかない。王三でもまた「筠」が小韻代表字になっているから、「筠」を採って、「囙」を捨てることになるだろう。注(12)で指摘したように、云母字は極僅かな例外を除き、合口のものしかない。仙韻の開口「馮」：合口「員」の一例以外、開合の対立が無いから、臻撰の転図である第17転開、第18転合において、誤って開口の転図に配してしまったということであろう。なお、真（諄）韻を開合で分韻している『広韻』での三字の所属を見ると、「囙」は諄韻ではなく真韻、「隕」は準韻ではなく軫韻、「颯」は術韻ではなく質韻、といずれも開口韻となっている。なお29.2.臻撰に寄り道 p.173で指摘したように、真—諄の分韻は切韻系韻書では唐韻、広韻、P2016でしか確認できない、王三にも見られない、かなり後期になってからの改訂で、韻鏡、七音略のいずれもが韻目に諄を立てているということは注目に値する。これが合口の転図でも「真」であったものを後の改訂で「諄」としたということもあり得るが、そうでなければ、韻鏡、七音略双方の祖本は唐韻あるいはそれに近い切韻系韻書に基づいたことになる。

なお第18合の真-諄の混乱は助紐字の収録と関係あるか、検討の余地があるかも知れないが、全く試みてはいない。

- (43) 私が混乱と見るこの状況には音韻論的必然があるという説がある。「真...韻に留められた合口小韻は牙喉音三等および正歯音二等である」(p.194)のはそれらが持つB類系介音の合口性が「短弱」で、A類系の合口介音をもつものほど開口小韻との間の具体的な音価の違いが顕著ではなかったから、真韻から合口韻を諄韻として析出するにあたり、真韻に留められたとする。平山久雄「切韻系韻書の例外的反切の理解について—「為、槁支反」をめぐる—」、『日本中国学会報』14,1962,pp.180-196 の特に「五 広韻等に於ける真諄両韻の分化条件について」pp.193-196 参照。

29.4.話は梗撰に戻る

- (44) 南方の保守的な方言の口語層に属する字音には通常の三等韻であっても軽唇音化していない反映を示すものが少なくない。通常、軽唇音化を起こしている方言にあっても、通撰の東韻及

び流撰の尤韻の明母(=微母)は何故か軽唇音化しない。平山久雄「唐代音韻史における軽唇音化の問題」参照。

29.6.庚三・清が重紐を成すことはどうやって分かるか

- (45) 「鼻字「清」一上字「庚三」」のタイプは声母が知組のものばかりである。『切韻』では知組は庚二の下字としか結合しないが、原本系玉篇では『切韻』の分韻に即して言えば、清韻所属の鼻字に庚三の下字を用いている。庚韻莊組字の反切下字の使用状況を考えれば、庚二の知組と清の知組が真正の対立を示すのか検討してみる余地があろう。
- (46) 中古音の韻尾については、音韻論的配慮を優先させ $-ŋ$ としているが、実際の音声的表れは n のようであった可能性もある(つまり $ieŋ$)。一部の方言では韻尾が $ŋ$ に回帰することなく、 $ieŋ > ien > ien > iɛn$ のような変化を遂げ、臻撰と合流してしまったものか。

29.7.1.梗撰の問題点

- (47) 太田(2012) 于母重紐問題と助紐字を巡る臆説、『開篇』Vol.31, pp.226-250 は山撰の配列順の「乱れ」同様、梗撰においてもまた助紐字を梗撰の最初の転図の平声(或いは入声も)四等の段に並べる必要から、配列の「乱れ」が生じていると述べている。助紐字の組み合わせは二つの異なる撰の字から選択するようになった段階で、当初は内転一外転の四等の段に並ぶもので全ての声母の組み合わせを作ろうとすると、特に内転系の場合は一、三等韻学しか無いので、一つの撰に限定するのが困難である。それ故、梗撰一山撰の組み合わせも必要とした。後には人工的な字音を交えて臻撰一山撰で統一するようになった。

30. 『韻鏡』における重韻の扱い方

- (48) 周法高の音価を用いて大雑把に示すと以下の通り。

	上古	中古
一等通撰	東部 $ewŋ > 1$	東 $uŋ$
	中部 $əwŋ > 2$	冬 $uoŋ$
蟹撰	之部 $uəy$; 微部 $uər > 2$	灰 $uəi$
	之部 $əy$; 微部 $ər > 1$	咍 $əi$
	祭部 $ar/war > 3$	泰 ai/uai
咸撰	侵部 $əm > 1$	覃 $əm$
	談部 $am > 2$	談 am
二等蟹撰	支部 $rey/rwey$; $ree^r > 2$	佳 $əi/uəi$
	之部 $rəy/rwəy$; 微部 $rər/rwər$; 脂部 rer ; 祭部 $riar/riwar > 1$	皆 ei/uei
	祭部 $rar/rwar > 1$	夬 ai/uai

山撰 元部ran/rwan>2 刪 an/uan
 元部rian/riwan ; 文部rən/rwən ; 真部en>1 山 æn/uæn
 梗撰 陽部raŋ/rwaŋ ; 耕部reŋ>1 庚 aŋ/uaŋ
 蒸部rəŋ/rwəŋ ; 耕部reŋ/rweŋ>2 耕 æŋ/uæŋ
 咸撰 談部ram ; 侵部rəm>1 咸 æm
 談部riam>2 銜 am

31.2.類相關、介音の音価

(49) 『切韻考』卷四第15表-裏。6.1.反切とは p.42 で指摘したように、切韻は一般に遇撰字を反切上字として用いる傾向が強い。なぜ遇撰かという、恐らく遇撰字は主母音が非 a 系で、且つゼロ韻尾なので下字と組み合わせて求める鼻字の音を捻り出す際に、韻母を除去し易い、つまり唱え易い反切を作ることができるという理由によるものと思われる。普通話及び現代方音で見ると、内転系統主母音（非 a 系）は外転系主母音（a 系）に比べ、周囲の音声環境の影響を受け易く、音価の変容の幅が大きくて、反切の口唱には都合が良い。このような性質は昔からあったであろう。この傾向は止撰字に関しても例外ではない。遇撰字に拘らなければ良いのではないかという疑問には今のところ説得力のある答えが見出せないで、これについてはさて置くことにして論を進める。具体的に言うと、遇撰所属韻には重紐韻はないから、遇撰字を反切上字として用いて重紐の別を示すには C+A→A ; C+B→B のパターンをとらざるを得ない。ところが脂韻合口 A は「葵」の他には曉母 A の「隹」という字しかない。この字は常用字とはいえないので偏旁読みされる可能性があるし、特に写本だと常用字の「惟：以迫切」（脂韻合口羊母）と誤認される可能性が高い。そこで反切下字としては適当でないと言われたのであろう。羊母字は音声的には A 類的特徴を持っており、A 類代用字とするという次善の策を採ることも一つの方法であるが、そうしなかったのは、決定的な判断の根拠足り得ないからであろうか。この小韻に所属する字は代表字の「惟」を除けば、他は連綿語（暈韻語もしくは双声語）の一部としてしか現れないようなものばかりで、どれも反切用字に相応しいものとは言い難い。となると、唇牙喉音声母以外の重紐の対立を持たない声母の字を用いるしか手が無いのである。その場合には他に「隹、綏、遺、維」といった字が候補に挙がる。どれを用いても系聯してしまうことに変わりはない。或いは故意に B 類の「達」と全く同じ反切上下字を用いて注意を喚起したものであろうか。

33.再び山撰（おさらいの意味を込めて）

(50) 仙韻の三等に並ぶものが後になり（第23開、24合）、四等に並ぶものが先になる（第21開、22合）という分置状況は蟹撰祭、効撰宵、咸撰塩韻と順序が逆である。ここではこの順序には音声的な必然があると説明しているが、ひょっとしたら元々は一等の25寒/26桓と27刪韻が同居している23開、24合が先で、28山韻が配される第21開、22合はその後にあったのかも知

れない。そのような配列順であるなら、仙韻の分置情況は他の重紐韻の A、B 類分置情況と同じになる。ただ、では何故それを現行のような順序に改めたのかということが問題となってくる。これについては注(38)に記したように、一先ずは助紐字を臻撰と山撰の最初の転図の三、四等の段に並べる必要から、山撰の配列順を変えたという説を提示している。詳細は太田 (2012) を参照されたい。

34. 唇音の開合問題

- (51) 陽韻がなぜ例外的な扱いをされているのか今適当な説明が思いつかない。平山先生より唐、陽韻は韻尾が円唇化を伴うものであるから、異化によって開口的な現れ方をしていたのではないかとの指摘を受けた。確かに反切下字を調べてみると、唇音声母字 5(+1)を除くと、開口字 5(+1)、合口字 1(+1)で、開口字使用の傾向が強いことが窺われる。()内は増加小韻。それ以外の理由としては、或いは「綱」、「望」のように一部の字音に、北方でも軽唇音化しない形式が見られることが関係しているのであろうか。微母が軽唇音化を免れる例としては、東三、尤韻があるが、東三を並べる第 1 転、尤韻を並べる第 37 転はいずれも「開」となっている。但し普通話には陽韻字の脱軽唇音化現象は見られない。C 類韻は唇音に関しては三等の段にしか並ばない。韻鏡ではそのようになっているが、七音略では上声四等の段に「𪛗」という窠字がある。「姓也。毗養切」とある。宋本玉篇では「毗兩切。人姓也。」(下 24b2, p.108 下) = 元本玉篇 330/1。この字は切韻系韻書の中では広韻にのみ見られ、この字一字のみの小韻である。集韻には見えない。明らかに増加小韻で、恐らくは非漢人の姓を表わす固有名詞と思われ、中古音では例外的な位置を占める。重唇音であることを示すために、七音略は敢えてこれを四等の段に置いたものだろう。三等の窠は空欄であるが、ここに置くと奉母字、つまり軽唇音字と見做されてしまう。馬淵 1970 によれば、韻鏡諸本のなかでは文龜二年本にのみこの字が見えるらしい(p.76)。韻鏡祖本には恐らくこの字は無かったであろう。しかしもし韻鏡祖本所切切韻に既にこの字はあったが、扱いに窮して省いたということであれば、陽韻を重紐韻と同様に見做して、唇音を開口の転図に配したという可能性が無いでもない。その場合、一等韻唐韻の唇音字もこれに合わせて合ではなく、開の転図に置くことにしたということであろう。但し韻鏡では一枚の転図に現れる三四等について、軽唇音と重唇音が同居する例は、東三及び尤の次濁をさておけば、流撰の転図以外には例が無い。「𪛗」を開口の転図に配し、他の三等に並ぶ軽唇音字を合口の転図に廻せば良いのではないかという疑問に対しては、一先ず一韻中の唇音字は纏めて開か合のいずれかに置くと言う方針が優先されたのだと回答しておくが、僅か一字の増加小韻の重唇音字を他の原本切韻の段階からある軽唇音より優先する必要があるのかうまく説明がつかず、十分な説得力があるとは言い難い。この解釈は我ながら苦しいと思うが、とりあえず挙げておく。

35.1. 例外的配置の問題と類隔切 舌音の類隔

- (52) 参考までに周法高の音価も周法高等 1974 に基づき、挙げておこう。

1. 樁 zhuāng : 都 dū 江 jiāng 切 (dāng、diāng にあらず。切韻系韻書に見える)
 中古音 ʈoŋ tuo koŋ (toŋ にあらず)
 上古音 trewŋ tay krewŋ
2. 中 zhōng : 丁 dīng 弓 gōng 切 (dōng にあらず)
 中古音 ʈiuŋ tieŋ kiuŋ (tiuŋ にあらず)
 上古音 tiəwŋ teŋ kjəwŋ
3. 丁 dīng : 陟 zhi 經 jīng 切 (zhīng?、zhēng にあらず)
 中古音 tieŋ ʈiek kieŋ (tieŋ にあらず)
 上古音 teŋ tiək keŋ
4. 談 tán : 濁 zhuó 甘 gān 切 (zhān にあらず)
 中古音 dam ʈok kam (dam にあらず)
 上古音 dam drewk kam

周法高もまた、上中古音の再構は行っていない。上古音に見られる *r* は介音。1980 年代以降のチベット・ビルマ比較言語学の成果を積極的に取り入れた上古音の音価は中古音とはかなり様相を異にしており、中古音との比較でここで挙げるのは余り適切ではないと考える。

- (53) 侯-厚-候韻はうちに一等韻しか含まない。これを厚韻三等韻とする余地もあるが、その場合は尤韻との区別がどうであったかが問題となる。切韻序から考えると、五家韻書中、呂静の『韻集』以外は尤-侯を分けていないということであるから（呂静も去声は分けない）、原本切韻から存在していたものであれば、分けていない韻書から該当字を取り出すに当り、両者を分韻する切韻の枠組みに合わせたならば、反切下字を然るべきものに改めて尤韻所属とすべきところ、元々の反切に基づき、下字の所属に合わせて侯韻の方に入れてしまったということではないか。
- (54) 『広韻』には至る所で『字林』という書名が現れる。ただ「案『音義』云、『字林』作…」(485/2) というような表現が見られるから、少なくとも『広韻』における全ての『字林』の引用が原典からの直接の引用とは限らないということは確かである。『字林』を引く『音義』とは何であるのか。『隋書経籍志』に著録されている【宋】呉恭『字林音義』との関係はどうなのか。この他、陸該 *Lù Gāi* 『字林』(80/4)、陸善経 *Lù Shànjīng* 『字林』(164/9,171/3)、陸 *Lù* 氏 『字林』241/1 及び『新字林』(86/5,254/4,315/5,326/7,327/5,346/7,347/10,485/8,501/4,513/10,514/4,537/9,542/5) という書名も見え、これらが呂忱の『字林』とどういう関係にあるか、何れも今に伝わらないので、一切は不明である。『字林』は何人かの学者によって佚文が集められているが、そこからは手懸りは得られない。なお上に示した頁数、行数は芸文印書館影印沢存堂本に拠る。完本王韻には『字林』の名は全く見えないから、原本切韻でも同様であったろうと思われるが、書名を挙げずに引用した可能性を完全に否定することはできない。原本切韻が『字林』を利用したかどうか、『広韻』から判断する訳にはいかない。

- (55) 他の「室」小韻所属字についても、以下のような例が見られる。

室：張栗反，徐得悉反，又得失反（周易音義） 20-4a-4

- 珍栗反, 徐得悉反 (周易音義) 26-16a-6
 珍悉反, 徐得悉反 (毛詩音義中) 73-6a-1
 本又作涅同。乃結反, 徐丁吉反, 又丁結反 (周礼音義下) 132-14a-11
 珍悉反。…《說文》都節反 (莊子音義中) 382-20a-11
 豬乙反, 又丁栗反 (爾雅音義上中) 411-9b-5
 恠: 郭丁秩反 (爾雅音義上中) 414-15a-8
 螻: 丁結反 (爾雅音義下) 431-16a-7

「徐」は徐邈、「郭」は郭象。ここに挙げた舌頭音声母を上字とする反切には屑韻相当のものも含まれている。質-薛の相通はやはり上古音的現象として捉えるべきかも知れない。また学統と方言音の関係も考慮する必要があるかも知れない。

35.2. 舌音の『韻鏡』における例外的配置

- (56) 本稿では平山先生の推定音価を使用しているが、もし音韻論的配慮を重視した、庚二aŋ : 庚三iaŋ : 清iaŋと推定する立場に立てば、主母音の音価は変わらないことになる。28.4. 庚韻莊組字は二等韻、三等韻のいずれか参照。

36. 移韻 (祭韻平声) があつた?

- (57) 該当すると思われるものには以下のようなものがある。

味: 都豆	『毛詩音』徐邈	上字一等—下字一等 (婦字三等)	『広韻』陟救切
驟: 在遘	『左傳音』徐邈	上字一等—下字一等 (婦字三等)	『広韻』鉏祐切
廡: 莫杜	『尚書音』徐邈	上字一等—下字一等 (婦字三等)	『広韻』文甫切
菽: 作侯	『儀禮音』劉昌宗	上字一等—下字一等 (婦字三等)	『広韻』側鳩切
質: 亡救	『禮記音』徐邈	上字三等—下字三等 (婦字一等)	『広韻』莫侯切
覃: 以廉	『毛詩音』徐邈	上字三等—下字三等 (婦字一等)	『広韻』徒含切
驢: 于亡	『爾雅音』呂忱	上字三等—下字三等 (婦字一等)	『広韻』胡光切
鶻: 七羊	『爾雅音』呂忱	上字三等—下字三等 (婦字一等)	『広韻』七岡切
驢: 于亡	『爾雅音』呂忱	上字三等—下字三等 (婦字一等)	『広韻』胡光切
烘: 巨凶	『爾雅音』呂忱	上字三等—下字三等 (婦字一等)	『広韻』戸公切

cf. 斗: 音主	『毛詩音』沈重	音注字三等—被注字一等	『広韻』當口切
cf. 党: 音掌	『左傳音』徐邈	音注字三等—被注字一等	『広韻』多朗切
cf. 味: 丁遘	『左傳音』徐邈	上字四等—下字一等 (婦字三等)	『広韻』陟救切
cf. 部: 工竺	『左傳音』呂忱	上字一等—下字三等 (婦字一等)	『広韻』古沃切
cf. 駟: 側侯	『禮記音』徐邈	上字三等—下字一等 (婦字三等)	『広韻』側鳩切
cf. 菽: 子侯	『周禮音』劉昌宗	上字三等—下字一等 (婦字三等)	『広韻』側鳩切

cf. 棧：在簡 『莊子音』徐邈 上字一等—下字二等（帛字三等） 『広韻』士諫切

『經典釈文』の音注は既に指摘したように、一字多音の字に対してそのうちのいずれの音を以って読むべきかを示したり、当て字やテキスト間の字句の異同がある場合に本字が何であるかを示したりするのに利用され、通常の読みではないものに対して施されるのが普通である。だから被注字の字音が切韻に記載されている被注字と同形の文字の字音と対応していないということがありうる。また上掲例には帛字の等位に誤りが含まれている可能性があるが、それによって全ての例が否定されるということにはならないであろう。

(58) 切韻系韻書の反切には「褚」を上字とするものが3例ある。

「募：褚羊」（切三、王一、王二、広韻。王三は「褚」を「諸」に誤る。）、

「蹠：褚甚」（切三、王一、王三、P3693。広韻は「丑甚」）、

「勅：褚力」（王三。王二、唐韻、DX1372、広韻。）

「褚」は切韻系韻書及び集韻には被注字としては収録されていない。「褚」と「褚」は別字だが、前者を誤って後者を書くことは珍しくなく、切韻系韻書間でも混同が見られる。よって止韻の「諸市切」の「諸」は「褚」の誤認によるものであるにせよ、それは元を糾せば「褚」であると考えるべきである。上の三つの反切のうちの最初のものに見られる王三の誤字は象徴的である。「褚」も広韻に「驟：褚几」という小韻反切の例がある。他の切韻系韻書では「絺履」という反切で現れ、孤例である。「褚」そのものの反切上字として用いられる例は見られないが、「褚」が「褚」の誤りと考えてよいのではないか。

(59) 「犗：昌來」は切韻系韻書の中では『広韻』にしか見えないが、「土刀」という反切で表される別音の方は『広韻』以外でも収録されている。今、それを確認すると、面白いことに気付く。

切三 「饜：吐蒿反」…「犗 牛羊無子。又昌來、充牢反」

王一 「饜：吐高反」…「犗 牛羊無子。又曷(>昌)來、充牢反」 cf. 上田 1973 p.120

cf. 「陶：徒刀反」…「犗 牛羊無子」

王二 「饜：吐高反」…「犗 牛羊無子。又昌來、充牢反」 cf. 上田 1973 p.120

cf. 「陶：徒刀反」…「犗 牛羊無子。又土高反」

王三 「饜：吐高反」…「犗 牛無子。羊無子。又高(>昌)來、元(>充)牢反」

cf. 「陶：徒刀反」…「犗 牛羊無子」

cf. 朱翱 「犗 牛羊無子也。從牛曷聲。讀若糗糧之糗。特豪反。中華書局影印祁嵩藻刻本 3/4b4, p.25 下

cf. 大徐 「牛羊無子也。从曷牛聲。讀若糗糧之糗。徒刀切」 詁林 9/538a

これらから、『広韻』はここに見える又音を新たに小韻として立てたのであらうと察せられる。但し、「充牢反」の方は収録されていない。『集韻』だと、七種の字音があるが、義注は大同小異である。

「當來切。牛羊無子」(32 下 16) —————

「昌來切。牛羊無子」(33 下 2) ————— = 広韻 etc. 昌來切

- 「蚩招切。牛羊不生子」(53 上 5) ————— =切三 etc. 又音 充牢反
 「他刀切。牛羊無子也」(57 上 11) ————— =広韻 他刀切
 「徒刀切。説文牛羊無子也。隸作犒」(57 上 20) ————— 王一、王二、王三 (広韻には無し)
 「蚩周切。畜無子謂之犒」(77 上 3) —————
 「去久切。牛無子」(124 上 9) —————

cf. 宋本玉篇「徒刀、充刀二切。牛羊無子」下 25a/9 = 元本玉篇 331/9

cf. 篆隸萬象名義「去有反。無牛羊也」6/36b/1

信頼できる上中古音の推定音価はまだ無いので、代わりに周法高の上古音(前に*を付ける)を挙げて問題の反切を検討してみる。上中古音の推定音価を以て初めて真相が理解できるという可能性は無くも無いのであるが、現状では信頼できる推定音価がないので、次善の策として上古音を用いる他無い。帰字の「犒」は*t^həw、「昌*t^hiaŋ來*ləŋ」から帰納される字音はt^hiaŋ~t^həŋで、どうみても双方の音価は合わない。中古音でもうまく説明がつかないから、誤字の問題が関わっている可能性がある。他方、「土*t^hay刀*taw」より帰納されるt^hawもまた「犒*t^həw」とは合わない。「昌來」と「土刀」が同一字音を表す異種反切とも看做せない。以下は揣摩臆測である。

「昌來」の「來」は字形の似た尤韻字「柔」の誤写ではないか? 羅振鋈、羅振玉『増訂碑別字』(今『増訂碑別字字典』省心書房 1976.10 を代用) 卷二第 34 頁表 (no.709) の異体字参照。そこには「來」の通行字体「来」により一層似た異体字が挙げられている。切韻系韻書においては「柔」は反切下字としての用例が皆無であるが、『説文解字繫傳』の朱朝反切には下字としての用例が延べ 26 例ある。また直音注ならば『經典積文』や『博雅音』等その他で用いられている。反切用字としての適性を欠くとまでは言えない。もし「昌柔反(若しくは切)」ならば、異例反切ではなくなり、『集韻』に見える「蚩周切」と同一の字音を表すことになる。今、上古音に*を附し、中古音と合わせ用いて説明すると、「昌*t^hiaŋ柔*ŋjəw」から帰納される字音は*t^hiaŋ~*t^hjiəw~*t^hjəw~*t^həwのいずれかである。ここで上古の帰属を見ると、「犒」、「牢」、「柔」はいずれも上古幽部に属する。つまり「充*t^hjəwŋ牢*ləw」もそもそもは「昌*t^hiaŋ柔*ŋjəw」と同一の字音を表していた字面の異なる早期反切だったのではないか。前者から帰納される字音はt^hjəw、後者も*t^hjəwというような音価、若しくは前者*t^həw=後者*t^həwというような音価である。『集韻』侯韻「婁:郎侯切」小韻に見える「牢」はこのような上古幽部由来の字音が混入したものか? 上掲の如く、韻書には「又昌來、充牢反」とあり、「昌柔(<來)反」と「充牢反」は別音と見るべきように思われるが、異なる文献に現われる字面の異なる同音反切を別音と誤認して併記したとも考え得る。後に「牢」は*ləw>lauと変化し、「柔」は*ŋjəw>ŋiəuと変化したため二つの反切から帰納される字音は後には同じではなくなった。帰字の「犒」は*t^həw>t^həuと変化し、韻母は「牢」と同じであり続けたため、「充牢反(若しくは切)」はこと

韻母に関しては下字の字面を改める必要は生じなかったが、「柔」の方は異なる変化を遂げたので、「昌柔反（若しくは切）」は「𪔐」の字音を表すには適性を欠くことになった。一方で、上古では部を異にしていた「高」、「刀」はそれぞれ*kaw>kau; *taw>tauと変化し、中古では「牢」と韻母を同じくすることになった。

「充牢反（切）」は上字が「統」である可能性が無いではない。「統牢」だと「吐蒿」と同音ということになってしまうが、伝写の際の文字の誤りによって、別音と見做されるようになって、又音として収録されるに至ったという可能性である。しかしながら『広韻』では「充」は上字として7例見られるが、「統」は上字の用例皆無（「通」は1例ある）。「充」を「統」の省体として用いるような例も見ない。一先ずはそもそもが「充牢反（切）」であったと見て、議論を進める。「充*^htjəwŋ>tɕ^hiunŋ>^hləw>lau反（若しくは切）*^htjəw>tɕ^hiau（?）にしても、「𪔐*^həw>^hauの中古の字音を表すには声母の方に不一致が生じて、適性を欠くことになってしまった。切韻系韻書は実情に合わなくなったこの反切を棄てて、「吐^huo高kau」或は「吐^huo蒿xau」のように改めたということではないか。下字をそのまま残して「土牢」若しくは「吐牢」とした例が皆無なので、説得力に乏しいと言わざるを得ないが、他によい解釈が思いつかない。

「吐」は上声、去声二音あるが、いずれも透母。「土高」と表記されることもあったが、「土」は透母と定母の二音がある。「徒刀」という反切は「土高」を定母の反切と誤認し、字面を改めることで生まれたのであろう。

「昌柔」という反切はその後、伝写の際に「昌來」と誤り、「𪔐：昌來」は『広韻』及び『集韻』では下字の「來」の所属に合わせて哈韻に所属させることになった。こう考えると、『集韻』の「崑周切」は恐らく「昌柔反（若しくは切）」を継承するものということになる。「當來切」は「昌來切」の誤写で生じた反切か。なお『篆隸萬象名義』の「去有反」は『説文』の積文に「讀若糗糧之糗」とあることに基いて、何らかの文献の「糗」に附された反切を当てたものであろう。『集韻』もまた同様に「糗：去久切」小韻（「糗」代表字）に「𪔐」を追加したものであろう。そのような処理に当っては、或は『篆隸萬象名義』の影響があったかもしれない。

要するに中古音では「𪔐」は^hauという一音のみで、「吐高」、「吐蒿」といった反切があてがわれるべきである。それ以外の又音反切は早期反切を字面を変えずに、その下字の帰属に合わせて収録されたもので、除去して構わない、ということである。以上の揣摩臆測はもし「𪔐*^həw>^hauの字音が上掲の切韻系韻書の反切から割り出されたもので、それ以外に根拠とすべきものが無いということであれば、循環論に陥り、真偽の確かめようが無い。ただ興味深いことに、于安瀾『漢魏六朝韻譜』（1936；汲古書院影印,1970）によれば曹操の詩では「萊」及び「微」、「期」が「憂」、「丘」と押韻しており（精列 p.219）、「脩」が「愁」、「秋」と押韻している（塘上行之一 p.222）。楊方の詩でも「杯」、「灰」及び「牢」が「稠」、「留」、「儔」と押韻している（合歡詩之一 p.222）。この他、陸機にも「僚」、「條」が「稠」、「秋」と押韻している例があり（p.221）、弟の陸雲にもまた「姚」、「夭」が「幽」、「繆」、「周」、「悠」、「休」と押韻している例がある（p.221）。中古音の枠組みに即して言うならば、流撰字の押韻に蟹撰字、

効撰字が混じった状況である。ここに挙げた詩人の出身地は今で言えば呉語の地域に偏っているように思えるが、これについては網羅的な調査を待つて明らかにすべきだろう。「來」は上中古の時代にあつて、方言によっては尚も *lou* のような、上古幽部の特徴を留めたような発音であつたのかも知れず、そうであれば上掲の「昌來反（若しくは切）」の「來」はあながち誤字ではないのかも知れない。流撰相当ではないが、「來」は『集韻』では模韻「盧：龍都切」小韻にも見え、釈文に「徠也。山東語」とある。何らかの関連があるものか？模韻相当の字音が収録されているのに、何故侯韻相当の字音は収録されないのか、といった点について、今のところ説得力のある説明はできないが、中古音の枠には合致しない方言音ということで、「來」の *lou* のような字音は切韻に正規に収録されるどころとはならなかつたと考えるべきである。

『經典釈文』所引の早期反切には注（29）で示したように、被切字一等—上下字三等という反切やその逆に被切字三等—上下字一等のような、反切から予想される字音と歸字の等位が合わない反切が見られる。今のところ、見出した例の殆どは徐邈反切が占めているが、呂忱反切も混じっている。ということは弟呂靜の韻集反切にも同様の特徴があつたと推定する余地がある。『切韻』は六朝期の韻書を綜合したと考えられている。或は間接的にせよ、その中には徐邈音も含まれていたかも知れない。

補注

2. 中国語（普通話）の音節構造

8/5 さもなくばゼロの3通りしかない。【補注】**注音符號の音韻論上の問題点**

注音符號をローマ字に置き換えて、説明しているが、実は主母音 V をゼロとするのには論理矛盾がある。主母音 a と ə の二つで説明しきれないものに単母音の i, u, y, ɿ, ʅ がある。注音符號では i, u, y については、介音と見なし、主母音をゼロと解釈する余地もあり、また i, u については介音ゼロ、主母音ゼロで、韻尾のみとも解せないことはないが、y は韻尾には現れないから、これを含めて単母音 i, u, y を統一的に解釈するなら、介音と見なした方が良いだろう。しかし「主母音」は音声構成要素の中で必要最低限の不可欠な要素であるはずなのに、このような解釈だとその概念に違反することになる。尤も本稿では伝統的な用語の「韻腹」を「主母音」としているが、「韻腹」の概念は「主母音」とは厳密には一致しないものなのかも知れない。ɿ, ʅ の場合はより深刻である。注音符號では介音ゼロ、主母音ゼロ、韻尾ゼロと見なすので、声調は声母が担うと見做される。有声音の場合はそれが可能であろうが、無声音は声帯が振動せず、音程を付けることが出来ないから、声調を担うことが出来なうはずである。注音符號は伝統的な音韻学に基づいて考案されたものだが、管見の及ぶ限りでは使用法の説明はあっても、音韻論的な説明がなされていることを知らない。現在は構造主義言語学の時代に行われた音韻論の解釈に従い、主母音ゼロの変わりに i (中舌的狭母音) を認め、単母音 i, u, y はそれぞれ介音との結合として、ii, ui, yi と解釈し、ɿ, ʅ の場合はともに i と解釈し、声母に同化することで [i], [i] といった音声的差異が生じていると見る。[i] は形態音韻論的観点から、そり舌音の調音特徴を析出させて ri と解釈されることもある。

5.1. 『切韻』、切韻系韻書、『広韻』そしてその構成原理

24/14 …されたもので 【補注】**王三の発見**

第二次大戦後に故宮で発見されたと言われているが、王族たちはそれ以前から存在を知っていたようであるから、第二次大戦後に世間に知られるようになったと言うのが正確なところだろう。王仁昫刊謬補缺切韻影印本末尾の唐蘭の跋には次のようにある。

「戦勝之第三年，溥儀竊挾東去之國寶，於兵燹之餘，漸有由估人搜購，流歸故都者。一日，友人于思泊先生告余得見吳彩鸞書寫唐韻，約余同觀，展卷則赫然未濂跋本王仁昫刊謬補缺切韻之完帙也。……逾月，馬叔平先生自京師歸來，亟以收購為請，乃得復歸於故宮博物院，與項跋本同為寫書本之極觀，促成其事者，思泊力也。

日訳：戦争に勝利を取めた三年後、溥儀が密かに東（満洲国）に持ち去った国宝の中には、戦火を免れて、徐々に書籍商によって探求、購入されて再び元の故郷たる都に舞い戻ってきたものがあつた。ある日、友人の于思泊さんが私に吳彩鸞書寫の唐韻を見ることができると言い、私とそれを実見することにしようとして約束した。書を広げてみると、何と宋濂の跋文を有する王仁昫刊謬補缺切韻の完本であつた。……一ヶ月が過ぎ、馬叔平さんが北京から戻って来て、す

ぐに購入を願い出た。そこで再び故宮博物院に帰することになったのである。項子京跋本（王二と略称されるテキスト。裴務齊正字本刊謬補缺切韻と呼ばれることもある—太田）とともに写本の最も優れたもので、今回の購入の件が成ったのは思泊さんの尽力のお蔭だ。」

24/14 …されたもので 【補注】王三の研究価値

無論、広韻がありさえすれば、王仁昫刊謬補缺切韻は無用というのではない。王仁昫切韻に巻頭にはいわゆる「韻目小注」がほぼ完全な形で残っており、これにより切韻が編纂に当って五家韻書と言う 5 種類の先行韻書をどのように利用したかを理解することができる。「韻目小注」は王三にしか無いという訳ではない。但し王一にもあるが、平声部分を欠いている。王二は平声の韻目一覧の後半部分（26~54 の部分）が失われているおり、それ以外の部分の韻目一覧は揃っているが、平声の四か所にしか韻の分合に関する注は附されていない。

5.1. 『切韻』、切韻系韻書、『広韻』そしてその構成原理

28/4 (平声) 21 欣(殷) 【補注】韻目名の変更理由

宋の太祖趙匡胤の父、宣祖趙弘殷の諱を避けて、「殷」が「欣」に改められた。

28/-11 (去声) 43 映(敬)諍勁 【補注】韻目名の変更理由

宋の翼祖（太祖の祖父）趙敬の諱を避けて、「敬」が「映」に改められた。

5.2. 四声相配

32/11 …ではあるものの 【補注】注音形式の取り替えがあった？

現存する文献からはこのように見えるが、或いはかつては広く用いられていたものが、後の王朝交代などを契機とする学術思想の変化によって、改められて姿を消してしまったという可能性が無いではない。注(6)で挙げた『大唐新語』と『太平広記』の間に見られる音註形式の差異は一部にとどまるが、宋代になって直音或いは反切に改められてしまったことを示唆するものかも知れない。

6.1. 反切とは

38/-7 というような名称で呼ばれる 【補注】反切以前の注音形式あれこれ

実在するこの手の音注には例えば以下のようなものがある。

黙 詵 若墨	『説文解字』10 上 28a/478 下
森 詵 若(曾参之)参	『説文解字』6 上 68a/274 下
狷 詵 如(比目魚鱗之)鱗	『説文解字』10 上 30b/479 上
膾 詵 与霽同	『説文解字』5 下 1a/218 上
甸 詵 与缶同	『説文解字』5 下 20a/227 下
壽 音 受	『經典釈文・礼記音義二』181-3a-10

42/-5 も今に伝わらない) 【補注】広韻のみに見える周思言『音韻』

広韻所収の切韻序にはこの他、周思言『音韻』という書も挙がっているのだが、より早いテキストには見えないし、王三巻頭に見える諸家の分韻の異同でも、この書は言及されていない。羅常培「切韻序校釈」1928は『隋書經籍志』に見える「聲韻四十一卷 周研」を挙げ（商務印書館点校本、1955 重印第一版、巻一 p.34）、謝啓昆『小学考』巻 29/8b(p.1466)の「思言は周研の字であろう」という見解に同意している（p.18）。但し『聲韻』と『音韻』が同一書であるか否かについては判断を下していない。『十韻彙編』1936 魏建功序では

「音韻 周思言撰 陸法言切韻序載、敦煌寫本陸序不載。謝啓昆以為即周研

日訳：『音韻』周思言撰。（広韻所載の）陸法言切韻序には載っているが、敦煌写本の陸法言序文には載っていない。謝啓昆はこれは周研のことであると見做している」とあり（p.22）、同一書と見做しているらしく見える。

6.4. 唇音字は開合の対立を混乱させる

56/5 反切にも用いられているのが分かるだろう 【補注】玄応音義にも同様の例あり

玄応音義でも以下のような例がある。反切の字面は全く同じである。

	開口		合口
卦 ai, uai 韻	懈 kai ^去 : 古 ko ^上 賣 m(u)ai ^去		卦 kuai ^去 : 古 ko ^上 賣 m(u)ai ^去

6.5. 唇音字以外の開合を混乱させる要因—遇撮上字

60-/7 hiǒu tciɛŋ 【補注】異例反切拾遺

他に以下のような例もある：

宕 aŋ, uaŋ 韻	抗 kàng : 苦 kǔ 浪 làng	——	曠 kuàng : 苦 kǔ 浪 làng
	k ^h aŋ k ^h o laŋ		k ^h uaŋ k ^h o laŋ
			(『広韻』だと後者は「曠：苦謗」)
	吭 háng? : 下 xià 浪 làng	——	攬 huàng? : 乎 hú? 浪 làng
	fiŋ fiə laŋ		fiuaŋ fiə laŋ
養 iaŋ, yaŋ 韻	————	——	往 wǎng : 于 yú 兩 liǎng
			fiyaŋ fiyu liaŋ
			(切三、王一、王二、王三は「往：王兩」)

なお、本文中に挙げた以下の例について、切韻系韻書間の異同を示しておく。

迴 eŋ, ueŋ 韻	婁 xìng? : 胡 hú 頂 dǐng	——	迴 xiōng? : 戸 hù 頂 dǐng
	(前者は切三、P3693 では「下挺」; 後者は切三、王二、P3693 では「戸鼎」)		
	————	——	鑿 wèng? : 烏 wū 定 dǐng (広韻同じ)

養韻の例は上字の声母が云母。云母はそもそも開口の韻類と結びつく例は、之韻上声止韻の「矣：于紀」と仙韻増加小韻の「瀉：有乾」のみ。前者は増加小韻ではなさそうであるが、も

し「紆紀」(影母)、「予紀」(羊母)といった反切であったものを取り違えて、切韻に取り込まれたものであるならば、原本切韻では云母は開口韻とは結びつかないと言えることになる。このような字面の反切の実例は見出せないが、篆隸万象名義に見られる原本玉篇の反切及び希麟音義反切は「矣：於紀」で影母字扱いである。「矣」は専ら語気助詞として用いられ、軽く発音されることで、? $\>$ f と変化したということかもしれない。普通話の語気助詞「啊 a」が常に軽く発音され、先行音節の影響を受けて a $\>$ na ~ wa ~ ya と変わるのに似て、「矣」も語気助詞として常に弱く発音されるうちに、? $\>$ f(j) となったものか。但し「焉」は適当な解釈が思い浮かばない。とまれ、云母字が合口韻としか結びつかないと言えたにせよ、つまり反切において下字の開合の如何に拘らず、結果は一様に合口になると言えるにせよ、「鼻字合口←上字合口+下字開口」という組み合わせは実際には見かけない。上掲反切はやはり異例反切と言わざるを得ない。

7.1. 撮と内転、外転

62/7 …問題は無いということである 【補注】十六撮の問題点

これは中古音を理解する上での話であって、中古音以降の変化では 9 果撮と 10 仮撮の音価は大きく異なるようになるから、中古音と切り離して後の時代の音韻体系を論ずるに当っては、この二つを纏めておくことは適当ではない。

8.2. 「三十六字母」

69/18 語方言に実例がある 【補注】非：敷の対立

pf, p^h の音韻的対立は中古唇音由来でなければ、西安方言など西北方言にその例が見られる。これらの方言ではそり舌音声母に合口介音が後続する場合、合口介音を呑み込んで、tʂu- $\>$ pf-、tʂ^hu- $\>$ p^h-、ʂu- $\>$ f-、zu- $\>$ v- となっている。試みに、北京大学中国语言文学系语言学教研室編『汉语方言字汇(第一版)』文字改革出版社 1962 からその例を拾うと、以下の通り：追 pfei(阴平)p.120、船 p^hā(阳平)p.194、顺 fē(去)p.217、绒 voŋ(阳平)p.267。今、引用に当り、調類記号を声調名に改めた。単母音の u の場合は u のままで、竹 pfu(阳平)p.85、出 p^hu(阴平)p.87、鼠 fu(上)p.89、入 vu(去)p.90 となるが、それ以外は韻母、声調等に特別な条件は無く、如上の変化が生じている。一方、f: p^h の音韻論的対立については、安徽省蕪湖方言に報告例がある。但し中古の非：敷の対立を継承するものではなく、非：敷の対立、つまり無声：有声の対立の変形である。方进<芜湖县方村话记音>，《中国语文》1966-2, pp.137-146 によれば、f- は中古非母及び敷母由来、p^h- は中古奉、並母由来で、匪 fei²⁴：肥 p^hei²⁴、费 fei⁵³：币 p^hei²⁴、否 fxu²⁴：浮 p^hvu²⁴、反 fā²⁴：房 p^hā²⁴、放 fā⁵³：饭 p^hā⁵³、粉 fən²⁴：盆 p^hən²⁴、奋 fən⁵³：份 p^hən⁵³、讽 foŋ²⁴：朋 p^hoŋ²⁴、法 fa²⁴：拔 p^ha²⁴、福 fo²⁴：服 p^ho²⁴ といった最小対が挙げられている (pp.142-145)。今、引用に当り、原文の調値記号を数字に改めた。24 は上声、53 は去声である。この方言にはこの他、平声 21 があり、声調は全部で 4 種類。なおこの方言では声母に v- は無く、中古微母はゼロ声母とな

っている。

9. 清濁と陰陽

77/14 … 始発高度が低い 【補注】陰陽調の調値の変化

但しそもそもはこのようであったにせよ、その後の歴史的変化の結果、現代方言では調値の逆転現象が起こって、陽調の方が対応する陰調より高い調値を取っている場合が少なくない。

12. 『韻鏡』所拠『切韻』は何か

83/-12 … あったと言われている 【補注】開元本唐韻と天宝本唐韻

王国維『観堂集林』巻8「書《式古堂書畫考》所録《唐韻》後」は広韻巻頭に附された唐韻序が前後二段に分かれることから、開元本と天宝本の二種類が存在したとし、現存する蔣斧唐韻は天宝本、明の項子京が所蔵していた唐韻は開元本と断じている。後者は今に伝わらない。この他にも様々な『唐韻』があったらしい。

87/-7 『中国語音韻論』 【補注】藤堂説の初出年

初出ということに拘るなら、旧版、江南書院1957のp.88を挙げるべきであった。旧版と新版では参考文献の増補の他、表現に微細な差異があるが、論旨には変化が無い。

18.1. ややこしい三等韻 紙の節約

115/-8 … 結合しないということである 【補注】軽唇音の韻母との共起制約

現代方言でも f, v は単母音 i とは結び付くが、i 介音及び y 介音 (=i+u) と結びつくことはないようである。但し合音の場合はこの限りではない。例：「勳」fiào ← 「勿要」。

19. 匣母と喻母

116/-7 … ことが多いのである 【補注】匣母と喻母の音価の差異

現代吳方言では匣母直音系（つまり匣母一二四等）は fi、匣母拗音系（つまり云母）は fij で現れ、中古音における両者の音声的共通性を保持しているが、全濁声母が無声化した方言では前者は h 若しくは x で現れるのに対し、後者は j となっていて、有声性を保持しているという大きな違いが見られる。このような直拗を条件とした、口蓋化に止まらない大きな変化の違いは他の全濁音声母の変化には見られない。

20. (=18.2.) 再び紙の節約について

120/-9 … 上の7.と同じタイプに属する 【補注】果摂三等は本来体系的空き間？

開口歌、合口戈韻の三等韻字は平声しかない。上田推定の原本切韻では「鞞：許睨」、「伽：求迦」の二つ。前者は外来語由来、後者は仏教由来でやはりそもそも外来語である。広韻だとこれ以外にも10あるが、全て増加小韻で、何故か外来語以外だと病名らしき字が並ぶ。平声

は無標の声調であり、音訳語、擬声語は通常平声で現れるものである。歌、戈韻は本来が一等韻のみの韻で、三等韻字は音訳語、擬音語を取り入れるために体系的な空き間を利用して成立したものではないか。これらの三等韻字については韻鏡、七音略いずれも第 28 転合のみに字を配し、第 27 開（「合」とあるが、「開」の誤りとして改める）の三等の段には全く字が無い。

121/185 のものが後に置かれる 【補注】**韻図における開合の順序**

韻鏡、七音略には見当たらないが、切韻指掌図には一ヶ所だけだが、曾梗撰の転図が第 15 合、第 16 開と合、開の順に並ぶところがある。

23. 去声のみの韻の扱い

124/5 méi[məi] の 1 例を除けば 【補注】**「没」と méi は対応しない**

平山久雄先生の説によれば、「没」méi[məi]は当て字で、本字は「無」。軽く発音されることで軽唇音化を免れ、miu>mu と変化し、否定辞として多く「無有」の形で現れることから、mu iəu→mui iəu→muəi iəu→məi iəu のような同化現象が起き、後にこの məi が字音の地位を獲得したということである。そうであれば規則的な音韻変化によるものではないので、一先ず-t>-i といった音韻変化を想定する必要はない。平山 (1996) 参照。また中村雅之氏に平山説を補う議論がある。中村 (2004) も参照されたい。

124/8 ようやく-i 韻尾になったものがあつた 【補注】**蟹撰去声のみの韻の韻尾**

切韻の「泰、夬、祭、廢」の 4 韻は上中古のかなり遅い時期まで、-t 入声字と通押が見られるので、現代方言音の母音韻尾 -i とは異なる何らかの舌音韻尾があつたに違いないが、それが -d なのか、-r なのか、-s なのか、或いはそれ以外の何らかの韻尾なのか、実はまだ諸説あり、一つには定まっていない。なお現代方言音で何らかの子音韻尾で現れるという例は無い。序ながら橋本萬太郎先生はかつて「対馬」の「対」を「ツシ」と読むのは-s 韻尾の名残であると主張されたが、地名は孤独である上に、その昔、法令（和銅六（713）年の詔。後、また延喜式に基づいて改定）によって読みはそのままでも漢字二字に統一されてしまったということがあから、「武蔵ムサシ□」→「武蔵ムサシ」のように、「ツシマ」の「シ」は削除された字が担っていた読みという可能性もある。

24.1. 歯音の欄における衝突

24.1.1. 四等の場合

126/13 いった韻母は存在しない 【補注】**介音と韻尾の共起制約**

現代の普通話だと一音節中で介音と韻尾に共起制約が働き、iai(iai),iəi(iei),uau(uau),uəu(uou)と いった韻母は存在しておらず、また y=i+u であるから、yai(yai),yəu(you)も存在しない。参考までに拼音表記だとどうなるかを() 内に入れて示してあるが、これらは現実には存在しない。過去においては -k 入声韻、-kʷ 入声韻が一部の方言において舒声化する過程で、uakʷ>uauʷ>uau ; uokʷ>uouʷ>uou のような介音と韻尾が同じ形式が存在したこともあつたと推定

されているが、不安定ですぐに $uau > uo > uo$; $uou > uo$ のように変化したと考えられる。中古音でも介音 u と韻尾 u の共起は見られないが、介音 i と韻尾 i 及び介音 y と韻尾 i の共起は想定されている。中古音の多くの韻類の区別を説明するには、このような推定が最も合理的な訳だが、現代方言における共起制約について、 i に関して中古音では本当に無かったのか再考してみる余地はあるのではないか。

24.1.1. 四等の場合

133/4 ま継承していると思えない 【補注】山撰転図の配列順の謎

これについては順序が前後してしまったが、注(33)で一応の私見を述べている。

24.2. 麻韻莊組字は二等韻？それとも三等韻？

142/2 …拗音形で写されたはずである 【補注】麻韻莊組字が二等韻であることについての補足

麻三は開口韻のみで、合口韻は皆無。韻鏡第 30 転合の転図には二等韻字のみが並ぶ。歯音二等の段にも字が配されている。これを以て決定的な論拠とすることはできないが、一先ずは第 29 転開の歯音二等の段に並ぶものも麻二所属とする見方を支持する事実と言えよう。

25.1. 重紐の問題 先ずはカールグレンの分類から

144/-13 重紐とは呼ばない 【補注】之韻が重紐韻かどうかについての検討

例えば之韻には「欺：去其」と「扶：丘之」の二つの溪母小韻があるが、後者は広韻のみに見られる増加小韻であり、原本切韻には存在しなかったものである。唇牙喉音ではないが、「詩：書之」と「睽：式其」も同じ書母小韻で、あたかも対立例の如くであるが、これも後者が増加小韻。また「荏：士之」と「蔡：俟笛」もともに崇母小韻と見做せば対立例となる。この場合はどちらも原本切韻の段階から存在したものとされる。これについては、本稿では平山(1985)に従い、後者は莊組全濁摩擦音の俟母とし、前者と異なる声母と見做す。この問題については注(20)参照。之韻についての検討は董同龢 1948「廣韻重紐試釋」参照。同論文では尤韻についても検討がなされている。これについては二つ下の【補注】参照。

25.2. 重紐韻の韻図における配置

148/9 祭真(諄)仙宵侵塩韻 【補注】塩韻を重紐韻と見做す上での問題点

塩韻は増加小韻を除去すると、対立例は三例のみでいずれも影母字。平声 B「淹：央炎」(上田氏推定原本切韻「淹：英廉」)：A「愿：一鹽」(原本切韻「愿：於鹽」)、上声 B「奄：衣儉」(原本切韻「奄：應儉」)：A「壓：衣儉」(原本切韻「壓：於琰」)、入声 B「斂：於輒」：A「厭：於葉」。このため董同龢 1948 は塩韻が重紐韻であるか判断するのに躊躇している。なお韻図では影母以外の唇牙喉音は全て三等の段に配されている(韻鏡第 39 転開)。似たような問題は幽韻にもあり、実際の対立例は平声の曉母小韻の一例のみで、広韻ではそれも二つの韻の合併に

より、失われてしまっている。これについては 32.1(=27.2)再び流授についてを参照。本稿ではどちらも重紐韻と見做して議論する。

148/-2 韻には重紐の対立は無い 【補注】尤韻は重紐韻か？

尤韻については本稿では C 類韻と見做す。ただ一件重紐の対立と思える例が一对ある。上田 1975 推定の原本切韻によれば、一つは平声尤韻溪母の「丘：去求」（広韻「丘：去鳩」）と「惆：去愁」（広韻「恹：去秋」）。この他、広韻に限ると、もう一つ、上声有韻滂母に「恒：芳否」（王一、王二、王三「播：芳酒」）と「秬：芳婦」がある。広韻（恐らく唐韻も）は重紐に関し、他の切韻系韻書と字面を異にする例が散見し、重紐の対立が不明瞭になっている場合がある。そもそも幽韻では他の切韻系韻書に見られる唯一の曉母における重紐の対立例を広韻は纏めてしまっており、重紐の確たる根拠を消滅させているのである。それゆえ、広韻のみに見えるこの尤韻上声有韻の例を重紐の対立と見做すのは困難である。この例は一先ず取り除いて良からう。

「秬：芳婦」は反切用字の上でも異質で、有韻小韻の反切で「婦」を下字とするものは他の切韻系韻書でも例が無い。原本玉篇、慧琳音義でも同様で、「帚」の例はあるが、「婦」は皆無。但し玄扈音義では一例のみだが、有韻所属字に関し、「焮：方婦」という反切例がある。或いは通常一字多音の字を反切用字とすることは無いのだが、旨韻所属の「秬：*芳*否」を「否」には有韻の音もあるため誤認して、有韻に付け加えたものか？但し広韻旨韻の該当小韻の反切は「匹鄙」で、旨韻に「否」を下字とする反切例は無い。「恒：芳否」（「恒：芳酒」）にしても、有韻で「否」、「酒」を下字とする反切は他に無いと言う点で、やはり特異と言わざるを得ない（「酉」の例はある）。これについても穿った見方をすれば、宥韻所属字の「恒：*芳*右」を「恒：芳否」と誤認したものか。但しこの場合も宥韻に「右」を下字とする反切例が無いという弱点がある（「祐」はある）。

平声の例は上田 1975 の推定では共に原本切韻の段階からあるものとし、解釈に苦慮している。董同龢 1948, p.17 は広韻について、「恹：去秋」は韻末に置かれてはいないが、増加小韻と断じ、複数の根拠を挙げて、幽韻に有るべきものが誤って尤韻に収められてしまったものとする。そして韻図において「丘」が三等に置かれ、「恹」は四等に置かれていることを証左とし、集韻の「羌幽切」がそれに該当する反切とする。幽韻牙喉音字は「恹」以外、全て A 類で、この字もまた A 類と言うことになる。「惆：去愁」に限って言えば、広韻に「惆：丑鳩」と言う小韻がある。或いは何らかの文献に見えたであろう「惆：丑愁」を誤引して「惆：去愁」とした可能性もあろうか。

江南読書音では尤韻と幽韻を区別しない。ここで紹介したような「見かけ上の対立」は江南読書音の特徴が紛れ込んだものと解釈する余地もあろう。この二例を除けば、尤韻は他に重紐の対立らしきものは全く見られない。

27. 流授の場合

157/5 …一等侯ou、三等尤iōu 【補注】江南読書音は尤一幽を分けない

江南読書音を反映する玉篇、博雅音、經典積文にせよ、秦音を反映する慧琳音義にせよ、尤一幽を分けていない。このような情況が広い地域で見られたことが尤一幽を一韻に纏める措置に繋がったものか。なお尤一幽一韻となると、尤韻にはそもそも唇音次濁字が軽唇音化しないという個別の現象が見られるが、切韻の音韻体系に照らせば、一韻中に軽唇音と重唇音の系列が同居するという、他に例を見ない特徴を持つことになる。

167/19 … 【補注】流摂諸韻を一枚の転図に纏めた理由

前注にも記した通り、江南読書音を反映する玉篇、博雅音、經典積文にせよ、秦音を反映する慧琳音義にせよ、尤一幽を分けていない。全国的に見て、分けない方が一般的であったかも知れない。韻図では尤韻と幽韻の韻目の双方を並べてはいるが、そのような分けないという情況が、流摂を一枚の転図に纏めることに繋がったのかも知れない。

28.4 廃韻の問題にも寄り道

167/1 うに 【補注】蟹摂所属韻が止摂に配される理由

この措置には主母音の内転化以外に、蟹摂所属韻が非常に多く（四声相配するものを一つと数え、これに去声のみの韻をそれぞれ一つと数えると、広韻の場合全部で9つで、一つの摂では最多）、より少ない転図に纏めようとする、止摂の転図を利用せざるを得ないというような理由も関係したかもしれない。

29.3=7.2 ついでに『韻鏡』の内転、外転

157/7 …判断してしまったということではないか 【補注】内転、外転の理想的姿と現実のズレ

7.摂と内転、外転で示した一覧表と内外の所属に不一致が見られるのは、6 臻（韻鏡第 17～20 転）、9 果（同 27～28）、11 宕（同 31～32）である。この他、10 假の第 29 転開が内転となっているが、同じ第 30 転合が外転となっている上、七音略が 29,30 の双方を均しく外転としていところから、外転と正すのが一般的である。三根谷徹（1953）参照。本稿でも外転の誤りと見做す。この不一致については中古音以降の音韻変化による主母音の音価の変化が関係すると考えられている。転図における分布という観点から見ると、三等韻のみのもの（二、四等にはみ出る三等韻を含む）及び一、三等韻を一枚に収めたものが内転と言えそうである。これは従来の二等韻が存在するのが外転、これを欠くものが内転という解釈の言い換えである。なお一、三等韻を一枚に収めたものは第 42 転の曾摂登蒸韻以外全て三等韻唇音字が軽唇音化している。外転の転図でも三等韻の軽唇音化が見られるし、三等韻のみの転図では軽唇音化するもの、しないものの双方があるから、安易に判断を下すべきではないが、内転、外転の標示が三等韻唇音字の重唇音/軽唇音の判断をする上での手がかりの一助として用いられた可能性があるのではないか。

29.5.庚韻莊組は二等韻、三等韻のいずれか

179/4 …一律二等韻であると断じている (p.338) 【補注】庚韻莊組字帰属の処理は蟹撰と同じ？

それとも山撰と同じ？

韻鏡、七音略では二等、四等にはみ出る三等韻字をもう一枚の開合を同じくする次の転図に移すのが一般的である。そして二等字は概ね既に重韻の関係にあるもう一つの韻と衝突することになるため、結局は無視され、韻図上に現れない。24.1.2.歯音の欄における衝突参照。この場合も、もし三等韻字ならもう一枚の転図(第35転開、第36転合)に移すことになるが、そこは耕韻字によって埋められているので、転図上には現れないことになる、と言える。韻鏡の扱いを見れば、蟹撰に見られる処理同様であるならば、そこがたとえ偶然の空き間であったとしても、無視されることになるだろう。だからこれは論拠たり得ない。現実には第35転開の歯音二等の段を占めているのは全て耕韻字で庚韻字は皆無、また第36転合は入声に広韻のみに見える増加小韻代表字(全て耕韻入声麦韻)が3字見えるが、それ以外は空欄となっている。

179/13 …「脛dzɔŋ : 助dzɔ庚kaŋ切」となる 【補注】庚韻莊組字を三等韻字と見做す上での問題点

韻図に即して考えると、この解釈には大きな弱点がある。それは、先に示した二等の段にはみ出る三等韻字は通常は例えば蟹撰などで見られるように一律に無視されて、韻図上には全く現れない、という一般状況に反することになる。ただ山撰に三等韻である仙韻の字が二等の段に現れている例があるので、反証とはならない。具体的には第22転合の平声清「脛」(全清にあるべき)、同清「栓」(第24転に重出)、入声清「茁」(第24転に重出)、同清「刷」(第24転に重出。また鑑韻増加小韻もあり)、第23転開の平声濁「潺」、第24転合の上声濁「撰」(また刪韻上声潛韻増加小韻もあり)、去声濁「饌」(広韻小韻代表字は「簋」)、入声清「茁」(第22転に既出。點韻増加小韻もあり)、同清「刷」(韻鏡「𪗇」とする。異体字。第22転に既出)。このうち対立する二等韻に該当字がないものは、第22転合の平声「脛」、「栓」、第23転開の平声「潺」、第24転合の去声「饌」、入声「刷」。二等韻の増加小韻として又音のあるものが、第24転合の上声「撰」、入声入声「刷」。恐らく韻鏡編纂時には三等韻仙韻の莊組字は二等山韻及び刪韻の莊組字との間に音声的な違いが無くなっていたのだろう。このような三等韻莊組字が二等韻に混じって二等の段に現れるのは山撰の転図に限られるようであるが、本稿では梗撰にも同様の状況が現れているものと見なす。もしそうなら、山撰においても転図の配置の順序に梗撰同様の混乱と思しき状況が見られる点にも共通の理由が見出せるかも知れない。なお蟹撰においては三等韻莊組字と二等韻莊組字に衝突が生じている場合には、どちらも挙げずに空欄としている。このような処理の不一致についても分析してみべきであろう。

180/7 ろう 【補注】広韻増加小韻「生:所敬反切」の由来は古い

増加小韻の生母反切については唐韻、広韻に見える「生:所敬反切」の方が王三の「生:口更反」(上字不明)より古いと見做す。広韻の増加小韻は出典の確認が容易ではないが、多くが先行小学書からのものと考えられる。ちなみに『經典釈文』に「生:所敬反」という同じ字面の反切

がある（春秋左氏音義五 11a/11, p.280 上）。この他、上字は異なるが、劉昌宗音として「生：色敬反」という反切も見られる（周礼音義下 15b/8, p.133 上）。同書には別に「所幸反」と二等下字を使用した反切も見られるので（論語音義 21a/6, p.355 上）、速断は禁物であるが、切韻の場合も三等字使用の例（この場合は「敬」）の方が古いと考えて良いのではないか。

180/-15 … という小韻が見られる。【補注】「涇：初井反」は誤字に関わる実在しなかった小韻切三の静韻には以下のようにある。

涇：初井反。廣倉云，寒泉。一

広韻では「涇」には二音あり。うち青韻見母字は義注が対応しないので、以下、静韻字のみを議論の対象とする。

涇：巨郢切。小韻中。「涇(>涇)：『玉篇』云，寒也」(p.318)。

被注字については周祖謨は段玉裁の校訂に従い、掲出字を「涇」（芸文印書館影印本は「浮」に誤る）と改めている。切三の「涇」も同様に「涇」に改めるべきだろう。「初」に字形の似た群母字は見当たらないので、「初」が「巨」若しくはその他の何らかの群母字の誤写とは考え難い。

・「涇：巨井切。寒也」（宋本玉篇篇中 81b/4 ; p.93 上）。＝元本玉篇（286/10）。

・「涇(>涇)：巨井反。寒」（篆隸万象名義 5/110b/6）。

Cf. 「涇(>涇) 涇(>涇)：二同。巨井反。寒泉(>泉)」（新撰字鏡所引佚文は 365/8-366/1）。

切三の廣倉からの引用「寒泉」と新撰字鏡所引玉篇佚文「寒泉(>泉)」は本来、同じものでどちらかが誤ったということだろう。意味の点から見て「寒泉」が「寒(也)」となる方が自然なので、「寒泉」の方が本来の姿で、「寒泉」が「寒泉」を誤ったということではないか。

「涇」、**「涇」**に似た字体のものに「涇」がある。

・怪韻「差：楚懈切」小韻所属で義注は「浦涇」（広韻 p.384）。

・卦韻「瘡差：楚懈切」小韻所属で義注は「水浦也」（集韻 149 下）。

元本玉篇、宋本玉篇は「涇」は収録していないが、類似の字体のものに「涇」がある。

・「涇：古怪切。水也」（元本玉篇 p.28/13）。

・「涇：古怪切。水」（宋本玉篇篇中 79a/8 ; p.92 上）。

ちなみにこの字は集韻では怪韻「怪：古壞切」小韻に見え、義注は「水名」（150 上）。

初母字の「涇」と見母字の「涇」そして同じ見母字で青韻の「涇」、静韻群母字の「涇」が字体の類似から混同されて、「涇」もしくは「涇」に初母の音が生じたということではないか。新撰字鏡で「涇」の異体字として「涇(>涇)」を挙げているのは示唆的である。

以上に挙げた点からすると、「涇：初井反」は、「涇：楚懈切」、「涇：巨井切」二切の混同で生じた誤った反切ということになる。結局、誤認、誤写によって生じた実在しない字音として除去するのが妥当と思われる。

29.6.庚三・清が重紐を成すことはどうやって分かるか

181/6 王三 : 陂隔 耕韻入声麦韻 【補注】王三耕韻入声麦韻「陂隔」は唐代西北方言音の表れ

王三「陂隔」は耕韻入声麦韻、王二「逋逆」は庚三入声陌韻である。等位が二等—三等で一致しない。恐らく王三のこの反切は西北方言音を反映したもので、二等牙喉音声母に口蓋化が生じて、拗介音が析出して、「隔」が $cræk \sim cɹɛk$ ($kɹæk \sim kɹɛk$ と表記するの可) のようになって、庚三開口見母字と同音になっていたことによるものだろう。高田 1988 は天地八陽神呪經に「隔 *keg*」の一例があることを指摘する (p.402)。このテキストは高田に拠れば規範音を表わすものだが、現代カム方言などで *e* (チベット文字転写) が *je* のように発音されるような音声特徴が歴史的に遡り得るものならば、 $cɹɛk \sim kɹɛk$ を表記したものにとれないこともない。吉田 1994 はソグド文字で表記された漢字音について、「更」が $xy'nk$ と表記された例を挙げ、「TII T」でもう一つ注目すべき点は、牙・喉音の二等界 $kāi ky'y$ 及び更 $kɛng xy'nk$ に見られる *y* である。これは牙・喉音 2 等の拗音化の先駆けとみなすことができるだろう。」(pp.340-341) と述べる。庚二と耕の二等重韻が慧琳音義などで合流していたことは既往の研究で明らかである。これらの牙喉音声母字が口蓋化で拗介音を析出させていたことにより、王三「陂隔」は王二「逋逆」と同音を意図していたものだろう。なお玄応音義では麦韻字の「隔」には「歌韻」という反切が与えられており、この反切下字は陌韻字である。そして陌韻字の「骼」にもこれと同じ反切が与えられており、両者が同音であったことが明らかである。慧琳音義でも同様に、「隔」には「耕韻」という反切が与えられ、「骼」では「庚韻」、「耕韻」、「皆韻」という反切が与えられている。「庚韻」、「耕韻」はいわゆる異調同音上字式反切に属する反切で、この反切用字法からも庚韻、耕韻の合流が見てとれる。「皆韻」にしても上字は韻尾以外の要素を母字と共有すると考えて良い。

慧琳音義には以下のような例がある。

麥韻見母 擱: 居碧 “居” 魚見 C, “碧” 陌幫 B = 玄應

Cf. 碧: 兵戟 “兵” 庚幫 B, “戟” 陌見 B

麦韻は平声耕韻に相配する入声韻で、二等韻しかないはずである。それが三等韻字を上字とし、陌 B を下字としているということは、“擱”は $kyak \sim kyek \sim cyak \sim cyek$ のように拗介音を持っていたことを意味する。当時の西北方言の反映であろう。

29.7.2 梗授知組字

189/10 …知組字は清韻下字を用いている 【補注】庚、清韻知組小韻一覽

切韻系韻書に見られる庚韻と清韻の知組小韻は以下の通り。

庚 知 趨: 竹盲	切三、王一、王二、王三、廣
徹 瞳: 丑庚	切三、王一、王二、王三、廣
澄 根: 直庚	切三、王一、王二、王三、廣

	娘	鬢：乃庚	增加小韻	切三、王二、王三、廣
梗	知	町：張梗		切三、王三、廣
	端	打：德冷		切三、王三、P3693、廣
	徹	----		
	澄	場：徒杏		切三、王三、廣
	娘	樺：拏梗	增加小韻	廣
敬	知	俛：豬孟		王二、王三、唐、廣
	徹	裳：他孟	增加小韻	王三、唐、廣
	澄	鋌：宅鞭	增加小韻	王二、王三；宅硬(硬，諍韻) 王二；除更 廣
	娘	----		
陌	知	磔：陟格	王一、王二、唐、廣；[]格	切三；防(>陟)格 王三；[]柏 P5531-4
	徹	坼：丑格		切三、王二、王三、唐、廣
	澄	宅：場陌	切三、王二；根百 王三；場伯	唐、廣
	娘	諾：女白	切三、王三、唐、廣；女伯	王
清	知	貞：陟盈		切三、王二、王三、廣
	徹	穠：勅貞	王二、王三；丑貞	廣
	澄	呈：直貞		王二、王三、廣
	娘	----		
靜	知	逞：丑郢		切三、王三、廣
	徹	----		
	澄	程：丈井	增加小韻	王三、廣
	娘	----		
勁	知	----		
	徹	遠：丑鄭	王一、王二、王三、唐、廣	
	澄	鄭：直政	王一、王三；直正	王二、廣
	娘	----		
昔	知	籛：竹益	增加小韻	王一、王三、廣
	徹	彳：丑亦	增加小韻	切三、王一、王三、唐、P5531-4、廣；丑尺 唐
	澄	擲：直炙	切三、王一、王二、王三、P5531-4、廣；直隻	唐
	娘	----		

韻鏡の転図を眺めると、一枚の中に三等に知組、四等に端組が配されているものとしては、蟹摂第 13 開の去声部分（三等祭—四等霽）、山摂第 23 転開（三等仙—四等先）、効摂第 25 開（三等宵—四等蕭）、咸摂第 39 転開（三等塩—四等添）がある。決して三等に知組、四等に端

組を配することを忌避している訳ではない。しかし他方、二等知組字と三等知組字が一枚の転図に同居するのは忌避する傾向が見られる。韻図においては一見、それらしく思えても、集韻によるもの、増加小韻を除けば、対立している箇所は無く、決まってもう一方の窠が空欄となっていると言っても良い。つまり一枚の転図に収まる同撰内の二等知組小韻と三等知組小韻が同じ声母の下で同居することが無いということである。韻書に即して言えば、同撰内の二等韻と三等韻の間で知組小韻は相補分布を成しているということである。例外として

	二等	三等
山撰第 23 転開 上声娘母	「赧：奴板」	「趁：尼展」、
山撰第 24 転合 入声知母	「窺：丁滑」	「輟：陟劣」、
同娘母二等	「納：女滑」	：三等「呐：女劣」

の他、反証と思えそうな効撰第 25 転、咸撰第 39 転がある。しかしこの二枚の転図にしても、これらの「不純物」を除去してみると、対立は殆んど見られないのである。第 25 転では

	二等	三等
平声知母	「嘲：陟交」	「朝：陟遙」、
	(他本作“張交”。韻鏡窠字“啁”)	(他本“知遙”)
去声徹母	「越：丑教」	「眺：丑召」、
	(他本“褚教”)	
去声澄母	「棹：直教」	「召：直照」
	(他本“除教”)	(他本“直笑、持笑、直少”)

しかない。第 39 転は

	二等	三等
平声知母	「沾：竹咸」	「霑：張廉」、
		(他本“沾：知廉”)
同娘母	「諳：女咸」	「黏：女廉」、
去声知母	「劓：竹恰」	「輒：陟葉(他本“陟涉”)」、
同娘母	「囧：女恰」	「聶：尼輒」
	(他本小韻首字“囧”)	(他本小韻首字“敲”)

である。梗撰の場合、第 35 転に置けば良いのにそれをしていないのは、つまりこのような二等耕韻知組字と同居することを忌避したからであろう。耕韻に相配する上、去、入声においては知組字は皆無と言って良い。入声知母二等に「摘」があるが、三等字「籟」は増加小韻であるから、本来は無かったものとして考えることができる。これら以外の例について言えば、二等の段が空欄なので、三等の段に知組字を置いても対立は生じない。如上の忌避は恐らく韻図作成時には二等知組字と三等知組字が実際には同音となっていたことを意味するのであろう。対立例に娘母のものが多いことは、中古音に泥一娘の音韻的対立は無かったとする立場からすれば、娘母字については或いは i 介音の有無による対立があったことを示唆しているのかもしれない。

れない。但し上の山攝入声二等韻に見られる類隔切は端組との例外的な結合とみることが困難である。このような対立例の欠如が切韻編纂時にまで遡れるものか、切韻綜合説の立場に立てば、当時の現実のある地点の音韻体系がそのようであった可能性もあり、一考の余地がある。

189/-10 ば良からうか 【補注】**庚三ー清の通用例は知組ばかり**

pp.181-182 に挙げた庚三ー清の通用例は多くが知組である。入声字の現代方音に差異が見られるので、安易に判断を下す訳には行かないが、この直前の補注で示したように韻鏡成書時にあってはこれらと庚二の知組字との間に音声的な区別が無かった可能性は高い。

31.2.類相関、介音の音価

195/18 ものの、異論もある 【補注】**舌上音の帰類**

舌上音については C+知組の反切で表される重紐音節の帰字が A であるか B であるかを原本切韻で調べて見ると（増加小韻は除く）、全 13 例中、2 例以外は全て B 類となっているから、一先ず B と判断して良さそうだが、帰字が全て牙喉音の例に限られるという点が気になるところである。来母については同じく原本切韻に基づき、C+来で重紐韻の A、B いずれを表しているかを見ると、B が 25 例、A が 12 例で、傾向としては B に傾くが、A の 12 例を軽々に無視して B と判断する訳にも行かない。

196/2 …良いのかということになる 【補注】**江南読書音では真 B と殷 C が一類**

玉篇、博雅音に反映する江南読書音では真臻殷韻が区別されておらず、切韻と比べると、殷韻字は真 B と同一韻類として扱われている（但し諄一文は分ける）。江南読書音の体系と切韻音系は完全に一致している訳ではないから、安易にこれを以て即切韻を云々することはできないにせよ、一先ずはこの点からも C 類介音を B 類と同一視しても良さそうに思える、河野 1937、周祖謨 1936 参照。

198/17 判が予想される 【補注】**反切上字が云母の例は傾向を理解できるだけ**

この部分、云母を下字とする反切例のみを挙げて、云母の帰類を説明すべきであった。云母の帰類が不明なのであるから、これを明らかにするためには C+云母で帰字が A、B のいずれになっているかを見ればそれで良かった。上字が云母の反切は帰字も云母で重紐の判定不能なので、無用であった。この部分は削除すべき。

31.4.蒸韻の類相関

199/-11 …牙喉音は開合で帰類を異にしている 【補注】**蒸韻の帰類はどのように判断されたか**

唇音声母の場合は上字に B が用いられることから（6 例中 4 例、2 例は C 類）、B と判定。牙喉音合口も上字に B 類字「榮」が用いられているから、B 類。牙喉音開口の場合は C 類帰字の反切上字として蒸韻字が用いられているが、牙喉音の場合には A、B 類字が C 類反切の上字に用いられることが無いという理由から、C 類と判定されている。但し、一部 A 類あり。牙喉音合口は入声職韻にしかない。なお平山先生の推定音価では職韻 yək に対し、清韻入声昔韻合口

は yek、庚韻入声陌韻三等合口は牙喉音に限らず、該当するもの皆無（もしあればyak）。

32.1.(=27.2.)再び流授について

201/16 には慎重であらねばならない 【補注】江南読書音と切韻との間の幽韻重紐帰類のズレ

特に玉篇、博雅音、文選音義など江南読書音を反映する資料では尤一幽を区別しないことが問題となる。例えば原本玉篇では「侏：虚幽」で先の分類に照らせば、C+A→A 類と判定される。切韻のある段階での増補改訂作業の中で、これに基づいて「侏」の帰属を B から A に改めたということもあろうか。但し二つ下の補注に示すように、広韻反切のみに基づいて判断するなら、「侏」も「幽」も B となる。

203/15 …結局、声調によって帰類のパターンが異なるといのも考え難い… 【補注】幽韻上、去声の帰類判断の手がかり

平声「幽：於虬切」小韻所属字中の「洵 澤在崑崙山下」、「幽 幽繆。龍兒。又一糾切」、「恟 《説文》憂兒」は、それぞれ上声「黝：於糾切」小韻中の「洵 崑崙山下澤也」、「幽 幽繆。龍兒」、「恟 憂兒」と意味的に一致している。四声別義ということではなく、「洵」、「恟」は同一字の声調のみ異なる別音ということであろう。また「幽」と「黝」も同様の関係にある異体字と考えられる。これらについては声調は異なっても A か B かの帰属に関しては恐らく異なることはないであろう。平声字で A ならば上声字もまた A と判定して良い。この他、『經典積文』の「糺：吉黝」は「吉」が A 類なので帰字「糺」も A 類と判定できる。經典積文を以て直ちに切韻における帰類を判断することはできないにしても、これもまた上声の重紐韻の帰属を A とする蓋然性を高めるデータである。

203/-8 になるだろうという予想だけは立つ 【補注】広韻反切のみに基づく幽韻の類相関

広韻のみに拠って、幽韻重紐の類相関を調べると以下のようなになる。

平声幽韻	幫母	彪：甫侏 (X←C+X)	繆平 B なら明母反切から彪 B で、B←C+B
	並母	流：皮彪 (B←B+X)	
	明母	繆：武彪 (X←C+X)	繆去 B=繆平 B なら B←C+B
	見母	繆：居虬 (X←C+X)	B←C+B
	群母	虬：渠幽 (X←C+X)	幽 B だから B←C+B
	疑母	贅：語虬 (X←C+X)	B←C+B
	曉母	幽侏：香幽 (X←C+X)	← 侏：許彪 侏 B だから B←C+B
	影母	幽：於虬 (X←C+X)	B←C+B
上声黝韻	見母	糾：居黝 (X←C+X)	B←C+B
	群母	繆：渠黝 (X←C+X)	B←C+B
	影母	黝：於糾 (X←C+X)	B←C+B
去声幼韻	明母	繆：靡幼 (B←B+X)	
	溪母	蹠：丘繆 (B←C+B)	

群母 𪗇: 巨幼 (A←C+A)

影母 幼: 伊謬 (A←A+B)

平声は並母の上字「皮」がBなので、 $B \leftarrow B+X$ と判断できるが、それ以外の反切上字が全てCなので、AかBか判別不能ということになる。上声は他の切韻系韻書と同様、全て上字がCでやはり、AかBか判別不能。去声は明母字「謬」の上字が支韻上声紙韻明Bなので、 $B \leftarrow B+X$ となる。そしてこの字を下字とする溪母字はC+BでBとなる。一方、影母字「幼」は上字「伊」が脂韻影Aなので、下字「謬」はBだが、A+BでAとなり、この字を下字に用いる群母字「𪗇」はC+AでAとなる。つまり去声においては対立する相手を持たないが、AとBの両方が存在することになり、原本切韻の状況とは大きく異なることになる。この去声字の帰属を手がかりとして、平、去声について改めて検討を加えると、去声明母の「謬」小韻には「繆」があり、この字は四声相配の関係にある平声小韻代表字として挙がっている。声調は異なってもA、Bの帰類は同じと仮定すれば、平声明母字の「繆」もまたBであり、 $B \leftarrow C+X$ の関係から、下字「彪」はBであると導き出せる。並母はつまり $B \leftarrow B+B$ ということになる。この字は幫母小韻代表字でもあるから、平声唇音字は全てBということになる。そして、幫母字の類相関 $B \leftarrow C+X$ から $X=B$ ということになり、下字の「休」はBとなる。すると曉母小韻代表字「休」は $B \leftarrow C+X$ となり、 $X=B$ で下字の「幽」はBとなる。もちろん「休」と同音である「𪗇」もまたBである。「幽」はBだから、群母「𪗇」はC+BでBとなる。そして「𪗇」を下字とする見母「𪗇」、疑母「𪗇」もC+Bということになり、B。これで平声はBばかりということになる。この手順が唯一という訳では無く、影母の「幽: 於𪗇」をとっかかりとして芋づる式に解明して行くことも可能である。そして上掲の補注で紹介したような平声影母と上声影母の小韻所属字の兼收状況を手がかりにすれば、上声影母「𪗇」もまた平声同様、Bということになり、この字を下字に用いる見母「𪗇」、群母「𪗇」いずれもC+Bで、Bとなる。以上、広韻のみに基づく類相関から幽韻の重紐の判定をすると、A類は去声の影母、群母字のみで、他は全てBとなり、これまでの切韻系韻書間の反切用字の異同を利用した帰類の判断とは大きく異なる結果となる。

32.2. 軽唇音化の例外

204/12 いる 【補注】明母非軽唇音化贅言

明母の非軽唇音化は江南読書音で尤-幽を区別しないことと関係するか。もしあるなら尤韻の他の唇音声母でも非軽唇音化が生じてもおかしくはないが、それらしき例は見当たらない。尤韻唇音字が幽韻に紛れ込んでいないか検証してみる余地はあるかも知れない。

205/-12 …例は他には見られない 【補注】鍾韻微母小韻存在の可能性はあるか?

注(8)で述べた事と矛盾するが、鍾韻には微母小韻が皆無だが、鍾韻上声腫韻の冬韻上声相当とされる増加小韻の「歎: 莫湏」を非軽唇音化例と見なす余地は無いだらうか。但しこの考えを敷衍すると、もう一つの冬韻上声相当で端母の増加小韻とされる「湏: 都隴」は知母の類隔

切と見なすことになり、「冢：知隴」と衝突することになる。

34.1.唇音の開合問題

213/-10 …「爹」に合わせたものか 【補注】麻韻三等唇音字は重紐韻とは限らない

韻鏡、七音略には見えないが、『切韻指南』、『切韻指掌図』、『四聲等子』は「乚」を三等ではなく、四等の段に置く。恐らく声母が軽唇音ではなく重唇音であり、三等の窠に置くと重唇音か軽唇音か判断が出来なくなってしまうことを回避するための措置と考えられる。四等に置かれる重唇音声母なので重紐 A 相当の音価を持つ (mia⁴) と判断されるが、そもそも B 相当の小韻は皆無で、従って重紐の対立例は皆無である。この字は広韻には「蕃姓」とあり、非漢語からの借用音の可能性が高く、中古音の体系の例外となるような音価であった可能性が高い。つまり麻三は必ずしも重紐韻ではなく、C 類で、韻図では重唇音の例外的字音をここに置くしか手が無かったということである。そうであれば、厳密には mia⁴ と表記した方が良いかも知れないが、C 類韻でこの表記だと軽唇音化韻と区別がつかなくなるという問題が生じる。舌頭音であることを明示するために四等に置いた平声の「爹」についても同様なことが言える。『切韻指掌図』のように端組と知組を別々に並べるやり方をとるのでなければ、三等の窠に配すると知母のtia と見做されてしまう。声母が t- であることを明示するには四等に置かざるを得ない。この字も現在では広い地域で、[tia~tia]のような t- 声母の形式で親族名称として用いられているが、広韻には「羌人呼父也」とあり、そもそもは非漢語からの借用語で、中古音の体系からすれば例外的な字音だったのである。従って tia と解釈する余地もある。序ながら、庚韻上声梗韻端母の「打」(廣韻 德冷切)は同梗韻知母「𠵼」(廣韻 張梗切)と対立する。この場合は韻鏡、七音略式の韻図では二等韻端組を配する窠が無いので、一等の段を借用でもしなければ、韻図上に示しようがない。梗母は一等韻を含まないので、一等の段は常に空欄である。しかし実際のところ、韻鏡、七音略では抹殺されてしまった。切韻指掌図では舌頭音と舌上音を幅を約めることなく、分離させて表示しているので、両者を同一の転図上に収めることが可能だが、「打」を配するテキストは無いようである。但し太田が確認し得たのは、宋本、和刻本、渭南嚴式誨刻本(音韻学叢書所収)、十万卷楼叢書本(等韻五種所収)、墨海本(百部叢書集成初編所収)の五種。これについては 35.2.舌音の『韻鏡』における例外的配置でも議論している。

220/6 2. 二等韻も概ね開口に配される 【補注】二、四等韻は何故、開合で分韻しないのか？

開合で分韻するのは一、三等韻で、二、四等韻は全く分韻していない。これについては所属小韻が少ないのでわざわざ分韻するまでもないとされたものか。或いは二等韻に開合所属不詳の小韻が含まれて処理に困って分韻しなかったと言うことであろうか。6.4.唇音字は開合の対立を混乱させる (p.56) で挙げた例は多くが二等韻字であった。二等韻開口莊組字の合口化は近世音の問題として取り扱われるが、韻鏡で第三転が開とあるべきところ、開合と記されていることもこの問題と関係しているとすれば、或いは既に中古音に見られるものであった可能性

も無いではない。なお四等韻はそもそも全部で5つしかなく、うち韻尾が -u の蕭韻、同じく -m/p の添韻は開合の別が無い。他の齊、先、青韻にしても合口小韻は希少である。これらについては所属小韻が少ないのでわざわざ分韻するまでもなかったとする解釈にはある程度の説得力がある。

35.1. 例外的配置の問題と類隔切 舌音の類隔

233/-10 f^hju:i (にあらず) 【補注】非母、敷母の音価についての補足

上字が軽唇音化すると、幫母、滂母はそれぞれ非母、敷母に変化するが、後に両者は対立を失って共に f となる。p:p^h > pf:p^h > f:f^h > f=f。そこで敷母の推定音価を f^h としておいた。なお本文 p.69 で記したように、後にカールグレンによって否定されたが、マスペロは非一敷の区別は現実には存在しなかったと主張した。

234/1 … 一等上声海韻昌母 【補注】哈韻に三等韻が含まれるか？

原本切韻では「菑：昌待」。「待」と「給」は同音。この反切が上字が介音まで担っている異例反切として、帰字「菑」の音価を tɕ^hi:i¹ と見做す余地もあるが、そうすると一等韻のみの韻に特別に三等の韻類を認めることになる。本稿では中古以前の音韻体系を反映する古反切と見做して説明を加えており、哈韻に三等韻ありとする見方は採らない。「菑：昌待」は原本切韻の段階から存在するもので、六朝期に章組が莊組同様にそり舌音となっているような方言を想定してこれを説明するのは困難である。

35.2. 舌音の『韻鏡』における例外的配置

243/-5 … いけないものであることは言うまでもない 【補注】経典釈文に見える類似反切

経典釈文にはこの他、以下のような類似の異例反切が見られる。

菑：本又作「芷」，昌改反。齊人謂之「菑」，昌在反 『礼記音義・二』(187-15b-4)

菑：昌改、昌敗二反 『爾雅音義・下』(425-4b-11)

いずれも章組字の「昌」と哈韻上声海韻の「改、在」、同去声代韻の「敗」との組み合わせである。「改、在」を下字に用いた反切は「昌待切」と同一字音を表している。上中古においても尚、哈韻 au: 之韻 iau のような関係、つまり介音の有無による差異の関係にあったということなのだろう。相配する去声の字音もあったようだが、他書では見かけない。

36. 移韻（祭韻平声）があった？

248/17 る（礼記音義二） 【補注】異例反切についての補足

全文は「菑蘭：本又作“芷”，昌改反。韋昭注『漢書』云，香草也。昌以反。又『説文』云，藟也。藟火喬反。齊人謂之菑，昌在反」（礼記音義二 15b/4, p.187 上）。「香草也。」は『漢書』現存テキストに見えない。恐らく韋昭注『漢書』の釈文ではなく、『史記・礼書』索隱の釈文が混じり込んだもの。『説文』引用も「藟」の釈文と「芷」の釈文が混在している。「藟火喬反」

の出典は確認できていない。「在」には上声、去声の二音あるが、反切下字としては通常は上声の用法が一般的である。邵榮芬（1995, p.337）『經典釈文音系』によれば、上声の用法のみ。なお『經典釈文』には別に「菑 昌改昌敗二反。『本草』云白芷一名白菑（爾雅音義下 4b/11, p.425 下）とある。「昌在反」は「昌改反」と全く同音。もしこの「在」を去声と見なすならば、「昌在反」は「昌敗反」と同じ字音を表す反切ということになる。「昌改反」、「昌在反」、「昌敗反」は上字三等一下字一等の異例の組み合わせという点では共通している。「昌以反」と「昌在反」は体例からすると別音と見做すべきだが、恐らく本来は同じ字音を示す字面の異なる反切であったろう。後の音韻変化でこれによって示される音が違ってしまったので、別音と見做して両方を収録したと考えられる。「昌以反」は広韻の「昌里反」と同じ字音を表す。清 徐灝《說文解字注箋》には「箋曰，“改”古音讀如“己”。昌改切，與“芷”同也。唐韻切字多用古音。蓋孫叔然以來相沿未改。日訳：箋が主張するのは、“改”は昔の発音は“己”のようなものだった。昌改切は実際、“芷”の発音と同じものを指しているのだ。唐韻の反切は多くが古い時代のものをを用いている。恐らく孫叔然以来そのまま字面を変えていないのだろう、ということである。」（『說文解字詁林』冊 7, p.265a 下）とある。「己」も「以」、「里」同様、之韻上声止韻に属する。本文では反切「諸市」の上字が誤っているものとして説明を加えたが、或いは「菑」には無気音声母の「諸市」と無気：有気の点でこれとミニマルペアを成す有気音声母の「昌改反」（＝「昌在反」）及びこれと声調だけ異なる去声の「昌敗反」の三音があったと解釈すべきか。

テキスト

最初の2点は必携。他は通行本のうち、当座の利用に有用と思われるものに限定。順不同。

『校正宋本広韻』 芸文印書館の沢存堂影印本。沢存堂は宋本に校訂を施して出版された清代のテキストで最も校訂がしっかりした最良のものとされる。芸文印書館影印本は実のところ、以下の周祖謨『広韻校本』を再印し、注の番号を取り去り、眉頭の注のみを朱にして残したもの。周祖謨『広韻校本』は元の原稿では注は朱だったのかも知れないが、1951年の線装5冊のものが初版で、注は全て黒で印刷されている。この芸文印書館影印本では周祖謨『広韻校本』の巻頭の序文数種の注は一切省略されているが、本文中に加えられた注の番号が一部消し忘れで残っている。妙なことに初版本と第三版を比べてみると、その消し忘れが第三版で増えているので、二版あるいは三版を出版する際に改めて周祖謨校本を影印したものか（第二版は太田未見）。周祖謨校本には索引が附されていなかったが、この影印本には部首索引が加えてある。1967.10 校正初版とあるのが最初と思われる。これには中表紙（沢存堂本の表紙）と重刊広韻序の間に「校正凡例」表裏2頁があり、7項が挙げられている。その第一項目には沢存堂本を底本とし、周祖謨校勘記に拠って張士俊の誤りを正したとある。この「校正凡例」はそれ以降の再印本では省かれている。何度も影印されており、かつては校訂、注釈部分が朱色であったのに近年の影印では単色となってしまった。

龍宇純『韻鏡校注』 芸文印書館,1959,318p. 底本は覆永祿本古逸叢書本。国立台湾大学中国文学系卒業論文選輯之一として、臺静農の1953.9.10の序を附して刊行。横長の油印本で、奥付無し。韻鏡のテキストも手書きであった。その後、改訂を加え、手書きのテキストを古逸叢書本の影印に換え、董同龢の1959.10の序、同じく1959.10の自序を冠して、芸文印書館から出版された（臺静農の序は無い）。初版は1960.3。1966.10再版；1969.2三版。以後、何度も影印されている。現在においてもその校訂は最も優れたものであるが、テキストの影印に関して言えばかなり問題がある。例えば、第二十五転舌音清濁平声の2字が判読困難になっていたり、第十九転牙音清濁入声で「𪛗」の𪛗が𪛗になってしまっていたり、といったような字体の改竄(?)は古逸叢書本自体にはないもので、他の影印本にも見られない。また潰れてしまって判読困難な窠字も、多くは龍書影印の問題で、古逸叢書本に起因するものではない。注釈は手書きで、初版の時点で既に印刷不明瞭なところがあるが、近

年重版のものは不鮮明な箇所が更に増えている。

周祖謨『広韻校本・広韻校勘記』。『校勘記』五巻は中央研究院歴史語言研究所の出版品目録によれば、専刊の no.16 として 1938 年 11 月に商務印書館から石印本で出た（京都大学人文科学研究所漢籍目録には専刊之一とある。太田未見）。『校本』の方は同じく専刊の no.19 として刊行されるはずだったが、刊行されることなく終わった。出版品目録には“稿遺存上海商務印書館未及發行”とある。解放後、1951 年 4 月に中国科学院語言研究所専刊之三として商務印書館から線装 5 冊で刊行されたようで、初版とある。巻頭の「校例」末尾には“二十九年補識”とあるが、これは民国 29 年ということで、後の再印本では削除され、新たに序言が加えられ、末尾には「一九三七年三月周祖謨序、一九五八年重訂。」とある。後の再印本は洋装 2 冊。1988 年 8 月の第二版の『校勘記』には子息周士琦氏による「《広韻校本》部首檢字表」と「刊誤」が新たに加えられた。上掲の『校正宋本広韻』には本書の校勘が盛り込まれている。

余廼永『互註校正宋本広韻』 聯貫出版社, 1974.10, 554p.+索引 151p.+2tables 芸文印書館影印本同様、周祖謨校本を底本として、眉頭の注は朱に、そして小韻代表字の反切も朱にしており、師である周法高の推定音価を加えてある。そして又音も書き出してあるから、大変便利である。以下に掲げる改訂版に比べると、漏れ、誤りがあるものの、索引を附して一冊なので、実は一番使いやすい。

余廼永『新釈互註宋本広韻』 上海辞書出版社, 2000.7, 554p.+校勘記 pp.555-1036+索引 598p.+英文序 pp.61-76; 表 pp.77-88 (底本は沢存堂本。上記の台湾で出版されたものが最初だが、その後増補改訂を重ね、その都度改訂版が香港で出た。これはそのまた増補改訂版。又音を網羅しているところは大変便利だが、合本 1 冊となっているので、重たくて持ち運びが不便。それに高い！又音表記には結構間違いが多いので注意。なお、推定音価は周法高に依拠することを止め、著独自の推定音価に改めた。

余廼永『新校互註宋本広韻 定稿本』(上下), 上海人民出版社, 2008.8, 上(校本部分) 554p.; 下(校勘記) pp.557-983+86p. 上掲書の決定版ということのようである。上冊が校本で、索引は下冊にある。そのため上下とも備えておかなければならないので、使用に当たってはやはり重いと感ずることであろう。

『宋本広韻 附 韻鏡 七音略』(巻頭に魯国堯氏の弁語あり), 鳳凰出版傳媒集団江蘇教育出版社, 2008.10, 160+54p. (広韻は巾箱本。一部欠けているところも他の宋版で補っている。この補っている部分以外は四部叢刊初編所収本とほぼ同じ。韻鏡は古逸叢書本、七音略は元至治二年本『通志』所収本。い

ずれも校訂は施されていない。索引も無し。但し韻鏡と七音略の対応する転図を上下に対照できるようにしているのは、大変便利である。

撰人無考『韻鏡』，古籍出版社，1955.11,106p. 古逸叢書本の影印。「覆永禄本韻鏡 古逸叢書之十八」の字がある表紙とその裏面の「遵義黎氏校刊」も省略していない。これが通行の韻鏡のテキスト中では最良。1976に朋友書店がこれを掌にすっぽり収まるほど小さいサイズに縮刷影印したものもある。小さすぎ！いずれも絶版だが、古書店で入手可能。

『韻鏡』，松雲堂，1929.9（佐藤仁之助序。寛永十八年本の影印。但し数箇所加筆あり）＝北京大学影印本。寛永十八年本は版木のツカレを補修したことによるのか、同一版本のはずなのに、各図書館で確認したところでは微細な点で違いが見られる。松雲堂影印本は残念ながら最良の寛永十八年本と言えない。

『等韻名著五種』泰順書局 1972.5（韻鏡、七音略、四声等子、経史正音切韻指南、音韻学叢書本切韻指掌図をこの順に収める。ここに収める韻鏡は龍宇純『韻鏡校注』を用いたものらしい。このテキストは龍書の影印が序例の部分の最後の空白の一頁を省略したことを踏襲したために、龍書では注釈で埋まっていた3頁を除くことで、見開きで一枚であった転図の全てが、半頁分ずれて一頁表裏で一枚となって見難くなっている。一部文字が歪んで判読し難くなってしまっていたり、字体が変わってしまっていたりしているといった、元の古逸叢書本と違ったところは微細な点に至るまで、ほとんど龍書と一致。古籍出版社及び『等韻五種』では p.104 に相当する p.103 の清原宣賢跋文の末尾陰刻 2行冒頭「頃」字の右肩にある「二」は龍書で付された注の番号を消し忘れたもの)

『等韻五種』芸文印書館影印 1974.9（韻鏡、元至元本の七音略、咫進齋叢書本の四声等子、十萬卷樓叢書本の切韻指掌図、弘治九年金台釈思宜重刊本の経史正音切韻指南をこの順に収める。七音略、切韻指掌図は上掲書所収本と異なる。他にも若干の違い有り。この韻鏡は古籍出版社影印本の海賊版。「覆永禄本韻鏡 古逸叢書之十八」の字がある古逸叢書の表紙とその裏面の「遵義黎氏校刊」を欠く他、当然のことながら出版者説明も無い)

鈴木真喜男解説『寛永五年板韻鏡』(勉誠社文庫 17)，勉誠社，1977.4,125p. 寛永十八年本より早いものだが、テキストとしては劣る。

藤堂明保、小林博『音注韻鏡校本』，木耳社，1971.3, 147p. (総画数索引付き)

李新魁『韻鏡校証』，中華書局,1982.4, 318p.

陳廣忠『韻鏡通釈』，上海辞書出版社，2003.2, 477p.

楊軍『韻鏡校箋』，浙江大学出版社，2007.8, 663p.

- 楊軍『七音略校注』, 上海辞書出版社, 2003.7, 348p.
- 丁声樹編録・李栄参訂『古今字音对照手冊』 中華書局,1958.8,216p. 普通話から中古音を知るのに便利。
- 周法高『漢字古今音彙』 中文大学出版社,1974.5,479p. (カールグレン、董同龢、周法高三氏の推定音価が並べてあるので便利。ただ手書きの細かい字は判読に苦しむ)
- 北京大学中国語言文学系語言学教研室『漢語方音字匯 (第二版)』文字改革出版社,1989.6,370+19p. (初版は手書きだったが、訂正を施し、活字にした。声調符号が小さすぎて分かりづらくなったのが難点)

以下は切韻、広韻諸本の異同、また『韻鏡』について調べたりするときに見るべきもの。必要に応じ、図書館で閲覧すれば良い。

- 上田正『切韻残卷諸本補正』 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター,1973.3, 277p..
- 上田正『切韻諸本反切総覧』 均社,1975.10,222p. (原本切韻の反切と思われるものをテキスト間の異同とともに列挙する)
- 大矢透『韻鏡考』 著者発行,1924.12,220p. ; 後、勉誠社より勉誠社文庫 41 として、小松英雄の解説を附して縮印再刊 1978.9
- 辻本春彦『広韻切韻譜 (第三版)』(均社単刊第二種) 均社,1986.7,106p. ; 森博達編 2008.3, 276p. (広韻の小韻代表字を反切とともに韻図に並べたもの。但しその韻図は韻鏡式ではなく、四声等子式。2008 のものは反切索引、校勘記などを附して、京都産業大学の研究支援を受けて刊行された)
- 辻本春彦「書評馬淵和夫氏著「韻鏡校本と広韻索引」,『国語学』第 19 輯, 1954.12, pp.100-104 ; 小川環樹「補記」, 同 pp.104-105 ; 補記のみは小川環樹著作集第 5 卷, 筑摩書房 1997.5,pp.131-133 に収録されている。
- 藤堂明保・小林博『韻鏡校本』 木耳社,1971.3,147p. (推定音価付き)
- 橋本萬太郎『刊謬補缺切韻韻鏡』 Ms.1965 (王三を『韻鏡』の転図の枠組みで韻図にしたもの。韻鏡順と十六撰順の二種類がある。注は無い。)
- 馬淵和夫『韻鏡校本と広韻索引』日本学術振興会,1954.3,466p. ; 改訂版 1970.1 巖南堂 (旧版と改訂版では韻鏡の底本が異なる。改訂版は最古のテキストたる東京教育大学国語学研究室蔵(現筑波大学蔵) 応永元年(1394) 写本を用いている)

福永静哉『近世韻鏡研究史』風間書房, 1992.2, 814p.

江戸期の様々な韻鏡のテキストについての書誌学研究。

馬淵和夫『日本韻学史の研究』I II III 日本学術振興会, 1962.3, 701p. ; 1963.3, 81p.(pp.703-1157) ; 1965.3, 690+5p.(本文 pp.1-620 通しページ数 pp.1159-1778) ; 更に索引 pp.669-742、跋語 pp.1-5 がある。索引、跋語には通しページは無し) ; 後、訂正と追補記を加えて『増訂日本韻学史の研究』I II IIIとして臨川書店より再刊 701p. ; 81p.(pp.703-1157) ; 742+5p.(本文 pp.1-620 通しページ数 pp.1159-1778。更に昭和 59 年 9 月の追補記 pp.623-666、通しページ数 pp.1781-1824、索引 pp.669-742、跋語 pp.1-5 がある。索引、跋語には通しページ無し) 1984.11

三根谷徹「「韻鏡の序例」考」, 『国学院雑誌』83-11, 1982.11, pp.313-320, 後『中古漢語と越南漢字音』, 汲古書院, 1993.5, pp.147-155 に収録

三沢諄治郎『韻鏡諸本並関係書目』油印自家版, 1951.5, 47+1p.

三沢諄治郎『韻鏡入門』自家版 1953.3 ; 訂正再版, 1956.5, 89p.

三沢諄治郎『韻鏡の研究』自家版, 1960.3, 610+100p.

三沢諄治郎「韻鏡序例の検討(上)」, 『甲南女子短期大学論集』第 6 号, 1962.9, pp.7-24

三沢諄治郎「韻鏡序例の検討(下)」, 『甲南女子短期大学論集』第 7 号, 1963.12, pp.12-25 (韻鏡序文は甚だ読み難いものだが、この論文で大凡のところ、理解できる。もちろん批判的に読まねばならない所もある。)

方孝岳『広韻韻圖』中華書局, 1988.1, 135p. (広韻の小韻代表字を反切付きで韻図形式に並べたもの。韻図の形式は七音略式)

姜亮夫『瀛涯敦煌韻輯』上海出版公司, 1955.10, 線装 4 冊 台湾影印の洋装一冊本あり。

李荣『切韻音系』科学出版社, 1956.10, 182p. ; 初版は中国科学院 1952.5 182p. (初版の誤りを正した改訂版が通行している。台湾の影印本もある。改訂版の方を利用せねばならない。王三の反切を整理して一覧表にし、分析を行っている)

李永富『切韻輯輯』芸文印書館, 1973.1, 線装 8 冊。原本切韻の各小韻の所属字配列順、音注、義注がどのようであったかを知るのに利用すべき書。

劉復等『十韻彙編』線装 4 冊 国立北京大学出版組, 1936 線装の原本は目睹し難いが、台湾影印の洋装一冊本あり。1963.10 影印一版 ; これ以降、何度か影印を繰り返している。入手は容易だが、印刷が不鮮明で、細かい字の判読に苦しむ。魏建功の序「論《切韻》系的韻書」は『國學季刊』1935 年 5 卷 3

期, pp.60-140+書影2葉にも収録され(論文末尾に1936.5.10の日付あり、この雑誌の奥付は1936.7出版とある)、後に『魏建功文集 第二卷』江蘇教育出版社2001, pp.226-292; 『魏建功語言學論文集』商務印書館2012, pp.228-289に再録。但しどちらも書影は省略。

龍宇純『唐写全本王仁昉刊謬補缺切韻校箋』香港中文大学,1968. 王三の写真及び模写と校訂が記されている。王三の影印は民国期に大ぶりの線装本で唐蘭の跋文(1947.11.9)を附して刊行されたが、刊行部数が極めて少なかったので、中々目にすることができない。これも台湾の洋装影印本(広文書局1964.3)があるが、極めて不鮮明。実用ということでは、龍宇純書の模写に頼ることになる。

潘重規『瀛涯敦煌韻輯新編・瀛涯敦煌韻輯別録』文史哲出版社,1974.6,611+92p. 王力『漢語音韻学』中華書局,1956(民国期に『中国音韻学』(大学叢書)上下冊,1936.6; 1937.8として出版されたものを解放後、書名を改めて1冊本として重印。資料集としてなお有用。)

周祖謨『唐五代韻書集存』上下 中華書局,1983.7(台湾版もあり。いずれも写真が甚だ不鮮明)

周祖庠『切韻韻圖』貴州教育出版社,1994.6,194p.(王三を韻図にしたもの。『韻鏡』の枠組みを用いているが、異なる韻目の小韻が同一欄で衝突するのを回避するために、1枚の転図に同居させる韻目は『韻鏡』とは異なっており、全部で52枚の転図がある。)

国立故宮博物院編輯委員會『故宮歷代書法全集 四 冊 晋・唐』1977.7 吳彩鸞『唐韻』(内府本刊謬補缺切韻 即ち王二)が収録されている。最初に小さな写真で全葉を挙げ、その後拡大写真を載せるが、末尾の跋文は小さな写真のみで、小さすぎて判読できない。綴じの部分もカットされていて、小さな写真と対照することで初めて原本の状況が分かる。上田正氏によれば、京都大学に写真が蔵されているらしい。民国期に唐蘭の書写本が1925に線装石印本で出た。こちらは原本に忠実な字配りになっており、末尾の項元沐の跋文もあるが、数々の蔵書印については一切省略されている。また綴じの部分も原本の通りにはなっていない。なお広韻その他の切韻系韻書と対照できるように、断片化されて『十韻彙編』に収められているがそれは線装石印本(=原本)とは異なる字配りとなっている。

敦煌書法叢刊第二卷韻書 1984 二玄社 P2011、P2014の影印。極めて鮮明。巻頭にカラー写真一葉あり。

『宋刻集韻』中華書局1989.5(北京図書館、現国家図書館蔵宋本。四角号碼による索引付き)

- 『集韻』上下, 上海古籍出版社 1985.5 (上冊は上海図書館蔵述古堂影宋鈔本の影印、下冊は四角號碼による索引)
- 『集韻』上中下, 北京市中国書店 1983.7 (揚州使院重刻本の影印。索引無し。校訂の手が加わり、誤りが少ない)
- 『新校索引 經典釈文』陸徳明著、鄧仕樑・黄坤堯校訂索引, 学海出版社, 1988.6, (上) 本文 439p., (下) 索引 552p.,+補校 pp.553-589. 六朝期の反切を多く含むので、古反切の研究に重要。但し陸徳明による改変がどの程度行われているのか不明な点が研究を困難にしている。テキストとしては通志堂本と抱經堂本が通行している。後者の方が校訂に関しては優れるが、前者の方がより忠実に元の体例を保つと言われる。この学海出版社本は通志堂本を底本とし、朱で校勘を施している。大変便利だが、残念なことに底本の影印が不鮮明で、別の影印本と対照して字体の確認をしなければいけないところが少なくないのには閉口する。また手書きの校勘部分は朱になっていない部分もある。

参考文献

気の付いたものを恣意的に挙げたので、偏りや漏れが大いにある。日本語文献は著者名のアイウエオ順、中国語文献は著者の拼音順。

最も易しい入門書

- 頼惟勤『広韻と韻鏡』油印 1974.3, 37p. (反切を実際に整理したり、韻図を自分で作成する作業を通して、韻書、韻図の構成原理を理解させるもの。公刊の計画もあったように仄聞するが、今に至るも未刊)
- 唐作藩『漢語音韻学常識』新知識出版社 1958.5, 86p. (何度も異なる出版社から重版されている。日語訳に以下の2種あり)
- 唐作藩著、池田武雄訳『中国語音韻学研究の手引』京都府立大学中国文学研究室 1962.10, 107p.
- 唐作藩著、本橋春光訳『漢語音韻学入門』明治書院 1979.5, 135p.

全般的な研究・概説

- カールグレン, ベルンハルト(Karlgren, Bernhald) *Étude sur la Phonologie chinoise Archives D'Études Orientales*, Vol.15:1,1915,pp.1-316; Vol.15:2,1916,pp.317-469; Vol.15:3,1919,pp.469-700;Vol.15:4,1924,pp.701-898+1p., J.-A.Lundell, 1919 ; 北京

で合冊影印されたものあり。それには『中華語音学研究』とある。；中国語訳『中国音韻学研究』趙元任、羅常培、李方桂等、1940.9, 731p.+1plate。原著の特殊な音声表記を IPA に直し、著者と連絡を取って入念に訳出した。中国語訳は台湾で何度も影印されており、大陸でも複数種影印本がある。魚返善雄氏が日本語訳を行ったという話もあるが、結局公刊されるには至らなかった。

平山久雄「中古漢語の音韻」牛島徳次等編『中国文化叢書 1 言語』大修館書店,1967.11,pp.112-166 (音韻論第3章) 中古音の概説としては最も詳細。

大野晋・頼惟勤「万葉仮名の字音研究の手引き」『万葉集大成』11,平凡社,1955.4,pp.329-390

大島正二『唐代字音の研究』汲古書院,本文篇 1981.2 ; 資料索引 1981.6

頼惟勤「中国音韻史上の問題点」『中国音韻論集』(頼惟勤著作集 I) 汲古書院,1989.2,pp.30-46 ; 元『お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要』27,1982.3

藤堂明保『中国語音韻論』,江南書院,1957.1,358p. ; 後誤植を訂正、参考文献を増補して『中国語音韻論—その歴史的研究—』光生館,1980.5,409p.

董同龢『漢語音韻学』王守京(董同龢夫人)発行,1968.9 (『中国語音史』(現代国民基本知識叢書第二輯) 中国文化出版事業委員会,1954.2 の改訂版。どちらもその後リプリント版が出版されている。最近は大陸でも出版された。中華書局,2001.10 中国語で書かれた音韻学の概説書は数多くあるが、今なおこれが最もすぐれていると思う。)

張世祿『広韻研究』(國学小叢書),商務印書館, 1933.2,274p.

中国語学研究会『中国語学新辞典』光生館,1969.10,339p.

《中国语言学大辞典》編委会《中国语言学大辞典》江西教育出版社,1991.3,1174p.

中国大百科全书总编辑委员会《中国大百科全书・语言 文字・》中国大百科出版社, 1988.2, 605p.

慧琳音義の音韻体系

黄淬伯『慧琳一切経音義反切攷』(国立中央研究院歴史語言研究所專刊之六), 1931.6, 線装 217+1p.

神尾弼春^{かずはる}『慧琳一切経音義反切索引』, 自家版, 1976.5, 507p.

神尾弼春『慧琳一切経音義反切索引補正録』, 自家版, 1977.5, 105p.

神尾弼春『慧琳一切経音義反切索引補正追録』, 自家版, 1979.6, 48p.

神尾弼春『慧琳一切経音義の摸索』, 自家版, 1980.5, 93p.

河野六郎「唐代長安音に於ける微母に就いて」,『中国文化研究会会報』4-1,

1954.9, 後『河野六郎著作集 2 中国音韻学論集』,平凡社, 1979.11, pp.249-259

に収録

河野六郎「慧琳衆經音義の反切の特色」、『中国文化研究会会報』5-1, 1955.11,
後『河野六郎著作集2 中国音韻学論集』, 平凡社, 1979.11, pp.261-266 に収録

河野六郎「朝鮮漢字音の研究」『河野六郎著作集2 中国音韻学論集』 平凡社, 1979.11, pp.295-512、及び別冊所載音韻表; 元『朝鮮学報』31~33, 35.41~44
1964.4~1967.7 に掲載。後、合冊されて単行本として刊行されたものもある。
天理時報社 1968.9

三根谷徹「唐代標準語音について」、『東洋学報』57-1・2, 1976.1, pp.01-016,
後『中古漢語と越南漢字音』, 汲古書院, 1993.5, pp.115-129 に収録
上田正『慧琳反切総覧』, 汲古書院, 1987.2, 254+1p.

四声相配

董同龢『上古音韻表稿』中央研究院单刊甲種之二十一, 石印本 1944.12 (未見);
歴史語言研究所集刊第十八本, 1948.9, pp.1-249; 後に中央研究院单刊甲種之
二十一として、集刊第十八本所載のものを取り出して再刊, 1967.6 (これは
後に幾度も影印されている)。なお、本稿で言及した点に関しては、特に必要
ないが、間違いが多いので、慶谷壽信編『董同龢「上古音韻表稿」索引 附
訂正表』采華書林, 1969.1 序 (奥付無し) を利用する必要がある。

三十六字母

遠藤光暁「敦煌文書 P2012「守温韻学残卷」について」『中国音韻学論集』白
帝社, 2001.3, pp.138-161; 元『青山学院大学一般教育論集』29, 1988.11, pp.87-105
唐蘭「守温韻学残卷所題“南梁”考」『(上海) 申報 (文史 26 期)』1948.6.5

反切

岡井慎吾『五經文字箋正・九經字樣箋正』商務印書館, 1926.1
岡井慎吾『玉篇の研究』(東洋文庫論叢第 19) 東洋文庫, 1933.12; 1969.8
小西甚一『文鏡秘府論考 研究篇上』大八洲出版株式会社, 1948.4, 554p.
坂井健一『魏晉南北朝字音研究』汲古書院 1975.3, 398+299+1p.
坂井健一『中国語学研究』汲古書院 1995.12, 746p. (『經典釈文』に関する論
文が纏めて収録されている)
高明「反切的起源」『慶祝毛子水先生包明叔先生齊鉄恨先生丁治磐先生秩華誕文
集』所収; 後『高明小学論叢』黎明文化事業公司, 初版 1971.1 (1978.7 の誤
り?); 再版 1980.9, 516p. に再録, pp.214-229

陸志韋「古反切是怎样構造的」『中国語文』1963年第5期,pp.349-385
 龍宇純「例外反切之研究」『中央研究院歷史語言研究所集刊』36
 上,1965.12,pp.331-373

重紐

- 有坂秀世「漢字の朝鮮音について」『国語音韻史の研究増補新版』三省堂,1957.10,
 pp.303-326 ; 元『方言』1936.1に掲載
- 有坂秀世「カールグレン氏の拗音説を評す」『国語音韻史の研究増補新版』三省
 堂, 1957.10, pp.327-357 ; 元『音声学協会報』49,51,53,58, 1937.11,
 1938.3,1938.7,1939.7に掲載
- 平山久雄「唐代音韻史における軽唇音化の問題」『北海道大学文学部紀要』
 15-2,1967.3, pp.1(242)-59(184)
- 河野六郎「玉篇に現れたる反切の音韻的研究」『河野六郎著作集2 中国音韻学
 論集』平凡社,1979.11,pp.3-154、及び別冊所載音韻表 ; 元は1937.3に東大に
 提出された卒論
- 河野六郎「朝鮮漢字音の一特質」『河野六郎著作集2 中国音韻学論集』平凡
 社,1979.11,pp.155-180 ; 元『言語研究』3,1939.9に掲載
- 三根谷徹「韻鏡の三・四等について」『中古漢語と越南漢字音』汲古書院
 1993.5,pp.45-62 ; 元『言語研究』22・23 1953.3,pp.56-74
- 三根谷徹「中古漢語の韻母の体系一切韻の性格一」『中古漢語と越南漢字音』汲
 古書院 1993.5 pp.67-83 ; 元『言語研究』31 1956.3,pp.8-21
- 三根谷徹『越南漢字音の研究』『中古漢語と越南漢字音』汲古書
 院,1993.5,pp.211-536 ; 元、東洋文庫論叢第53,1972.3として刊行
- 董同龢「広韻重紐試釈」『董同龢先生語言学論文選集』1964.11,pp.13-32 ; 元『六
 同別録』(歴史語言研究所集刊外編第三種) 上冊 1945.1,pp.1-20 (通し頁数無
 し) ; 『国立中央研究院歷史語言研究所集刊』13,1948,pp.1-20
- 董同龢「全本王仁煦刊謬補切韻的反切上字」『董同龢先生語言学論文選集』
 1964.11, pp.101-112 ; 元『国立中央研究院歷史語言研究所集刊』23,1952.7,
 pp.511-522
- 董同龢「全本王仁煦刊謬補切韻的反切下字」『董同龢先生語言学論文選集』
 1964.11, pp.113-152 ; 元『国立中央研究院歷史語言研究所集刊』19,1948,
 pp.549-588
- 周法高「広韻重紐的研究」『中国語言学論文集』崇基書店,1968.12,pp.1-69 ; 元『六
 同別録』(歴史語言研究所集刊外編第三種) 上冊 1945.1,pp.1-66 (通し頁数無
 し) ; 後『国立中央研究院歷史語言研究所集刊』13,1948,pp.49-117

30.2.類相関

- 辻本春彦「いわゆる三等重紐の問題」『均社論叢』5-1(Vol.6),1978.3,pp.66-70 ; 元『中国語学研究会会報』24,1954.3 に掲載
- 平山久雄「切韻における蒸職韻と之韻の音価」『東洋学報』49-1,1966.6,pp.42-68
- 平山久雄「切韻における蒸職韻開口牙喉音の音価」『東洋学報』55-2,1972.9,pp.64-94
- 松尾良樹「広韻反切の類相関について」『均社論叢』1-1,1974.9,pp.2-8
- 周法高「三等韻重唇音反切上字研究」『中国語言学論文集』崇基書店,1968.12, pp.239-261 ; 元『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』23,1952.7,pp.385-407

類隔切

- 遠藤光暁『切韻』小韻の層位分け『中国音韻学論集』白帝社,2001.3,pp.25-43 ; 元『青山学院大学一般教育論集』30,pp.93-108,1989.11
- 平山久雄「中古音における舌頭音・舌上音の対立語例の成因について」『日本中国学会報』第二十集, 1968, pp.140-151
- 松尾良樹「祭韻系の問題」『アジア・アフリカ言語文化研究』16,東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所,1978,pp.83-89
- 董同龢「等韻門法通釈」『董同龢先生語言学論文選集』1964.11,pp.33-82 ; 元『六同別録』(歴史語言研究所集刊外編第三種)下冊,1945(未見)、後『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』14,1948,pp.257-306
- 邵榮芬『經典积文音系』学海出版社,1995,541p.

庚韻三等と清韻

- 河野六郎「玉篇に現れたる反切の音韻的研究」『河野六郎著作集2 中国音韻学論集』平凡社 1979.11,pp.3-154、及び別冊所載音韻表 ; 元は 1937.3 に東大に提出された卒論
- 佐々木猛「庚清韻贅説」『伊地智善継・辻本春彦両教授退官記念 中国語学・文学論集』伊地智・辻本両教授退官記念論集刊行会 東方書店,1983.12,pp.418-438

12.韻鏡所拠切韻は何か

- 小川環樹「説文篆韻譜と李舟切韻」,417-415 ; 『小川環樹著作集』第一巻,筑摩書房,1997, pp.357-365
- 神田喜一郎「元版説文解字篆韻譜」『ビブリア』17,1960.11,pp.4-5
- 工藤早恵「十卷本『説文解字篆韻譜』について」,『人文学報』No.213,東京都立

- 大学人文学部,1990.3,pp.49-63
- 工藤早恵「十卷本『説文解字篆韻譜』所據の切韻系韻書について」,『中國文學研究』第17期,早稲田大學中国文學會,1991.12,pp.38-53
- 吉田早恵「『四庫全書総目提要』所載「説文解字篆韻譜」訳注」,『開篇』2,1986.10,pp.37-45
- 吉田早恵「『説文解字篆韻譜』伝本考」,『中国語学』234,1987,pp.1-10
- 頼惟勤「『切韻』について」,『宇野哲人先生白寿祝賀記念東洋学論叢』,宇野哲人先生白寿祝賀記念会(代表加藤常賢)編集,発行,1974,pp.1-20;後『中国音韻論叢』(頼惟勤著作集Ⅰ),汲古書院,1989,pp.207-221
- 孔仲温『韻鏡研究』台湾学生書局,1987.10,222p.
- 魯国堯「『《盧宗邁切韻法》述評』『中国語文』1992年6期 pp.401-409、1993年1期 pp.33-43;後、改訂し『魯国堯自選集』(河南教育出版社1994,pp.95-96);更に改訂し「『《盧宗邁切韻法》述論』『魯国堯語言学論文集』(江蘇教育出版社,2003,pp.326-379
- 羅常培「《通志・七音略》研究—景印元至治本《通志・七音略》序—」『中央研究院歷史語言研究所集刊』第五本第四分,1935,pp.521-535;『羅常培語言学論文選集』中華書局,1963.9,pp.104-116
- 羅常培<切韻序校釋>,《國立中山大學語言歷史研究所週刊》第三集 第二十五六七合刊(切韻專號),1928.5.2.,pp.6-25
- 王国維「李舟切韻考」『觀堂集林』卷8

13. 撰と等位

- 魯国堯「『《盧宗邁切韻法》述評』『中国語文』1992年6期 pp.401-409、1993年1期 pp.33-43;後、改訂し『魯国堯自選集』(河南教育出版社1994,pp.95-96);更に改訂し「『《盧宗邁切韻法》述論』『魯国堯語言学論文集』(江蘇教育出版社,2003,pp.326-379

25.2 重紐韻の韻図における配置

ベトナム漢字音

- 三根谷徹『越南漢字音の研究』(東洋文庫論叢第53),1972.3,本文 pp.1-171,越南漢字音対照表 pp.1-103,中古漢語索引 pp.105-131;後、『中古漢語と越南漢字音』汲古書院,1995.5,543p.の pp.211-536 に収録
- 王力<汉越语研究>,《岭南学报》9,1948,pp.1-96;后收录于《汉语史论文集》科学出版社,1958.5,pp.290-406。この他、王力文集など幾つかの論文集にも再録されている

29.3 内外

峯村三郎「韻鏡の内外転について」、『藤岡勝二博士功績記念論文集』, 岩波書店, 1935, pp.447-486

峯村三郎「再び韻鏡の内外転について」、『国士舘大学人文学会紀要』6, 1974, pp.109-121

三根谷徹「韻鏡における歌(戈)韻の位置」『東洋学報』35-3・4, 1953.3., pp.81-89 ; 後、『中古漢語と越南漢字音』汲古書院, 1995.5, 543p.の pp. 85-101 に収録

その他

遠藤光暁「臻摂韻の分韻過程と莊組の分布」『中国音韻学論集』白帝社,2001.3,pp.67-97 ; 元『日本中国学会報』42,pp.257-270,1990.10

遠藤光暁「『切韻』における唇音の開合について」『中国音韻学論集』白帝社,2001.3,pp.82-97 ; 元『日本中国学会報』43,1991.10,pp.247-261

太田齋「虚構の字音、虚構の小韻—乏韻溪母小韻は実在したか—」『開篇』Vol.24,2005.3,pp.1-13

太田齋「唇音下字反切の開合問題」、『佐藤進教授還暦記念中国語学論集』, 佐藤進教授還暦記念中国語学論集刊行会, 好文出版, 2007.4.12,pp.125-144

太田齋「[講義稿]古代の四声と普通話の四声の対応関係」『神戸市外国語大学外国学研究』76 (『アジア言語論叢』第8号), 2009 (2010.3.25), pp.95-131

太田齋「韻図における唇音字の開合配置」『開篇』Vol.30,2011.9,pp.54-88

太田齋「于母重紐問題と助紐字を巡る臆説」、『開篇』Vol.31, 2012, pp.226-250

小川環樹「等韻図と韻海鏡源——唐代音韻史の一側面」『言語研究』19/20,1951.12 ; 『中国語学研究』創文社,1977.3,pp.66-76

小川環樹、辻本春彦「馬淵和夫『韻鏡稿本と広韻索引』評補記」; 小川先生の部分だけは『小川環樹著作集』第5巻, 筑摩書房, 1997.5,pp.131-133 に再録

中村雅之「没 (mei) について (三説)」『KOTONOH』20,古代文学資料館, 2004.7.22,pp.1-3

平山久雄「ドミエヴィル氏の「白話語彙における古音の保存」説について」『中国文学研究』22,早稲田大学中国文学會,1996.12, pp.106-117

平山久雄「『韻鏡』『七音略』に関わる転図の併合・分離について」『東洋学報』84-4,2003.3, pp.01(556)-022(535)

平山久雄「上古漢語の音素体系」, 『開篇』25,2006.5,pp.1-23

松尾良樹「幽韻小論」『均社論叢』5-1(Vol.6),1978.3,pp.1-15

- 三沢諄治郎『訂正版 韻鏡入門』自家版,1956.5,89p. (初版は 1953.3)
- 頼惟勤「中古中国語の喉音韻尾」『中国音韻論集』(頼惟勤著作集Ⅰ) 汲古書院,1989.2,pp.222-227 ; 元『東大中文学会会報』7,1956.6,pp15-18
- 陸志韋<證廣韻五十一聲類>《燕京大學學報》第 25 期, 1939.6, pp.1-58+2tablez;
後收於《漢語音韻學論集》第一集 陸志韋, 崇明書局, 1971.5,pp.119-176+2tables,;
《陸志韋語言學著作集(二)》中華書局, 1999.3,710p.,373-431p.; 《中國社會科學院學者文選 陸志韋集》中國社會科學出版社, 2003.4,483p.,pp.1-55+2tables
- 王力「南北朝詩人用韻考」『清華學報』11 卷 3 期,1936,pp.783-842 ; 『漢語史論文集』科學出版社 1958.5,pp.1-59 ; 『龍蟲並雕齋文集』第一冊,中華書局,1980.1,pp.1-62 ; 『王力文集』第 18 卷,山東教育出版社,1991.3,pp.3-73
- 曾運乾<切韻五聲五十一紐考>《東北師大季刊》第一期, 1928; 後收於《聲韻學論文集》(國學論文薈編 第三輯), 陳新雄 于大成主編, 木鐸出版社, 1976.5, pp107-116; 作為第三章<廣韻之五聲五十一紐>, 節錄於《音韻學講義》中華書局 1996.11, 576p,pp.119-131

韻書と等韻図 I 正誤表

頁/行	誤	→	正
4/17	[take]		[take]
13/12	六千年		五千年
22/8	異動		異同
25/-9	そして周法高 Zhōu Fǎgāo の推定音価が朱で示されていて、 → そして最初のバージョンでは周法高 Zhōu Fǎgāo の推定音価が朱で示されていた。改訂後にはこれに修正を加えた余廼永氏自身の推定音価に改められた。		
25/--4	周氏の		周氏、余氏の
32/16	敢韻と四声相配の関係にあるのは → 敢韻を四声相配の関係で言えば		
46/-6	陳澧 Chén Lǐ		陳澧 (ピンイン削除)
47/-13	「9.芬：撫文反」		「9.芬：撫文切」
49/9	4-07.入：尔執 (入執)		→入：尔執 (人執)
60/11	古 gū		古 gǔ
64/11	陟(端 _細) 丑(透 _細)		直(定 _細) 女(泥 _細) → 陟(知=端 _細) 丑(徹=透 _細) 直(澄=定 _細) 女(孃=泥 _細)
71/-4	穿二等		穿母二等
80/10	両唇音の一部が唇齒音化した → 拗介音と結びついた両唇音の一部が唇齒音化した		
83/9	この系等に属する		この系統に属する
99/14	韻類はどの等位		韻類は韻図のどの等位
121/7	一つの韻と見做し、		一つの韻とし、
121/-6	正歯音の照組の二、三等の照組声母		正歯音の照組の声母
122/-6	他の一、二四等韻		他の一、二、四等韻
128/10	が継承し、		が継承され、
132/3	15.第十五転 (合)		15.第十五転 (開)
135/6	第 39,40 転の二枚の		第 39,40 転及び第 41 転の三枚の
137/18	(31)、		(31)。
143/5	「麥：寫邪」		「麥：陟邪」
143/7	「麥」		「麥」
143/9	「麥」		「麥」
143/10	「麥」		「麥」

- 143/11 「縵: 都下」 → 「縵: 都下」
- 143/-11 記載漏れするようなもの → 記載漏れを後に補ったもの
- 144/5 既にある小韻と → 既に存在している小韻と
- 144/-14 増加小韻のペアの関係は → 増加小韻とのペアの関係は
- 145/-14 現在汉语词典 → 現代汉语词典
- 146/-10 β 韻 三等の段のみに並びもの。 → 三等の段のみに並ぶもの。
- 146/-8 微廢欣文元庚二嚴凡 微廢欣文元庚三嚴凡
- 152/5 遣(去演切) kion → 遣(去演切) k^hion
- 154/-1 右端の全濁に → 右端の次濁に
- 154 (下段 42'の右表 匣母の下) 全清 → 全濁
- 154 (下段 42'の右表 左端) 全濁 → 次濁
- 156 (43.第 25 転(開)の一等 傑 → 豪 (四か所)
- 159/9 相配する上声小韻曉母 → 曉母小韻
- 159/14 「休: 許彪切」 「休(>休): 許彪切」(「休」は尤韻字)
- 165/11 「怯: 居劫切」 → 「怯: 去劫切」
- 165/16(-14) 等重唇音 → 重唇音
- 167/14 同一である、舌音の → 同一である。舌音の
- 169/-18 そもそも第 40 転は → そもそも第 41 転は
- 173/8 捨象してるから → 捨象しているから
- 174/10 纏めてみると、以下のようになる。
→ 纏めてみると、7.掇と内転、外転で示した一覧表は以下のようになる。
- 175/16 このうち之韻は → 之韻は
- 184/2 昔韻に所属すべきもので → 陌韻に所属すべきもので
- 184 55b. 唇音四等の段 ×××× → 青青青青
- 185 55c. 唇音四等の段 ×××× → 青青青青
- 193/-12 それぞれの帰属を A,B,C として → それぞれの帰属を A,B として
- 201/2 彪: 甫休 → 彪: 甫休(>休)
- 201/3 王二「補休」; → 王二「補休(>休)」;
- 201/-2 「彪: 甫休」 → 彪: 甫休(>休) (「休」は尤韻字につき、今「休」の省体と見做す)
- 208 (二番目の転図) 69(=66') 第 22 転 (合) → 69(=67') 第 22 転 (合)
- 209/-12 62~65 のようであったら → 64~67 のようであったら
- 210/-2 仙韻莊組小韻 → 仙韻莊組小韻
- 213/25 この字は → この字「乚」は

- 214/ 74.第9転(開)(止摂微) 三等唇音の欄 ○○○○
→ ××××
- 232/11 tuΛ' → tuΛ
- 234/2 *tɕ^hΛi → *tɕ^hΛi(>*tɕ^hiΛi)
- 234/-14 読むと齒等音で、 → 読むと齒頭音で、
- 238/17 大(>大?)甲 → 大(>丈?)甲
- 249/1 せて哈韻に収録した。 せて哈韻上声海韻に収録した。
- 249/1 韻書に収録された哈韻 韻書に収録された海韻
- 257/4 ʏək → ʏək

補注のそのまた補足として：

24.1.2.4.山摂の場合 (pp.139-140) 及び **29.7.1.梗摂の問題点** (pp.184-188) で指摘した両摂の転図の配列順の問題は、太田齋「于母重紐問題と助紐字を巡る臆説」、『開篇』Vol.31, 2012.10.1, pp.226-250 の説によって私見を提示しておく必要がある。但しこの論文は改訂版を準備している。それに依るのが望ましい。